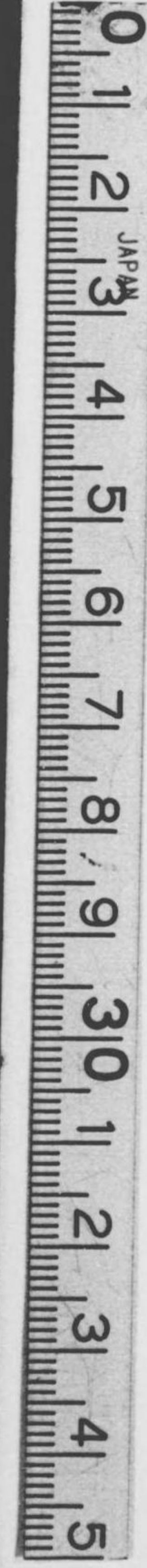
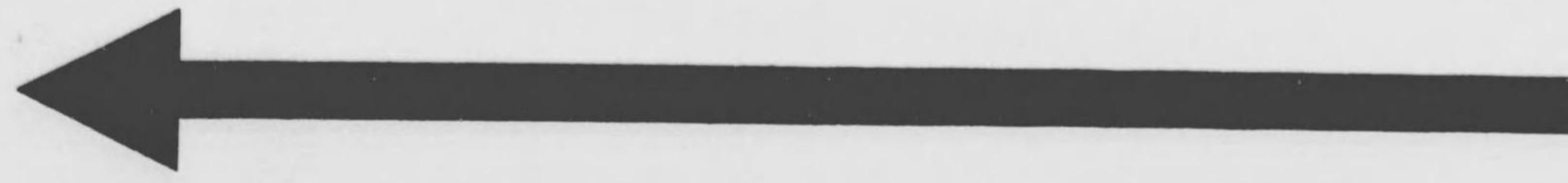


22



始





353

283





353-28  
~~399-7~~



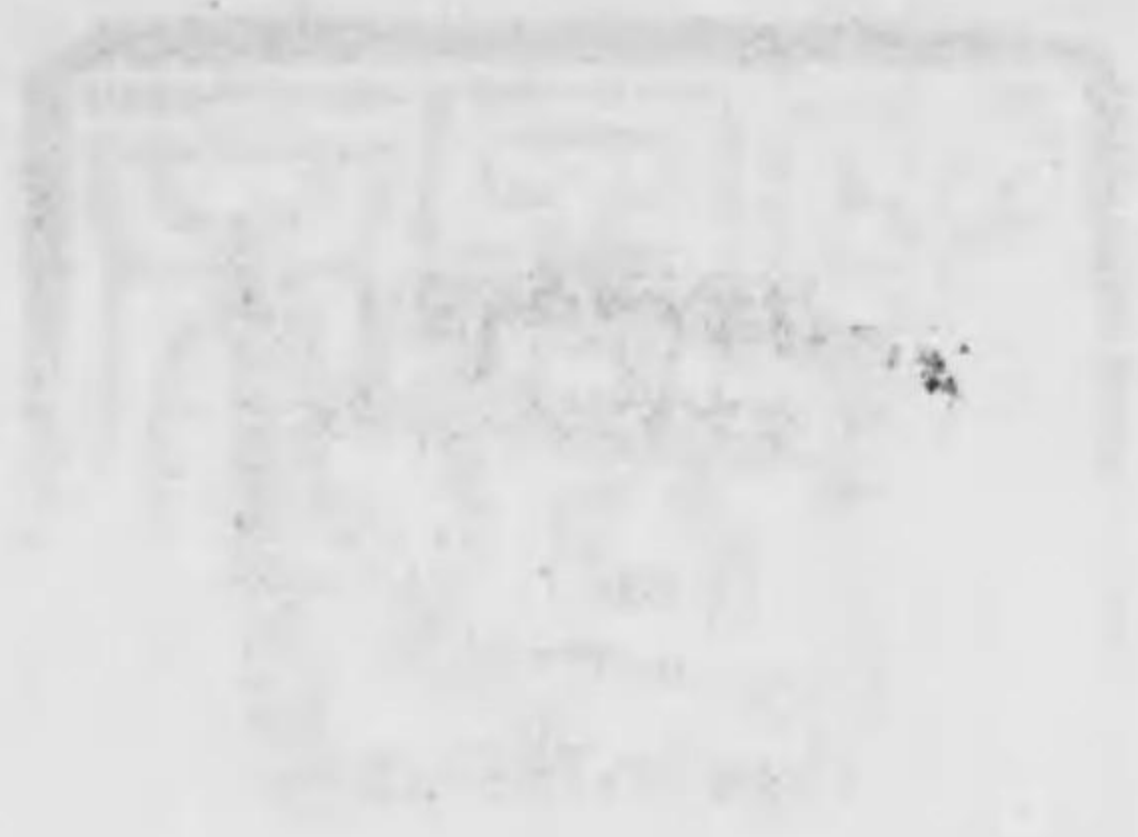
國譯密教

論

輝  
矢正

9. 11. 15  
内交





國譯密教論釋第一

目次

一、國譯即身成佛義……………塚本賢曉國譯……………一

一、國譯聲字實相義……………塚本賢曉國譯……………一七

一、國譯卍字義……………塚本賢曉國譯……………三三

一、國譯辯顯密二教論……………塚本賢曉國譯……………五三

一、國譯般若心經祕鍵……………塚本賢曉國譯……………八七

一、國譯金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論……………塚本賢曉國譯……………九九

一、國譯祕藏寶鑰……………岡田契昌國譯……………一一一

一、國譯祕密曼荼羅十住心論……………塚本賢曉國譯……………一七三

一、國譯真言淨菩提心私記……………塚本賢曉國譯……………四九一



一、國譯真言宗即身成佛義章……………市橋本賢國譯……………五一七

一、國譯五輪九字明祕密釋一卷……………阿都宥精國譯……………五四九

### 國譯密教論釋第一目次終

(一)三劫成佛は無限の時を數量にて示す、無限の時間の修行にて佛となること。  
 (二)即身成佛現身のまゝにて佛になること。  
 (三)祕密藏、祕密の奧藏、眞言の經典なり。  
 (四)金剛頂經、金剛頂一字頂輪王瑜伽念誦儀軌、修する法。  
 (五)佛菩提、覺りの位。  
 (六)歡喜地、修行して得たる菩薩の最初の位。  
 (七)後十六生、菩薩修行に十六の次第あり、十六の後と云ふ。  
 (八)自内證、祕密を指す。  
 (九)顯教、密教以外の佛敎。  
 (一〇)初地、菩薩最初の位。  
 (一一)自家佛乘、眞言正宗。  
 (一二)地位品、華嚴經十地位品。

## 國譯即身成佛義

問て曰く、諸經論の中に皆(一)三劫成佛と説く、今(二)即身成佛の義を建立する何の憑據かある。答ふ、(三)祕密藏の中に如來かくの如く説きたまふ、彼の經説云何ん、(四)金剛頂經に説かく、この(五)三昧を修するものは、現に(六)佛菩提を證す、この三昧とは、謂く大日尊又云く、若し衆生ありて此の經に遇ふて晝夜四時に精進して修すれば、現世に(七)歡喜地を證得し、(八)後の十六生に正覺を成す。

謂く此の教とは、法佛の(九)自内證の三摩地大教王を指す、歡喜地とは(一〇)顯教に言ふ所の(一一)初地には非ず、是れ即ち(一二)自家佛乘の初地なり、具に説くこと(一三)地位品の中の如し、十六生とは十六大菩薩生を指す、具には地位品に説くが如し。

また云く、若し能く此の勝義に於て修すれば、現世に無上覺を成ずることを得。また云く、當さに知るべし自身即ち(一四)金剛界となる、自身金剛となんぬれば、堅實にして傾壞なし、我れ金剛身となる。大日經に云く、此の身を捨てずして、(一五)神境通



(一) 金剛界 智身  
 (二) 神境通 神變  
 (三) 不思議なる通力  
 (四) 尊 大阿闍梨  
 (五) 成就 正覺を  
 (六) 成就するの意  
 (七) 持明悉地 諸  
 (八) 尊中の一尊に就て  
 (九) 正覺を得 諸  
 (十) 尊に就て廣く正覺  
 (十一) 尊を得  
 (十二) 法佛の三密  
 (十三) 如來の身と口と意  
 (十四) 等の三密  
 (十五) 等覺 華嚴宗  
 (十六) にて覺りたる最上  
 (十七) の者  
 (十八) 十地 天台宗  
 (十九) の者 覺りたる最上  
 (二十) の者  
 (二十一) 三摩地の法  
 (二十二) 即身成佛の教  
 (二十三) 佛慧 實の如  
 (二十四) く自心を知る智慧  
 (二十五) なり  
 (二十六) 六大 地水火  
 (二十七) 風空の五大と識  
 (二十八) (心)大と合せて  
 (二十九) 六大と稱す  
 (三十) 瑜伽 相應涉  
 (三十一) 入と釋す  
 (三十二) 四種曼荼 萬

を逮得し、大空位に遊歩して、而も身秘密を成す。

また云く、此の生に於て悉地に入らんと欲は、その所應に隨ひてこれを思念せよ、  
 親り(一)尊の所に於て明法を受け、觀察し相應すれば(二)成就を作す。

此の經に説く所の悉地とは、(三)持明悉地及び(四)法佛悉地を明す。大空位とは、法身は  
 大虛に同じて無礙なり、衆象を含むで常恒なり、故に大空といふ。諸法の依住する所  
 なるが故に位と號す。身秘密とは、(五)法佛の三密は(六)等覺も見がたく(七)十地も何ぞ窺  
 はん、故に身秘密と名づく。

また龍猛菩薩の菩提心論に説かく、眞言法の中にのみ即身成佛するが故に、是れ(八)三  
 摩地の法を説く。諸教の中に於て闕して書せず。是れ三摩地を説くとは法身自證の三  
 摩地なり、諸教とは他受用身所説の顯教なり。また云く、若し人(九)佛慧を求めて、菩  
 提心に通達すれば、父母所生の身に、速かに大覺の位を證す。

是の如く等の教理證文に依りて、此の義を成立す。是の如くの經論の字義差別云何ん。  
 頌に曰く、

(一〇) 六大無礙にして常に(一一)瑜伽なり體 (一二) 四種曼荼各の離れず相

法の實相を正確に  
 表現したる四種類  
 (一) 薩般若 佛智  
 (二) 心數心王 心  
 (三) 王は心の根本  
 (四) これより派生する  
 (五) 心數  
 (六) 本體の根  
 (七) 本體の流  
 (八) 相 本體の活  
 (九) 轉のすがた  
 (十) 用 本體の活  
 (十一) 動 用  
 (十二) 在なること 自由自  
 (十三) 在なること 此處  
 (十四) 相は四曼、用は三  
 (十五) 密、無礙は生佛の  
 (十六) 三密は圓融無礙な  
 (十七) るを示す  
 (十八) 法爾自然の理具の  
 (十九) 成佛  
 (二十) 成佛 加持の  
 (二十一) 成佛 顯得の  
 (二十二) 成佛 顯得の  
 (二十三) 所以 成佛の  
 (二十四) 具 大日經 第二  
 (二十五) 具 我れ本不生云  
 (二十六) 云 自心は本來不  
 (二十七) 生なるものにして  
 (二十八) 即身成佛なること

三密加持すれば速疾に顯る用 重重帝網なるを即身と名く無礙

法然に(一)薩般若を具足して (二)心數心王刹塵に過ぎたり

各の五智無礙智を具す 圓鏡力の故に實覺智なり成佛

釋して曰く、此の二頌八句は、以て即身成佛の四字を歎す、即ち是の四字に無邊の義  
 を含せり。一切の佛法は此の一句を出でず、故に略して兩頌を樹て、無邊の徳を顯す。  
 頌文を二に分つ。

初めの一頌は即身の二字を歎じ、次ぎの一頌は成佛の兩字を歎す。初めの中に又四あ  
 り、初めの一一句は(一)體、二には(二)相、三には(三)用、四には(四)無礙なり。後の頌の中に  
 四つあり、初めには(五)法佛の成佛を擧げ、次ぎには(六)無礙を表し、三には(七)輪圓を顯  
 し、後には(八)所由を出す。謂く六大とは、五大と及び識となり、(九)大日經に謂ふ所  
 の、(一〇)我れ本不生を覺り、語言の道を出過し、諸過を解脱することを得、因縁を遠離  
 せり、空は虚空に等しと知る。是れその義なり。彼の種子眞言に曰く、

(一一) 我れ本不生云云 自心は本來不  
 生なるものにして  
 即身成佛なること  
 爲く、阿字諸法本不生の義とは、即ち是れ地大なり。縛字離言説とは、これを水大と

國譯即身成佛義



一、地一諸法  
 二、水一離言說  
 三、火一清淨無垢  
 四、風一因業不可得  
 五、空一我覺大日  
 六、因位一修行中の位  
 七、識一了別する  
 八、果位一覺りの位  
 九、智一無明を照す  
 十、識大  
 十一、我覺大  
 十二、阿闍如來、實如來、阿彌陀如來、釋迦如來、是れ大日如來なり  
 十三、四佛を分ちて見れば、五佛なり  
 十四、諸法一諸法の自然の性、即ち識大の本體  
 十五、天觀一諸法の大體

謂ふ。清淨無垢塵とは、是れ則ち囉字火大なり。因業不可得とは、訶字門風大なり。等虚空とは、欠字の字相即ち空大なり。我覺とは識大なり、(一)因位には(二)識と名け(三)果位には(四)智と謂ふ、智即ち覺なるが故に、梵音の<sup>ボウヂ</sup>ボウヂは一字の轉なり、<sup>ボウヂ</sup>ボウヂは覺と名づけ、<sup>ボウヂ</sup>ボウヂは智といふ。故に諸經の中に謂ふ所の<sup>ウシヤクサンボウヂ</sup>ウシヤクサンボウヂとは、古くは遍知と翻じ、新には等覺と譯す、覺知の義相ひ渉るが故に。此の經に、(五)識を號して(六)覺と爲ることは、強きに從へて名を得。因果の別、本末の異りのみ。此の經の偈は、(七)五佛の三摩地に約して是の如くの説を作す。  
 また金剛頂經に云く、(八)諸法は本より不生なり、(九)自性は言説を離れたり、清淨にして垢染なし、因業なり虚空に等し、此れまた大日經に同じ。諸法とは謂く諸の心法なり、心王心數その數無量なり、故に諸と曰ふ。心識名異にして義通せり、故に(一〇)天親等は(一一)三界唯心を以て、唯識の義を成立す、自餘は上の説に同じ。  
 また(一二)大日經に云く、我れ即ち心位に同なり、一切處に自在にして、普く種種の有情及び非情に遍せり、<sup>アア</sup>アア字は第一命なり、<sup>ハハ</sup>ハハ字を名けて水となす、<sup>アア</sup>囉字を名けて火となす、<sup>フン</sup>フン字を名けて風となす、<sup>クハ</sup>破法字は虚空に同じ。

及び護法の三論唯  
 一、華嚴經の三論唯  
 二、心法以て唯識の說  
 三、心法以て唯識の說  
 四、心法以て唯識の說  
 五、心法以て唯識の說  
 六、心法以て唯識の說  
 七、心法以て唯識の說  
 八、心法以て唯識の說  
 九、心法以て唯識の說  
 十、心法以て唯識の說  
 十一、心法以て唯識の說  
 十二、心法以て唯識の說  
 十三、心法以て唯識の說  
 十四、心法以て唯識の說  
 十五、心法以て唯識の說  
 十六、心法以て唯識の說  
 十七、心法以て唯識の說  
 十八、心法以て唯識の說  
 十九、心法以て唯識の說  
 二十、心法以て唯識の說

此の經文の初めの句に、我れ即ち心位に同なりとは、所謂る心は則ち識智なり、後の五句は即ち是れ五大なり、中の三句は六大自在の用無礙の徳を表す。(一)般若經及び(二)瓔珞經等にまた六大の義を説けり。是の如くの六大は能く一切の佛及び一切衆生(三)器界等の四種法身と、三種世間とを造す。故に大日尊は如來發生の偈を説きて曰ひたまはく。  
 能く隨類形の 諸法と法相と  
 諸佛と聲聞と 救世の因縁覺と  
 勤勇の菩提衆とを生ず 及び(四)人尊もまた然なり  
 衆生器世界 次第にして成立す  
 生住等の諸法 常恒に是の如く生ず  
 此の偈は何の義をか顯現する。謂く六大能く四種法身と曼荼羅と及び(五)三種世間とを生ずることを表す。謂く諸法とは心法なり、法相とは色法なり。また次に諸法といふは通名を擧ぐ、法相とは差別を顯す。故に下の句に諸佛、聲聞、緣覺、菩薩、衆生、器世間、次第にして成立すと云ふ。また次に諸法とは(六)法曼荼羅なり、法相とは(七)三



(一) 大曼茶羅 諸尊の相好具足せるを云ふ。  
 (二) 智正覺世間 佛菩薩の世間。  
 (三) 衆生世間 六道の世間。  
 (四) 器世間 山川國土等の非情の世間。  
 (五) 所生の法 地獄餓鬼畜生修羅人天佛菩薩聲聞緣覺の十界の依正の法なり。  
 (六) 四種法身 自性、受用、變化、等流にして自性は諸法に受用は法相に變化は聲聞に等流は衆生に現す。  
 (七) 金剛輪 五輪の二つなり、五輪は地水火風空の五配分し成立す。足に日如來を表ししたるものなり。圖に示す。  
 (八) 大曼茶羅身 大曼茶羅身。

味耶身なり、諸佛乃至衆生とは(一)大曼茶羅身なり。  
 器世界とは所依の土を表す。此の器界とは三昧耶曼茶羅の總名なり。また次に佛菩薩二乗とは(二)智正覺世間を表す、衆生とは(三)衆生世間なり。器世界とは即ち是れ(四)器世間なり。また次に能生とは六大なり、隨類形とは(五)所生の法なり、即ち(六)四種法身、三種世間これなり。故に次にまた言く、秘密主、曼茶羅の聖尊の分位と種子と標幟とを造することあり、汝まさに諦かに聽け、吾れ今演說すべし。即ち偈を説いて曰ひたまはく。

眞言者は圓壇を 先づ自體に置け  
 足より臍に至るまで 大金剛輪を成じ  
 此れより心に至るまで 當さに水輪を思惟すべし  
 水輪の上に火輪あり 火輪の上に風輪あり

謂く(七)金剛輪とは阿字なり、阿字は即ち地なり、水火風は文の如く知んぬべし。圓壇とは空なり、眞言者とは心大なり。長行の中に謂ふところの聖尊とは(八)大身なり。種子とは(九)法身なり、標幟とは(一〇)三昧耶身なり、(一一)羯磨身とは三身に各各に之れを具

(九) 法身 法曼茶羅身。  
 (一〇) 三昧耶身 三昧耶曼茶羅身。  
 (一一) 羯磨身 羯磨曼茶羅身。  
 (一二) 又云く 大日經悉地出現品。大日如來の説法を聞く對告衆なり。  
 (一三) 四大 地水火風。  
 (一四) 欲色界無色界 欲色界は色受想行識の五蘊を體となし三界に生じ、無色界は受想行識の四蘊を體となし六趣に輪廻す。  
 (一五) 龍輪 龍は凡夫、細は佛身、大小は凡小は凡。  
 (一六) 法界體性 諸佛より器世界に至るまで皆悉く六大を體性となすの謂ひなり。  
 (一七) 三摩耶身 如來の三密相應身。  
 (一八) 心色 心は精神、色は物質。  
 (一九) 智即ち境 智とは能縁の識大、

す。具に説くことは經文に廣くこれを説けり、文に臨んで知んぬべし。  
 (一) また云く、大日尊の言ひたまはく、(二)金剛手 諸の如來の意より生じて、業戲の行舞を作すことあり、廣く品類を演べたり。四界を攝持して心王を安住し、虚空に等なり、廣大の見と非見の果を成就し、一切の聲聞、辟支佛、諸の菩薩の位を出生すと。此の文は何れの義をか顯現する。謂く六大よく一切を生ずることを表す、何を以て知ることを得る。謂く心王とは識大なり、四界を攝持すとは(三)四大なり、虚空に等しとは空大なり、此の六大は能生なり、見と非見とは(四)欲色界無色界なり、下もは文の如し、即ち是れ所生の法なり。是の如くの經文は、皆六大を以て能生となし、四法身三世間を以て所生となす。此の所生の法は(五)上法身に達し、下六道に及ぶまで、(六)龍輪隔てあり(七)大小差ありと雖も、然れども猶六大を出でず、故に佛は六大を説いて(八)法界體性となしたまふ。諸の顯教の中には、四大等を以て非情となす。密教には、則ち此を説きて如來の(九)三摩耶身となす。四大等は心大を離れず、(一〇)心色異りと雖も、其の性即ち同なり、色即ち心、心即ち色、無障無礙なり。(一一)智即ち境、境即ち智、智即ち理、理即ち智、無礙自在なり。能所の二生ありと雖も都て能所を絶せり。法爾の道理に



境は所縁の五大五智即ち五大なるの故に智即ち境なり。  
 (一) 常途淺略の義顯教の所談。  
 (二) 自在の義。能所不能所と三種無礙。  
 (三) 大日經。本尊三昧品。第廿八品。  
 (四) 威儀事業。威儀とは行住坐臥の表相。事業とは捨取屈申等の形状。  
 (五) 金剛頂經の說。教王經並陀羅尼諸部要目の意を取りたる也。  
 (六) 佛菩薩の相好の相。八十種の好あり。  
 (七) 形像。佛菩薩の形像。佛菩薩の五相。眞言行者の佛身を成就する五種の階段の觀想なり。  
 (八) 大智印。本尊の本誓を表したる根本印を云ふ。  
 (九) 三昧耶智印。諸菩薩の三昧耶形並びに印契を云ふ。

(一) 法智印。佛菩薩の相好の印契を云ふ。  
 (二) 羯磨智印。佛菩薩の威儀事業の印契を云ふ。已上の就て面授を要す。  
 (三) 身契印。結ぶ聖衆を召請するが如き之れなり。  
 (四) 語密。密かに眞言を誦して文句を了々分明ならしめ誤謬なからしめんが如き之れなり。  
 (五) 心密。瑜伽に住して白淨月圓滿に相應し菩提心を觀するが如き之れなり。  
 (六) 互相加入。一の尊往來滲入の三密と衆生の三密と互相に滲入すること。  
 (七) 加持。加は本尊が我身に入ること。持は我身が本尊に入ること。入我入也。  
 (八) 大悉地。成佛を完成すること。

何の造作かあらん、能所等の名は皆これ密號なり、(一) 常途淺略の義を執して、種種の戲論を作すべからず。是の如くの六大法界體性所成の身は、無障無礙にして互相に涉入相應し、常住不變にして同じく實際に住せり、故に頌に、六大無礙常瑜伽と曰ふ。無礙とは涉入(二) 自在の義なり、常とは不動不壞等の義なり、瑜伽とは翻じて相應と云ふ、相應涉入は即ち是れ即の義なり。  
 四種曼荼羅各の離れずとは、(三) 大日經に説かく、一切如來に三種の秘密身あり、謂く字・印・形像なり。字とは法曼荼羅なり、印とは謂く種種の標幟即ち三昧耶曼荼羅なり。形とは相好具足の身即ち大曼荼羅なり。此の三種の身に各各(四) 威儀事業を具す、是れを羯磨曼荼羅と名く、是れ四種曼荼羅なり。若し(五) 金剛頂經の說に依らば、四種曼荼羅とは、一には大曼荼羅、謂く一一の(六) 佛菩薩の相好の身なり。また其の(七) 形像を綵畫するを大曼荼羅と名づく。また(八) 五相を以て本尊の瑜伽を成するなり。また(九) 大智印と名づく。二には三昧耶曼荼羅、即ち所持の標幟、刀劍、輪寶、金剛、蓮華等の類これなり。若し其の像を畫するもまた是れなり。また二手を以て和合して、金剛縛より發生して印を成する是なり、また(一〇) 三昧耶智印と名づく。三には法曼荼羅、本尊の種と名づく。

子眞言なり。若し其の種子の字を各の本位に書く是れなり。また法身の三摩地、及び一切の契經の文義等皆これなり。または(一) 法智印と名づく。四には羯磨曼荼羅、即ち諸佛菩薩等の種種の威儀事業、若しは鑄、若しは埋等また是れなり、また(二) 羯磨智印と名づく。  
 是の如くの四種曼荼羅、四種智印、其の數無量なり、一一の量は虚空に同じ、彼れは此れを離れず、此れは彼れを離れず、猶し空光の無礙にして逆へざるが如し、故に四種曼荼羅各不離と云ふ、不離は即ち是れ即の義なり。  
 三密加持すれば速疾に顯るとは、謂く三密とは、一には(三) 身密、二には(四) 語密、三には(五) 心密なり。法佛の三密は甚深微細にして、等覺十地も見聞すること能はず、故に密といふ。一一の尊等しく利塵の三密を具して、(六) 互相加入し彼此攝持せり。衆生の三密もまた復た是の如し、故に三密加持と名づく。若し眞言行人ありて此の義を觀察し、手に印契を作し、口に眞言を誦し、心を三摩地に住すれば、(七) 三密相應して(八) 加持するが故に、早く(九) 大悉地を得。故に(一〇) 經に云く、此の毗盧遮那佛の(一一) 三字の密言、共に一字にして無量なり。適さに(一二) 印密言を以て、心を印すれば(一三) 鏡智を成じ



(一〇) 經に云く、金輪時處儀軌の文なり。  
 (一一) 三字の密言、オンボクン、庵歩欠の三字。  
 (一二) 印、如來拳印なり。  
 (一三) 鏡智、大圓鏡智なり。これ第八識を轉じて得たる智なり。  
 (一四) 平等性智、第七識を轉じて得たる智なり。  
 (一五) 妙觀察智、第六識を轉じて得たる智なり。  
 (一六) 成所作智、前五識を轉じて得たる智なり。  
 (一七) 法界體性智、第九識を轉じて得たる最上究竟智なり。  
 (一八) 法界眞如觀、三密平等の觀。  
 (一九) 自受用身、自性法身。  
 (二〇) 他受用身、報應化身。  
 (二一) 羯磨を具足す、入灌頂の時の三摩耶戒の事業なり。  
 (二二) 普現三摩地、金剛薩埵の内證。

て、速かに菩提心金剛堅固の體を獲るなり。額を印すれば、當さに知るべし、(一三) 平等性智を成じて、速かに灌頂地の福聚莊嚴の身を獲、密語をもて口を印する時は、(一六) 妙觀察智を成じて、即ち能く法輪を轉じ佛の智慧身を得。密言を誦して頂を印すれば、(一七) 成所作智を成じて、佛の變化身を證し、能く難調の者を伏す、此の印密言に由りて、自身を加持すれば、(一八) 法界體性智・毗盧遮那佛の虛空法界の身を成ずと。  
 また云く、(一九) 法身眞如觀に入りて、一縁一相平等なること、猶し虚空の如し。若し能く專注して無間に修習すれば、現生に則ち初地に入り、頓に一大阿僧祇劫の福智の資糧を集む、衆多の如來に加持せらるるに由るが故に、乃し十地等覺妙覺に至りて薩般若を具し、自他平等にして一切如來の法身と共に、同じく常に無縁の大悲を以て無邊の有情を利樂し、大佛事を作すと。  
 また云く、若し毗盧遮那佛の(二〇) 自受用身所説の内證自覺聖智の法、及び大普賢金剛薩埵の(二一) 他受用身の智に依らば、則ち現生に於て曼荼羅の阿闍梨に遇逢ひ、曼荼羅に入ることを得。爲はく、羯磨を具足し、(二二) 普賢三摩地を以て金剛薩埵を引入して、其身の中に入るる加持の威徳力に藉るが故に。須臾の頃に於て、當に(二〇) 無量の三昧耶、無

即ち無上金剛智を成ぜる境界。  
 (一) 無量の三昧耶、阿字門の一念法界に入りに一心に亂れざる境界を云ふなり。  
 (二) 俱生我執の種子、長年の内に生ずる煩悩の種子。  
 (三) 阿頼耶識の根、一切諸法の根。  
 (四) 森羅萬象の根、此の根にして一切法の根。  
 (五) 密影に過ぎず、密加の法門を善表す。  
 (六) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (七) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (八) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (九) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (一〇) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (一一) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (一二) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (一三) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (一四) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (一五) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (一六) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (一七) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (一八) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (一九) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (二〇) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (二一) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (二二) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (二三) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (二四) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (二五) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (二六) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (二七) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (二八) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (二九) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (三〇) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (三一) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (三二) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (三三) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (三四) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (三五) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (三六) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (三七) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (三八) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (三九) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (四〇) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (四一) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (四二) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (四三) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (四四) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (四五) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (四六) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (四七) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (四八) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (四九) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (五〇) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (五一) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (五二) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (五三) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (五四) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (五五) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (五六) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (五七) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (五八) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (五九) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (六〇) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (六一) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (六二) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (六三) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (六四) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (六五) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (六六) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (六七) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (六八) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (六九) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (七〇) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (七一) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (七二) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (七三) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (七四) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (七五) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (七六) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (七七) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (七八) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (七九) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (八〇) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (八一) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (八二) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (八三) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (八四) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (八五) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (八六) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (八七) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (八八) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (八九) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (九〇) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (九一) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (九二) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (九三) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (九四) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (九五) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (九六) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (九七) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (九八) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (九九) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。  
 (一〇〇) 密加の法門を善表す、密加の法門を善表す。

量の陀羅尼門を證すべし。不思議の法を以て、能く弟子の(一) 俱生我執の種子を變易して、時に應じて身中に一大阿僧祇劫の所集の福徳智慧を集得す、則ち佛家に生在すとなす。其の人、一切如來の心より生じ、佛の口より生じ、佛の法より生じ、法化より生じて佛の法財を得。法財とは謂く三密の菩提心の教法なり、(二) 此は初めて菩提心戒を授かる時、阿闍梨の加持方便に由りて得る所の益を明す。纔に曼荼羅を見れば、能く須臾の頃に淨信す、歡喜の心を以て瞻視するが故に、即ち(三) 阿頼耶識の中に於て、金剛界の種子を得、(四) 此の文は、初めて曼荼羅海會の諸具さに灌頂受職の金剛名號を受く。此れより已後、廣大甚深不思議の法を受得して、二乘十地を超越す。此の(五) 大金剛薩埵五密瑜伽の法門を、四時に於て、行住坐臥の四威儀の中に、無間に作意し修習すれば、見聞覺智の境界に於て、人法二空の執悉く皆平等にして、現生に(六) 初地を證得し、漸次に昇進す、(七) 五密を修するに由りて、涅槃生死に於て染せず着せず、無邊の五趣生死に於て、廣く利樂を作し、身を百億に分ち、諸趣の中に遊びて、有情を成就して金剛薩埵の位を證せしむ。(八) 此は儀軌法則に依りて、修行するた云く、三密の金剛を以て増上縁となして、能く(九) 毗盧遮那三身の果位を證す。是の如くの經等は皆此の速疾力不思議神通の三摩地の法を説く。若し人ありて法則を闕か



(一) 神通力之五種  
 (二) 密教の初地なり  
 (三) 理趣の加持感  
 (四) 應あるに知り自  
 (五) 本有の三部の諸尊  
 (六) 影現と得られる  
 (七) 佛部の三部の請尊  
 (八) 剛部の三部の請尊  
 (九) 佛部の三部の請尊

(一) 剎塵 剎土微  
 (二) 帝釋天の寶珠網  
 (三) 帝釋天の寶珠網  
 (四) 帝釋天の寶珠網  
 (五) 帝釋天の寶珠網  
 (六) 帝釋天の寶珠網  
 (七) 帝釋天の寶珠網  
 (八) 帝釋天の寶珠網  
 (九) 帝釋天の寶珠網  
 (十) 帝釋天の寶珠網

すして晝夜に精進すれば、現身に(一)五神通を獲得す、漸次に修練すれば、此の身を捨  
 てすして進むで佛位に入る、具さには經に説くが如し。此の義に依るが故に、三密加  
 持すれば速疾に顯るといふ。加持とは如來の大悲と、衆生の信心とを表す。佛日の影、  
 衆生の心水に現するを加といひ、行者の心水、能く佛日を感じるを持と名く。行者若  
 し能く此の(二)理趣を觀念すれば、三密相應するが故に、現身に速疾に(三)本有の三身を  
 顯現し證得す、故に速疾に顯はると名づく。常の即時即日の如く、即身の義もまた是  
 の如し。

重重帝網なるを即身と名くとは、是れ則ち譬喩を擧げて、以て諸尊の(四)剎塵の三密圓  
 融無礙なることを明す。帝網とは(五)因陀羅珠網なり、謂く身とは我身、佛身、衆生身、  
 是れを身と名く。また四種の身あり、言く(六)自性、(七)受用、(八)變化、(九)等流、是れを  
 名けて身といふ。また三種あり、(一〇)字、(一一)印、(一二)形、是れなり。是の如く等の身は縱横重  
 重にして、鏡中の影像と燈光の涉入との如し、彼の身即ち是れ此の身、此の身即ち是  
 れ彼の身、佛身即ち是れ衆生の身、衆生の身即ち是れ佛身なり、不同にして同なり、  
 不異にして異なり、故に三等無礙の眞言に曰く、

(一) 剎塵 剎土微  
 (二) 帝釋天の寶珠網  
 (三) 帝釋天の寶珠網  
 (四) 帝釋天の寶珠網  
 (五) 帝釋天の寶珠網  
 (六) 帝釋天の寶珠網  
 (七) 帝釋天の寶珠網  
 (八) 帝釋天の寶珠網  
 (九) 帝釋天の寶珠網  
 (十) 帝釋天の寶珠網

(五) 大日經 第三  
 (六) 轉字輪品  
 (七) 不生の覺り又本  
 (八) 不生の本體の意  
 (九) 不生の本體の法身  
 (一〇) 不生の本體の法身  
 (一一) 不生の本體の法身  
 (一二) 不生の本體の法身  
 (一三) 不生の本體の法身  
 (一四) 不生の本體の法身  
 (一五) 不生の本體の法身

初めの句義をば(一)無等と云ひ、次ぎをば(二)三等と云ひ、後の句をば(三)三平等と云ふ、  
 佛法僧これ三なり、身語意また三なり、心佛及び衆生も三なり。是の如くの三法は平  
 等平等にして一なり、一にして無量なり、無量にして一なり。而も終に雜亂せず、故  
 に重重帝網なるを即身と名くといふ。

法然に薩般若を具足してとは、(四)大日經に云く、我れは(五)一切の本初なり、號して世  
 所依と名く、説法に等比なく、本寂にして上あることなし。謂く我とは大日尊の自稱  
 なり。一切とは無數を擧ぐ。本初とは本來法然に、是の如くの大自在の一切の法を證  
 得するの本祖なり。(六)如來の法身と(七)衆生の本性とは、同く此の(八)本來寂靜の理を得  
 たり。然れども衆生は覺せず知せず、故に佛は此の理趣を説きて衆生を覺悟せしめた  
 まふ。(九)また云く、諸の因果を樂欲する者、(一〇)彼の愚夫の能く眞言と眞言の相とを知  
 るに非ず。何を以ての故に、(一一)因は作者に非らずと説けば、彼の果も則ち不生なり、  
 此の因因すら尙し空なり、云何んが果あらんや。當さに知るべし眞言の果は、悉く因  
 果を離れたり。上の文に引く所の我れ本不生を覺り乃至因縁を遠離すの偈、及び諸法



は本不生なり乃至因業は虚空に等し。是の如く等の偈はみな法然に具足の義を明す。また(一)金剛頂に云く、自性所成の眷屬金剛手等の十六大菩薩乃至各各に(二)五億俱胝の微細法身の金剛を流出すと。

(一)金剛頂 瑜祇  
(二)五億俱胝 本  
有自性の五智金剛  
は各々一億俱胝の  
法身金剛を流出す  
る故に五億俱胝と  
なる。  
(三)此の義 法然  
具足の義なり。  
(四)薩云 具さに  
は薩云若と云ふ。  
一切種智と云ふ。  
(五)一切の佛と我  
心の諸佛なり。已  
成の諸佛と我心と  
の諸佛なり。

是の如く等の文は、また是れ(三)此の義なり。法然と言ふは、諸法の自然に是の如くなることを顯す。具足とは成就の義、無闕少の義なり。薩般若とは梵語なり、古くは(四)薩云と云ふは訛略なり、具さには薩羅婆枳婁曇と云ふ、翻じて一切智智と云ふ。一切智智とは、智とは決斷簡擇の義なり。(五)一切の佛に各の五智二十七智乃至刹塵の智を具せり。次ぎの兩句は即ち此の義を表す。若し決斷の徳を明かすには、則ち智を以て名を得。(六)集起を顯すには即ち心を以て稱となす、(七)軌持を顯すには即ち法門に稱を得、一一の名號みな人を離れず。是の如くの人數は刹塵に過ぎたり、故に一切智智と名づく。(八)顯家の一智を以て一切に對して、此の號を得るには同じからず。心王とは法界體性智等なり。心數とは(九)多一識なり。各の五智を具すとは、一一の心王心數に各各に之れあることを明す。無際智とは高廣無數の義なり。

(六)集起 曼荼の  
聖衆。軌持 軌範任  
持。  
(七)顯家の一智  
顯教は佛智のみを  
以て一切の法をな  
る故にかく云ふな  
り。  
(八)多一識 心王  
は即ち心數なる故  
に一心は一切心な  
るの意。  
(九)所由 即身成  
佛の理由。

圓鏡力の故に實覺知なりとは、此れ即ち(一〇)所由を出だす、一切の諸佛は何に由りてか

覺智の名を得たまふ、謂く一切の色像の、悉く高臺の明鏡の中に現するが如く、如來の心鏡もまた復た是の如し。(一)圓明の心鏡は、高く(二)法界の頂に懸りて、寂にして一切を照し(三)不倒不謬なり。是の如くの圓鏡は何れの佛にあらざらん、故に圓鏡力の故に實覺智なりといふ。

(即身成佛義は弘法大師の眞撰なれども原文發號なき故に之を掲げず)

(一)圓明の心鏡  
大日如來の五智。  
(二)法界の頂  
六大眞如。  
(三)不倒不謬 理  
に於て倒れず事  
に於て謬らず。

### 國譯即身成佛義終

國譯即身成佛義















(二) 捺落迦 地獄  
三 華嚴 六十華  
嚴第廿九。

(三) 經 金剛般若  
具足と譯す、輪圓  
諸法はこれに具備  
せざることをなきの  
謂なり、大日經疏  
には「曼荼羅」とは  
種々の徳を具する  
の義なり、即ちこ  
の如來秘密の徳な  
り、是の如く秘密  
にして而も自ら莊  
なるが如し、  
法第三祖 眞言付  
日尊所入の定なり

(二) 字母 五十字  
すれば五の種子  
眞言なり、この  
種子はまた阿字に  
歸す。  
阿字等云々  
阿字は法身如來の  
密號。一々の字門  
は阿字に歸する故  
に阿字は法身の諸  
號なりと同時に諸  
尊の密號也。  
摩訶衍論所説の五  
種の言説。  
妄二種の文字、眞  
妄二種の文字、以  
上二種の文字に依りて  
九界を妄となす、  
佛界を眞となす、  
即ち九界をば四種  
の妄語に屬し、佛  
界をば如義眞實の  
言語となす。  
(五) 顯形表等 色  
に顯色、形色、表色  
無表色の四あり、  
顯色とは青黃赤白  
黒等に於て形表等  
具さるるべし、  
り知るべし。

切聲聞界・五には一切天界・六には一切人界・七には一切阿修羅界・八には一切傍生界・九には一切餓鬼界・十には一切捺落迦界なり、自外の種種の界等は、天鬼及び傍生趣の中に攝し盡す。(三) 華嚴及び金剛頂・理趣釋經に十界の文あり、この十界所有の言語は、皆聲に由りて起る、聲に長短高下、音韻、屈曲あり、これを文と名づく。文は名字に由り、名字は文を待つ。故に諸の訓釋者の文即字と云ふは、蓋しその不離相待を取るのみ、これ則ち内聲の文字なり。この文字に且らく十の別あり、上みの文の十界の差別これなり。この十種の文字の眞妄は云何ん、若し堅淺深の釋に約せば、即ち九界は妄なり、佛界の文字は眞實なり。故に(三) 經に眞語者、實語者、如語者、不誑語者、不異語者と云ふ。この五種の言を梵には(四) 曼荼羅と云ふ。此の一言の中に、五種の差別を具するが故に、(五) 龍樹は秘密語と名づく、この秘密語を則ち眞言と名づくるなり。譯者、五の中の一種を取りて翻するのみ。この眞言は何物をか詮する、能く諸法の實相を呼んで、不謬不妄なるが故に眞言と名づく。その眞言、云何んが諸法の名を呼ぶ、眞言は無量に差別なりと云ふと雖も、彼の根源を極むるに、大日尊の(六) 海印三昧王の眞言には出でず。彼の眞言王とは云何ん、金剛頂及び大日經所説の字輪字母等これな

り。彼の(二) 字母とは、梵書の阿字等乃至阿字等これなり。この(三) 阿字等は則ち法身如來の一名字密號なり、乃至天龍鬼等もまたこの名を具せり。名の根本は法身を根源となす、彼れより流出して、稍々轉じて世流布の言となるのみ。若し實義を知るをば則ち眞言と名づけ、根源を知らざるをば妄語と名づく。妄語は則ち長夜に苦を受け、眞言は則ち苦を抜き樂を與ふ。譬へば藥毒の迷悟に損益不同なるが如し。問ふて曰く、(三) 龍猛所説の五種の言説と、(四) 今の所説の二種の言説と、如何んが相攝するや。答ふ、相、夢、妄、無始は妄に屬して攝し、如義は則ち眞實に屬して攝す。已に眞妄の文字を説き竟んぬ。次に、内外の文字の相を釋せん、頌の文に、六塵悉く文字なりとは、謂く六塵とは、一に色塵、二には聲塵、三には香塵、四には味塵、五には觸塵、六には法塵なり。この六塵に、各の文字の相あり。初めの色塵の字義差別云何ん。頌に曰く。  
(五) 顯形表等の色あり 内外の依正に具す  
法然と隨縁と有り 能く迷ひ亦た能く悟る  
釋して曰く、頌の文を四に分つ。初めの一句は色の差別を擧げ。次の句は内外の色、互

國譯聲字實相義



(一) 法爾隨緣の二種の所生を顯し。四にはこの種種の色は、愚に於ては毒となり、智に於ては藥となることを説く。初めの句に、顯形表等の色とは、これに三つの別あり、一には顯色、二には形色、三には表色なり。一に顯色とは五大の色これなり、法相家には四種の色を説いて黒色を立てず。大日經に依らば五大の色を立つ。五大の色とは、一には黄色、二には白色、三には赤色、四には黒色、五には青色なり、この五大の色を名づけて顯色となす、この五色は即ちこれ五大の色なり、次での如く配して知れ。影光、明暗、雲煙、塵霧、及び空一、顯色をまたは顯色と名く。また若し顯了にして眼識の所行なるを顯色と名く。この色に、好悪、俱異等の差別を具す。大日經に、心は青、黄、赤、白、紅、紫、水精色、明に非ず、闇に非すと云ふことは、これ心は顯色に非すと遮すなり。次に形色とは、謂く長短、麤細、正不正、高下これなり。また方圓、三角、半月等これなり、また若し色の積集せる長短等の分別の相これなり。大日經の疏に、心は長に非ず、短に非ず、圓に非ず、方に非すと云ふことは、これは心は形色に非すと遮す。三に表色とは、謂く、取捨、屈伸、行住、坐臥これなり。また即ちこの積集色の生滅相續することは

(二) 眼識の所行の諸色は眼識の所緣なるが故に顯色と名づく。好悪俱異色には好悪俱異色との三種あり。大日經の文。第一住心品の文。

(三) 積集色の生滅相續の形色の上には生滅相續し又表色と名く。

(一) 變異の因に由る、先生處に於て、また重ねて生せずして異處に轉ず、或は無間、或は有間、或は近、或は遠、差別して生ずるなり。或は即ちこの處に於て變異して生ずるこれなり。また業用爲作の轉動差別は、これを表色と名づく。大日經に、心は男に非ず、女に非ずといふは、また心は表色に非すと遮す。これまた顯形色に通ず。また云何んが自ら心を知る、謂く、或は顯色、或は形色、若は色、受、想、行、識、若は我、若は我所、若は能執、若は所執の中に求むるに不可得なりと云ふは、これは、顯形表色の名を明す。顯形は文の如く知んぬべし、自下は即ちこれ表色なり。取捨業用爲作等の故に。是の如く一切の顯形色の色は、これ眼所行、眼境界、眼識所行、眼識境界、眼識所緣、意識所行、意識境界、意識所緣なり、これを差別と名づく。是の如くの差別は即ちこれ文字なり、各々の相、則ちこれ文なるが故に、各々の文に、則ち各々の名字あり、故に文字と名づく。これはの三種は、色の文字なり。或は甘種の差別を分つ。前に謂ふ所の十界の依正の色は差別なるが故に。瑜伽論に云く、今當さに、先づ色聚の諸法を説くべし。問ふ、一切の諸法の生ずることは、皆自種より而も起する。云何んが諸の大種は、能く所造色を生ずと説くや。云何んが造色は、

(一) 眼所行 眼根の所行。  
(二) 意識所行 意識の作用。  
(三) 瑜伽論 瑜伽論第三。  
(四) 色聚 一切の色法は四味四大和合して生ずるが故に聚と云ふ。  
(五) 大種 地水火風の四大は萬物の種子となるものなれば大種と云ふ。



(一) 生因起因の意にして大種を離れて色は起らず、諸の所造の色は自種より生ずるを離るも、若し大種を離るれば必ず起らず

(二) 三摩地等持と譯す禪定なり。

(三) 極微を一切萬物の集成を分解し、最小位をいふ。

(四) 覺慧を瑜伽論第五十四に分別論の覺慧に由りて、式に至りて、極微なる智慧の義。正確なる智慧の義。

彼れに依り、彼れに建立せられ、彼れに任持せられ、彼れに長養せらるゝや。答ふ、一切の内外の大種と、及び所造色との種子は、皆悉く内の相續の心に依附す、乃至、諸大の種子、未だ諸大を生ぜざるより以來は、造色の種子は、終に造色を生ずること能はざるに由りて、要す彼れ生ずるに由りて、造色は、方さに自種子より生ず。この故に、彼れ能く生ずと説く。彼れ生じて、前導となるに由るが故に、この道理に由りて諸の大種、彼の(一)生因となると説く。云何んが造色は彼に依るや。造色は生じ已りて、大種の處を離れずして轉ずるに由るが故に。云何んが彼れに建立せらるゝや。大種損益すれば彼れ同じく安危するに由るが故に。云何んが彼れに任持せらるゝや。大種に隨ひて、等量にして壞せざるに由るが故に。云何んが彼れに長養せらるゝや。飲食睡眠、修習、梵行、(二)三摩地等に由りて、彼れに依りて、造色は倍、また増廣なるに由るが故に、大種を彼れが長養因となすと説く。是の如く、諸の大種を所造色に望むるに、五種の作用あること應さに知んぬべし。

また次に、色聚の中に於て、曾て(三)極微生なし、若し自種より生ずる時に、唯し聚集して生ず、或は細、或は中、或は大なり。また極微集まりて色聚を成するに、但し(四)

(一) 方分 方分は諸方、分は細分の意

(二) 分相 極微は最細なる故に分析すべからず、故に分相なし。

(三) 不相離 大造離なるを云ふ。

(四) 遍滿聚色 一切の色法なり。一

覺慧に由りて、諸色を分析して、極量邊際を分別し假立して、以て極微となす。また色聚に、また(一)方分あらば、極微にもまた方分あるべしや。然も色聚には分あり、極微にはあらず。何を以ての故に、極微は即ちこれ分なるに由りて、此れはこれ聚色の所有なり、極微にまた餘の極微あるにあらず、この故に極微には(二)分相あるに非ず。また(三)不相離に二種あり、一には同處不相離、謂く大種の極微と、色、香、味、觸等と、無根の處に於て離根のものあり、有根の處に於て有根のものあり、これを同處不相離と名く。二には和雜不相離、謂く即ちこの大種の極微と、餘の聚集の能造所造の色處と、俱なるが故に、これを和雜不相離と名づく。また此の(四)遍滿聚色は、應さに知るべし、種々の物を石をもて磨りて末となして水を以て和合して互に相離せざらしむるが如し、胡麻、綠豆、粟稗等の聚の如くにはあらず。また一切の所造色は、みな即ち大種の處に依止して大種の處量を過ぎず、乃至大種所據の處所に諸の所造色、還りて即ちこれに據る。此の因縁に由りて所造色は、大種に依ると説く。即ち此の義を以て諸の大種を説きて、名けて大種となす。此の大種その性大なるに由るが故に、種となして生ずるが故に。また諸の色聚の中に於て、略して十四種の事あり。謂く、地、



(一) 十種の色  
 (二) 十種の香  
 (三) 十種の味  
 (四) 十種の觸  
 (五) 十種の聲  
 (六) 十種の香  
 (七) 十種の味  
 (八) 十種の觸  
 (九) 十種の聲  
 (十) 十種の色

水、火、風、色、聲、香、味、觸、及び眼等の五根なり。唯し意所行色を除くと云  
 また(一)十種の色を立つ、具さには、彼れに説くが如し。是の如きの種々の色の差別は、  
 即ちこれ文字なり。また(二)五色を以て、阿字等を書くを亦た色の文字と名く。また種  
 々の有情非情を彩畫するを、また色の文字と名づく。錦繡綾羅等またこれ色の文字な  
 り。(三)法華、(四)華嚴、智度等にまた具さに種々の色の差別を説けり。然れども、内外  
 の十界等には出でず。是の如くの色等の差別を、是れを色の文字と名く。此れこの文  
 字は、愚に於ては能く着し能く愛して、貪瞋癡等の種々の煩惱を發して、具さに十惡、  
 五逆等を造る、故に頌に能迷といふ。智に於ては、則ち能く因縁を觀じて、取らず捨  
 てずして、能く(五)種々の法界曼荼羅を建立し、廣大の佛の事業をなす。上み諸佛を供  
 し、下も衆生を利用して、自利々他茲に由りて圓滿す、故に能く悟るといふ。次に、内外  
 の依正に具すとは、これにまた三あり。一には内色に顯形等の三を具することを明し、  
 二には外色にまた三色を具することを明し、三には内色は定んで内色に非ず、外色は  
 定んで外色にはあらずして、互に依正となることを明す。内色と言つば有情、外色と  
 は器界なり。(六)經に云く、佛身は不思議なり。國土悉く中にあり、また一毛に多利海

(一) 十種の色  
 (二) 十種の香  
 (三) 十種の味  
 (四) 十種の觸  
 (五) 十種の聲  
 (六) 十種の香  
 (七) 十種の味  
 (八) 十種の觸  
 (九) 十種の聲  
 (十) 十種の色

(一) 十種の色  
 (二) 十種の香  
 (三) 十種の味  
 (四) 十種の觸  
 (五) 十種の聲  
 (六) 十種の香  
 (七) 十種の味  
 (八) 十種の觸  
 (九) 十種の聲  
 (十) 十種の色

を示現す、一々の毛に現すること、悉くまた然なり、是の如く法に普周す。また一毛  
 孔の内に難思の刹あり、微塵の數に等じて種々に住す。一一に皆(一)遍照尊ありて、衆  
 會の中に在して妙法を宣したまふ。一塵の中に於て大小の刹、種々に差別せること塵  
 數の如し。一切國土の所有の塵の、一一の塵の中に、佛皆入りたまふと。今これ等の  
 文に依りて、明かに知んぬ佛身及び衆生の身、大小重々なり、或は虚空法界を以て身  
 量となし、或は不可説不可説の佛刹を以て身量となし、乃至十佛刹、一佛刹、一微塵  
 を以て身量となす。是の如くの大小の身土、互に内外となり、互に依正となる。此の  
 内外の依正の中には、必ず顯形表色を具す、故に内外の依正に具すと云ふ。法然と隨  
 緣必有りと、如上の顯形等の色、或は法然の所成なり。謂く法佛の依正これなり。  
 (七) 大日經に曰く、爾の時に大日世尊、(八)等至三昧に入り給ふ。即時に諸佛の國土、地  
 平なること掌の如し。(九)五寶間錯し、(十)八功德水芬馥盈滿せり。無量の衆鳥あり、鴛  
 鴦鸞鶴、和雅の音を出す。時華雜樹、敷榮し間列せり。無量の樂器、自然に韻に諧ひ、  
 その聲微妙にして、人聞かんと樂ふ所なり。無量の菩薩の隨福所感の宮室、殿堂、意生  
 の座あり、(十一)如來信解願力の所生なり、法界標幟の大蓮華王を出現して、如來の法界性







(一) 遍照金剛弘  
 法大師空海の金剛  
 名  
 (二) 呼字 呼字は  
 金胎兩部一心理智  
 不二の種子なるが  
 故に此の一字を願  
 明するに依り  
 て密教の幽旨を説  
 くを得。  
 (三) 四字分離 呼  
 字を分離せば呼  
 字の四字となる  
 (四) 中央本尊の體  
 字は、呼字を以て  
 本體となす。  
 (五) 因の六種 能  
 作、俱有、同類、能  
 相應、遍行、異熟の  
 六因なり。具さに  
 は俱舍論第六にあ  
 り。  
 (六) 因の五種 俱  
 舍論第七には六因  
 中より能作因を除  
 けり。

## 國譯呼字義

(一) 遍照金剛の撰

一の(一)呼字、相と義と二に分つ。一には字相を解し、二には字義を釋す。  
 初めに字相を解せば、また四に分つ。(三)四字分離の故に。金剛頂に此の一字を釋する  
 に、四字の義を具す。一には賀字の義、二には阿字の義、三には汗字の義、四には麼  
 字の義なり。  
 一に賀字の義とは、(四)中央本尊の體これ其の字なり。所謂る賀字はこれ因の義なり、  
 梵には係怛嚩と云ふ、即ちこれ因縁の義なり。(五)因に六種あり、及び因縁の義の中に  
 (六)因に五種あり、阿毗曇に廣く説くが如し。若し訶字門を見れば、即ち一切の諸法は、  
 因縁より生ぜざることなしと知る、これを訶字の字相となす。  
 二に阿字の義とは、訶字の中に阿の聲あり、即ちこれ一切字の母、一切聲の體、一切  
 實相の源なり。凡そ最初に口を開くの音にみな阿の聲あり。若し阿の聲を離せば、則  
 ち一切の言説なし、故に衆聲の母となす。若し阿字を見る時は、則ち諸法の空無を知



(一) 人我 個人の  
 (二) 法我 法の  
 (三) 個人を認める我  
 (四) 我人衆生 人  
 (五) 増益 人法の  
 (六) 増益 人法の  
 (七) 増益 人法の  
 (八) 増益 人法の  
 (九) 増益 人法の  
 (十) 増益 人法の  
 (十一) 増益 人法の  
 (十二) 増益 人法の  
 (十三) 増益 人法の  
 (十四) 増益 人法の  
 (十五) 増益 人法の  
 (十六) 増益 人法の  
 (十七) 増益 人法の  
 (十八) 増益 人法の  
 (十九) 増益 人法の  
 (二十) 増益 人法の

る、これを阿字の字相となす。  
 三に汗字は、是れ一切諸法損減の義なり。若し汗字を見れば、則ち一切の法の無常苦  
 空無我等を知る、これ則ち損減、即ちこれ字相なり。  
 四に塵字の義とは、梵には但塵と云ふ。此には翻じて我となす。我に二種あり、一に  
 は(一)人我、二には(二)法我。若し塵字門を見れば、則ち一切の諸法に(三)我人衆生等あり  
 と知る、これを(四)増益と名く、これ則ち字相なり。一切世間は、但し是の如き字相を  
 のみ知りて、未だ曾て字義を解せず、この故に生死の人となす。如來は實の如く實義  
 を知り給へり、所以に大覺と號す。

二に字義を解するに四あり。訶、阿、汗、塵の四字差別の故に。  
 初めに訶字の實義とは、所謂る訶字門の一切諸法は因不可得の故に。何を以ての故  
 に、諸法は展轉して因を待て成するを以ての故に。當に知るべし、最後は依なしと。  
 故に(五)無住を説きて諸法の本となす。然る所以は種種の門を以て、諸法の因縁を觀す  
 るに、悉く不生なるが故に。當さに知るべし、萬法は唯心なりと、(六)心の實相は即ち  
 これ(七)一切種智なり、即ちこれ諸法法界なり、(八)法界即ちこれ諸法の體なり、因とす

(一) 無因待 因の  
 (二) 果は果に對して立  
 (三) 果も已に不生の果  
 (四) 不可得なり故に無  
 (五) 因待云ふ生果の  
 (六) 因に非ることを云  
 (七) 終始 終は訶  
 (八) 始は阿字。阿も訶  
 (九) 得なる故に不可  
 (十) 同づく本不生の本  
 (十一) 源に歸す。  
 (十二) 龍猛 眞言付  
 (十三) 法第三祖。智度論  
 (十四) 大論。智度論  
 (十五) 薩婆若。一切  
 (十六) 智。一切智。空を  
 (十七) 照す。一切智。有な  
 (十八) 照す。一切智。有な  
 (十九) 照す。一切智。有な  
 (二十) 照す。一切智。有な  
 (二十一) 照す。一切智。有な  
 (二十二) 照す。一切智。有な  
 (二十三) 照す。一切智。有な  
 (二十四) 照す。一切智。有な  
 (二十五) 照す。一切智。有な  
 (二十六) 照す。一切智。有な  
 (二十七) 照す。一切智。有な  
 (二十八) 照す。一切智。有な  
 (二十九) 照す。一切智。有な  
 (三十) 照す。一切智。有な

ることを得ず。是れを以て之れを言は、因またこれ法界、緣またこれ法界、因縁所  
 生の法もまたこれ法界なり。阿字門は本より末に歸して、畢竟じて是の如くの處に到  
 る。今また、訶字門もまた末より本に歸して、畢竟じて是の如きの處に到る。阿字は  
 本不生より一切の法を生じ。今また訶字は(一)無因待を以て諸法の因となす。(二)終始同  
 じく歸すれば、則ち中間の旨趣皆知んぬべし。是れを訶字の實義と名づく。  
 次に阿字の實義とは三義あり、謂く不生の義、空の義、有の義なり。梵本の阿字の如  
 きは本初の聲あり、若し本初あるは則ちこれ因縁の法なり、故に名づけて有となす。  
 また阿とは無生の義なり。若し法、因縁を攪りて成るは則ち自ら性あることなし、こ  
 の故に空となす。また不生の義とは、則ちこれ一實の境界は即ちこれ中道なり。故に  
 (三)龍猛の云ひたまはく、因縁生の法は、また空、また假、また中なりと。また(四)大論  
 に(五)薩婆若を明すに三種の名あり。(六)一切智は二乘と共じ、(七)道種智は菩薩と共じ、  
 (八)一切智はこれ佛不共の法なり。この三智、それ實には一心の中に得、分別して人を  
 して解し易からしむるための故に三種の名をなす、即ちこれ阿字の義なり。また所謂る  
 阿字門一切諸法本不生とは、凡そ三界の語言はみな名に依る、而て名は字に依る、故















三身の大日如來。  
 (一) 事菩提。  
 (二) 理菩提。  
 (三) 知正體智の理。  
 (四) 本體智の理。  
 (五) 三身。本有の  
 (六) 乘の人は定二乘  
 (七) 決定不定性故に  
 (八) 定性不定性。即ち  
 (九) 涅槃を得るに劫  
 (十) の有さざるに劫限  
 (十一) 無量無邊の諸佛。  
 (十二) 無量無邊の諸佛。  
 (十三) 無量無邊の諸佛。  
 (十四) 無量無邊の諸佛。  
 (十五) 無量無邊の諸佛。  
 (十六) 無量無邊の諸佛。  
 (十七) 無量無邊の諸佛。  
 (十八) 無量無邊の諸佛。  
 (十九) 無量無邊の諸佛。  
 (二十) 無量無邊の諸佛。  
 (二十一) 無量無邊の諸佛。  
 (二十二) 無量無邊の諸佛。  
 (二十三) 無量無邊の諸佛。  
 (二十四) 無量無邊の諸佛。  
 (二十五) 無量無邊の諸佛。  
 (二十六) 無量無邊の諸佛。  
 (二十七) 無量無邊の諸佛。  
 (二十八) 無量無邊の諸佛。  
 (二十九) 無量無邊の諸佛。  
 (三十) 無量無邊の諸佛。  
 (三十一) 無量無邊の諸佛。  
 (三十二) 無量無邊の諸佛。  
 (三十三) 無量無邊の諸佛。  
 (三十四) 無量無邊の諸佛。  
 (三十五) 無量無邊の諸佛。  
 (三十六) 無量無邊の諸佛。  
 (三十七) 無量無邊の諸佛。  
 (三十八) 無量無邊の諸佛。  
 (三十九) 無量無邊の諸佛。  
 (四十) 無量無邊の諸佛。  
 (四十一) 無量無邊の諸佛。  
 (四十二) 無量無邊の諸佛。  
 (四十三) 無量無邊の諸佛。  
 (四十四) 無量無邊の諸佛。  
 (四十五) 無量無邊の諸佛。  
 (四十六) 無量無邊の諸佛。  
 (四十七) 無量無邊の諸佛。  
 (四十八) 無量無邊の諸佛。  
 (四十九) 無量無邊の諸佛。  
 (五十) 無量無邊の諸佛。  
 (五十一) 無量無邊の諸佛。  
 (五十二) 無量無邊の諸佛。  
 (五十三) 無量無邊の諸佛。  
 (五十四) 無量無邊の諸佛。  
 (五十五) 無量無邊の諸佛。  
 (五十六) 無量無邊の諸佛。  
 (五十七) 無量無邊の諸佛。  
 (五十八) 無量無邊の諸佛。  
 (五十九) 無量無邊の諸佛。  
 (六十) 無量無邊の諸佛。  
 (六十一) 無量無邊の諸佛。  
 (六十二) 無量無邊の諸佛。  
 (六十三) 無量無邊の諸佛。  
 (六十四) 無量無邊の諸佛。  
 (六十五) 無量無邊の諸佛。  
 (六十六) 無量無邊の諸佛。  
 (六十七) 無量無邊の諸佛。  
 (六十八) 無量無邊の諸佛。  
 (六十九) 無量無邊の諸佛。  
 (七十) 無量無邊の諸佛。  
 (七十一) 無量無邊の諸佛。  
 (七十二) 無量無邊の諸佛。  
 (七十三) 無量無邊の諸佛。  
 (七十四) 無量無邊の諸佛。  
 (七十五) 無量無邊の諸佛。  
 (七十六) 無量無邊の諸佛。  
 (七十七) 無量無邊の諸佛。  
 (七十八) 無量無邊の諸佛。  
 (七十九) 無量無邊の諸佛。  
 (八十) 無量無邊の諸佛。  
 (八十一) 無量無邊の諸佛。  
 (八十二) 無量無邊の諸佛。  
 (八十三) 無量無邊の諸佛。  
 (八十四) 無量無邊の諸佛。  
 (八十五) 無量無邊の諸佛。  
 (八十六) 無量無邊の諸佛。  
 (八十七) 無量無邊の諸佛。  
 (八十八) 無量無邊の諸佛。  
 (八十九) 無量無邊の諸佛。  
 (九十) 無量無邊の諸佛。  
 (九十一) 無量無邊の諸佛。  
 (九十二) 無量無邊の諸佛。  
 (九十三) 無量無邊の諸佛。  
 (九十四) 無量無邊の諸佛。  
 (九十五) 無量無邊の諸佛。  
 (九十六) 無量無邊の諸佛。  
 (九十七) 無量無邊の諸佛。  
 (九十八) 無量無邊の諸佛。  
 (九十九) 無量無邊の諸佛。  
 (百) 無量無邊の諸佛。

す

(一) 事は鏡に均しく (二) 理は磁珠に同じ 妄者はこれを視て 本覺なしと謂へり  
 愚盲の撥無 損にあらすして何ん 彼の(三) 本身に於ては 損減不得なり  
 汗字の實義、應さに是の如く知るべし  
 (四) 決定二乘 妄りに滅想を生じ 身智を燒滅して 彼の太虚に同じ  
 味酒に沈酔して 覺らず醒めず (五) 決定不定 輕重差あれども  
 空く劫數を歴 損これに過ぎたるはなし 本有の三身は 儼然として動せず  
 (六) 遍空の諸佛 驚覺開示したまへば 乃ち(七) 化城より起ちて (八) 寶所に迴趣す  
 草木也た成す 何に況んや有情をや 妄りに(九) 不了を執すれば 損をなすことこれ  
 多し  
 汗字の實義 當さに是の如く知るべし  
 (一〇) 正因所生の (一一) 報果の色身は 萬德莊嚴し (一二) 四智圓準すれども  
 但し相續のみありて これ凝然にあらす 生ずるものは必ず滅す (一三) 一向記の故に  
 これはの權劍をもて 能く殺し能く害す 本有の三密は 日の天に麗しき如く

(一) 眞如法性  
 (二) 眞如法性  
 (三) 眞如法性  
 (四) 眞如法性  
 (五) 眞如法性  
 (六) 眞如法性  
 (七) 眞如法性  
 (八) 眞如法性  
 (九) 眞如法性  
 (十) 眞如法性  
 (十一) 眞如法性  
 (十二) 眞如法性  
 (十三) 眞如法性  
 (十四) 眞如法性  
 (十五) 眞如法性  
 (十六) 眞如法性  
 (十七) 眞如法性  
 (十八) 眞如法性  
 (十九) 眞如法性  
 (二十) 眞如法性  
 (二十一) 眞如法性  
 (二十二) 眞如法性  
 (二十三) 眞如法性  
 (二十四) 眞如法性  
 (二十五) 眞如法性  
 (二十六) 眞如法性  
 (二十七) 眞如法性  
 (二十八) 眞如法性  
 (二十九) 眞如法性  
 (三十) 眞如法性  
 (三十一) 眞如法性  
 (三十二) 眞如法性  
 (三十三) 眞如法性  
 (三十四) 眞如法性  
 (三十五) 眞如法性  
 (三十六) 眞如法性  
 (三十七) 眞如法性  
 (三十八) 眞如法性  
 (三十九) 眞如法性  
 (四十) 眞如法性  
 (四十一) 眞如法性  
 (四十二) 眞如法性  
 (四十三) 眞如法性  
 (四十四) 眞如法性  
 (四十五) 眞如法性  
 (四十六) 眞如法性  
 (四十七) 眞如法性  
 (四十八) 眞如法性  
 (四十九) 眞如法性  
 (五十) 眞如法性  
 (五十一) 眞如法性  
 (五十二) 眞如法性  
 (五十三) 眞如法性  
 (五十四) 眞如法性  
 (五十五) 眞如法性  
 (五十六) 眞如法性  
 (五十七) 眞如法性  
 (五十八) 眞如法性  
 (五十九) 眞如法性  
 (六十) 眞如法性  
 (六十一) 眞如法性  
 (六十二) 眞如法性  
 (六十三) 眞如法性  
 (六十四) 眞如法性  
 (六十五) 眞如法性  
 (六十六) 眞如法性  
 (六十七) 眞如法性  
 (六十八) 眞如法性  
 (六十九) 眞如法性  
 (七十) 眞如法性  
 (七十一) 眞如法性  
 (七十二) 眞如法性  
 (七十三) 眞如法性  
 (七十四) 眞如法性  
 (七十五) 眞如法性  
 (七十六) 眞如法性  
 (七十七) 眞如法性  
 (七十八) 眞如法性  
 (七十九) 眞如法性  
 (八十) 眞如法性  
 (八十一) 眞如法性  
 (八十二) 眞如法性  
 (八十三) 眞如法性  
 (八十四) 眞如法性  
 (八十五) 眞如法性  
 (八十六) 眞如法性  
 (八十七) 眞如法性  
 (八十八) 眞如法性  
 (八十九) 眞如法性  
 (九十) 眞如法性  
 (九十一) 眞如法性  
 (九十二) 眞如法性  
 (九十三) 眞如法性  
 (九十四) 眞如法性  
 (九十五) 眞如法性  
 (九十六) 眞如法性  
 (九十七) 眞如法性  
 (九十八) 眞如法性  
 (九十九) 眞如法性  
 (百) 眞如法性

如空の四智は 金を地に埋むに似たり 猛風の因 利鏝の縁  
 誰か能く之を生じ 誰か能く之を造らん 汗字の實義 當さに是の如く知るべし  
 (一) 眞如法性は 心の實常なり 凡そ心ある者の 誰かこの理なからん  
 心智即ち理なり 心外の理には非ず 心理これ一なり 濕鑿豈に別ならん  
 如性等しく遍すれども 心行狹劣なれば 權りに嬰兒を誘むるに 迷者知らずして  
 この權載を揮つて 彼の眞佛を破す これを損減と名づく。  
 常遍の本佛は 損せず虧せず 汗字の實義 汝等應さに知るべし  
 水外に波なし 心内即ち境なり 草木に佛なくんば 波即ち濕なけん  
 彼にありて此になくんば 權にあらすして誰れぞ 有を遮し無を立せば これ損こ  
 れ減なり  
 損減の利斧 常に佛性を研く 然りと雖も本佛は 損なく減なし  
 (二) 三諦圓涉にして 十世無碍なり 三種世間は 皆これ佛體なり  
 四種曼荼は 即ちこれ眞佛なり 汗字の實義 應さに提の如く學すべし  
 二乗は智劣なれば ために六識を説き 大乘は稍勝れば 乃ち(三) 八九を示す



(一) 同一多如  
法界は即ち六大一  
實の位なり、多法  
界は自證極位なり  
(二) 如々多法界  
は心理無量なる故  
に如々云ふ胎藏の  
前五理々胎藏の  
第六識大。金界の  
第六識大。色心無量  
は即ち胎藏界心は  
智即ち胎藏界心は  
網は帝珠無盡に  
の如し。故に帝珠  
鏡光の如し。故に  
各々五智無際云云  
具すこと。即ち例  
せば大日は四佛を  
四菩薩を四智を各々  
四又は慈觸愛慢な  
四智となす。法華經  
化城喻品に大地を  
以て墨となすと。  
入法界品に須彌山  
を以て筆となすと。

執滯して進まず 奚んか無數を知らん 密意を解せず 小を得て足んぬとなす  
已れの有を識らず 貧これに過ぎたるはなし 塵刹の海會は 即ち是れ我が寶なり  
汗字の實義 當るに是の如く學すべし

(一) 同一多如なり 多の故に(二) 如々なり (三) 理々無數 (四) 智々無邊なり

恒沙も喻へに非ず 刹塵もなほ小し 雨足多しと雖も 竝にこれ一水なり

燈光一にあらざれども 冥然として同體なり (五) 色心無量にして、實相無邊なり

心王心數 主伴無盡なり 互相に涉入して (六) 帝珠錠光のごとし

重々難思にして (七) 各の五智を具す 多にして不異なり 不異にして多なり 故に

一如と多づく

一は一にわらずして一なり 無數を一となす 如は如にわらずして常なり 同々相

似せり。

この理を説かざるは 即ちこれ隨轉なり 無盡の寶藏 これに因りて耗竭し

無量の寶車 ころに於て消盡す これを損減と謂ふ

(八) 地墨の四身 (九) 山毫の三密 本より圓滿して 凝然として不變なり。

(一) 吾我 人我が  
情の所執也。故  
に不可得也。阿  
字本不生に徹  
して已に金剛身  
得たるもの意。  
(二) 四種の行人  
法報應化の四身  
得る因行にある  
者。四句 兩、單、  
俱是、俱非、  
眼、天、耳、宿、命、他、心、漏  
盡。  
(三) 大我 人法の  
二我に即し且つ超  
越したる我を大我  
と云ふ。即ち平等  
一實の大我。吾我の  
法に於て邪正を論  
ぜざるをいふ。  
(四) 經 守護經第  
九の文。  
(五) 化身 他を  
て直に化益する身  
(六) 自受用 佛の  
自ら享受し給ふ結  
果身は佛自己の樂  
天地なれば自受用  
さいふ。

汗字の實義 斯れ之の謂ひか

第四に摩字の實義とは、所謂る摩字門一切諸法(一)吾我不可得の故に、これを實義と名  
く。所謂る我に二種あり、一には人我、二には法我。人は謂く四種法身、法は謂く一  
切諸法。一法界、一真如、一菩提より乃至八萬四千の不可說不可說の微塵數の法こ  
れなり。是の如くの四種法身、その數は無量なりと雖も、體は則ち一相一味にして、  
此れもなく彼れもなし。既に彼此なし、寧ろ吾我あらんや、これ則ち遮情の實義なり。  
此の處は則ち(二)金剛已還の(三)四種の行人等は希なるかな、夷なるかな、雙の如く盲の如  
し、絶の又の絶、遠の又の遠なり、(四)四句も及ばず、(五)六通もまた極まる、これを絶  
言の實義と名づく。經に曰く、摩字とは大日の種子なり。一切世間は我我を計すと雖  
も、未だ實義を證せず。唯し大日如來のみありて無我の中に於て(六)大我を得給へり。  
心王如來すでに是の如くの地に至りたまふ、塵數難思の心所眷屬、誰れか此の大我の  
身を得ざらん、これ則ち(七)表徳の實義なり。(八)經に云く、この摩字(九)化身の義とは、  
所謂る化とは、化用化作の義、遮那如來(一〇)自受用の故に、種種の神變を化作して無量  
の身雲を現じ、無邊の妙土を興する義、これを妙用難思の實義と名づく。また云く、







(一) 外道 佛敎以  
(二) 宗敎並に哲學  
(三) 大乘 聲聞緣  
覺の小乘敎  
(四) 大乘 法相、  
三論、天台、華嚴、其  
他眞言密敎を除け  
る一切の大乗敎。

(五) 世諦 佛と衆  
生と即ち菩提と煩  
惱と混一になり居  
るを世諦と云ふ。  
(六) 第一義諦 眞  
諦第一義諦と云ふ。  
即ち佛身のみ柄然  
自存してそれによ  
生の附屬せざるを  
云ふなり。  
(七) 眞諦 眞諦は  
要するに眞諦とは  
そのものに眞相に  
して世諦とは眞相  
の流轉したる當相  
を意味するなり。

(一) 正遍知者 二  
諦異りありと雖も  
して煩悩即菩提と  
は別々なる菩提に  
す煩悩の眞光を覆  
煩悩なる故に兩者  
之に差別を立てる  
見を除き去つたる  
正遍知者と云ふ。  
(二) 四諦の法 苦  
集滅道の四諦。苦  
息觀等の五觀によ  
りて心の妄用を止  
滅する觀法。  
(三) 七方便 三賢  
四善根等。  
(四) 空點 梵語の  
(クワン)の音を現す  
記號、即ちクワン  
ば其なるが如し。  
(五) 菩提心 菩提  
心に本有の修生の  
二義あり本有菩提  
心の覺性、人衆生  
提心は修養に依  
りて開顯したる覺  
性。  
(六) 大悲 大悲  
を根本となして萬

を擧げ、争ふて僞帝と稱す。若は(一)外道、若は(二)二乘、若は(三)大乘が、有人・有法・有因・有果・有常・有我・と執する、これらは皆これ摩字の點の中に攝す、即ちこれ増益の邊なり、未だ中道を得ず。若し無人・無法・無因・無果・無常・無我と執する等は、即ちこれ汗字の點の中に攝す、即ちこれ損減の邊なり、また未だ中道に會はず。若し非空・非有・非常・非斷・非一・非異・と執する等は、阿字の中の非の義の中に攝す。若し不生・不滅・不増・不減等の八不を執する等は、また阿字の中の不の義の中に攝す。また若し無色無形無言無說等と執する等は、また阿字の中の無の義の中に攝す、また未だ眞實の義に會はず、並びにこれ遮情の邊なり。若し未だ諸法の密號、名字の相、眞實語、如義語を解せざるものは、所有の言說思惟修行等は、悉くこれ顛倒なり、悉くこれ戲論なり、眞實究竟の理を知らざるが故に。故に龍猛菩薩の云ひたまはく、佛法の中に二諦あり、一には(四)世諦、二には第一義諦なり。世諦のための故には衆生ありと説き、第一義諦のための故には衆生は所有なしと説く。また二種あり、名字の相密號を知らざるもの、ために第一義の中に衆生ありと説く。若し人ありて、能くこの吽字等の密號密義を知るを則ち

(一) 正遍知者と名く。謂ゆる初發心の時、便ち正覺を成じ大法輪を轉ずる等は、良とにこの究竟の實義を知るに知りてなり。

また次に、この一字に約して、三乘の人の因行果を明さば、先づ聲聞の人を明し、次に緣覺に約し、後に菩薩を明す。初めに聲聞を明すとは、この吽字の中に訶字あり、即ちこれ因の義なり、伽等に聲聞乘の種性と云ふはこれその因なり。下たに汗字あり、これその行なり。聲聞の人の(二)四諦の法、(三)五停心觀、(四)七方便等これ行なり。是れ汗字の字相これ其れに當る。今聲聞の人は、灰身滅智を以て究竟の果となす。この吽字の上に空點あり、この(五)空點は摩字の所生なり、摩字は人法二空の義を兼ね。その人空の理は即ち聲聞所證の理なり、これを聲聞の人の因行果と名く。次に緣覺を明さば、伽等に所謂る緣覺乘の種性等はこれ其の因なり。この吽字の中に訶字あり、これ其の因なり。緣覺また十二因緣四諦方便等を觀ず。この吽字の下たに汗字あり、これ其れに當るなり。緣覺また人空の理を證す、これ其の果なり、上に准じてこれを知れ。次に菩薩を明さば、遮那經・金剛頂經等に、菩薩の人、(六)菩提心を因となし、(七)大悲を根となし、(八)方便を究竟となすと。今この吽字の本體は訶字なり、これ則ち一切











(一) 顯綱 顯教の  
 (二) 權關 顯教の  
 (三) 化城 顯教の  
 (四) 楊葉 顯教の  
 (五) 無盡莊嚴 恒沙  
 (六) 醍醐 牛乳に  
 (七) 醍醐 牛乳に  
 (八) 摩尼 寶珠  
 (九) 秦鏡 秦始皇  
 (十) 三藏 經律論

なり、等覺十地も室に入ること能はず、何かに況んや二乘凡夫をや、誰か堂に昇るこ  
 とを得ん。故に地論釋論には其の機根を離れたるを稱し、唯識中觀には言斷心滅を  
 歎す。是の如くの絶離は、並びに因位に約して談ず、果人を謂ふにはあらざるなり。  
 何を以てか知ることを得る、經論に明鑒あるが故に、其の明證を具に列ぬること後の  
 如し、求佛の客、庶くは其の趣きを曉れ。縱使(二)顯綱に觸いて以て(三)權關に墜  
 れて以て(四)稅駕す。所謂る(五)化城に息むの賓、(六)楊葉を愛するの兒、何んぞ能く(七)無盡莊  
 嚴恒沙の已有を保つことを得ん。(八)醍醐を棄て、牛乳を覓め、(九)摩尼を擲て以て魚珠  
 を拾ふが如くに至りては、寂種の人、膏盲の病、醫王は手を拱き、甘雨は何の益かあ  
 らん。若し善男善女ありて、一たび斯の芸りを躰がば、(十)秦鏡心を照し、權實は氷解  
 けなん。所有の明證、經論に至て多しと雖も、且く一隅を示す、庶くは童幼を裨ふこ  
 とあらん。問ふて曰く、古の傳法者、廣く論章を造つて六宗を唱敷し、(十一)三藏を開演  
 す。軸は廣廈に剩り人は卷舒に偃ふる、何んぞ勞しく斯の篇を綴る、利益如何ん。答  
 ふ、多く發揮することあり、所以に纂るべし、先匠の傳ふるところは皆これ顯教なり、  
 これは是れ密藏なり、人いまだ多く解らず、是の故に經論を弋釣して合して一の手鏡

(一) 他受用云云  
 (二) 佛の法爾法然の嚴  
 (三) 然たる絶對身  
 (四) 大覺の境界  
 (五) 法性佛と同じ  
 (六) 疏第一に云く、人大  
 (七) 間の淨水は天鬼の  
 (八) 心に隨ひて或は以  
 (九) て寶さなり、或は  
 (十) 以て火さなり、或は  
 (十一) 即ち業の差別に依  
 (十二) て心は種々なるも  
 (十三) のを一種に見るも  
 (十四) (十五) 實權顯教  
 (十六) (十七) 天親の著者なり  
 (十八) 師の著者なり  
 (十九) 地論の著者なり  
 (二十) 位は説くことを得  
 (二十一) るの意、謂ゆる絶  
 (二十二) 對界は説くこと得  
 (二十三) 得され共、相對界  
 (二十四) は説くこと得  
 (二十五) 二〇〇圓海不談、果  
 (二十六) 界は談するを得ず  
 (二十七) は絶對界なり

となす。  
 問ふ、顯密二教その別如何ん。答ふ、(一)他受用應化身の隨機の説之れを顯と謂ひ。(二)  
 自受用法性佛の説きたまふ(三)内證智の境を是れを秘と名づくるなり。  
 問ふ、應化身の説法は諸宗共に許す。彼の(四)法身の如きは色もなく像もなく、言語道  
 斷し心行處滅して説もなく示もなし。諸經共に斯の義を説き、諸論また是の如く談ず。  
 如今何んが爾法身の説法を談ずる、其の證は安んか存るや。答ふ、諸經論の中に往々  
 に斯の義あり、然りと雖も、文は執見に隨て隠れ、義は機根を逐ふて現はるのみ。譬  
 へば(五)天鬼の見別、人鳥の明暗の如し。  
 問ふ、若し汝が説の如きは諸經の中に斯の義あり。若し是の如くならば、何が故にか  
 前來の傳法者、斯の義を談せざる。答ふ、如來の説法は病に應じて藥を投ぐ、根機萬差  
 なれば針灸千殊なり、隨機の説は(六)權は多く(七)實は少し。菩薩は論を造ること經に隨  
 ひて義を演べて敢て遠越せず。是の故に(八)天親の十地には、(九)因分可説の談を馳せ、  
 龍猛の釋論には(十)因海不談の説を挾む、斯れ則ち經に隨つて詞を興す、究竟の唱へ  
 に非ず。然りと雖も顯を傳ふる法將は、深義を會して淺に従がへ、秘旨を遺して未



(一) 玄宗代宗 支  
 代宗は第九主  
 (二) 金剛智三藏 金  
 智は金剛智三藏  
 (三) 楞伽 楞伽經  
 (四) 智度論 智度論  
 (五) 五秘 五秘  
 (六) 儀軌 儀軌  
 (七) 樓閣 樓閣  
 (八) 經 經  
 (九) 聖位 聖位  
 (十) 頂 頂  
 (十一) 別 別  
 (十二) 經 經  
 (十三) 善 善  
 (十四) 經 經  
 (十五) 實 實  
 (十六) 瑜 瑜  
 (十七) 三 三  
 (十八) 論 論  
 (十九) 論 論  
 (二十) 論 論

だ思はず、師師伏膺して口に随つて心に蘊み、弟弟積習して宗に随つて談を成す、我れを益するの鋒を争ひ募りて、未だ己れを損するの劔を訪ふに遑わらず。加以釋教東夏に漸んで微より著に至る、漢明を始めとなし、周天を後となして、其の中間に翻傳するところは皆これ顯教なり。(一) 玄宗代宗の時。(二) 金智廣智の日、密教鬱りに起りて、盛んに秘趣を談ず、新藥日淺くして舊病いまだ除かず、(三) 楞伽法佛説法の文、(四) 智度性身妙色の句の如くに至りては、智臆に馳せて文を會し、自宗に驅て義を取る、惜いかな古賢醍醐を嘗めざることを。

問ふ、義若し是の如くならば、何等の經論にか顯密の差別を説く。答へて曰く、(五) 五秘、(六) 金峯、(七) 聖位經、(八) 遮那、(九) 楞伽、(十) 教王等(十一) 菩提、(十二) 智度、(十三) 摩訶衍 是の如くの經論に簡擇して説けり

問者の曰く、請ふ其の證を聞かん。答へて曰く、然なり。我れ當に汝がために日輪を飛して暗を破し、金剛を揮ひて以て迷を摧かん。問者の曰く、唯唯として聞かんと欲ふ。(一) 龍猛菩薩の釋大衍論に曰く、一切衆生は無始より來。皆本覺ありて捨離する時なし、何が故にか衆生先きに成佛するあり、後に成佛するあり、今成佛するあり、

(一) 一地斷 無明  
 根本煩惱を頓斷す  
 (二) 十地 佛身に  
 至る修行の階級  
 (三) 無上地 成佛  
 の位  
 (四) 三身 法報應  
 の三身なり  
 (五) 四句 有に執  
 す、無に執す、非  
 有に非有  
 (六) 無執 非有非  
 無に執す  
 (七) 減相 邊増損  
 俱に著邊の法なる  
 が故に五邊云ふ  
 (八) 體一心 法界心  
 空なりと遮斷する  
 (九) 千是 一切を  
 有なりと肯定す  
 (十) 中非 空非有  
 にしてその中間

また勤行あり、また不行あり、また聰明あり、また暗鈍ありて無量に差別なり、同じく一覺あらば、皆悉く一時に發心修行して無上道に至るべし。本覺の佛性は強劣別の故に、是の如く差別なるか、無明煩惱厚薄別の故に、是の如く差別なるか。若し初めの如く言はば此の事則ち爾らず。所以何んとなれば、本覺の佛性は過恒沙の諸の功德を圓んじて増減なきが故に。若し後の如く言はば此のことまた然らず、所以は何んとなれば、(一) 一地斷の義、成立せざるが故に。是の如く種々無量の差別は、皆無明に依りて住持することを得、至理の中に於て關ることなしまくのみ。若し是の如くならば、一切の行者、一切の惡を斷じ一切の善を修して、(二) 十地を超え(三) 無上地に到り、(四) 三身を圓滿し(五) 四徳を具足す。是の如くの行者は明とやせん無明か。是の如くの行者は無明の分位にして明の分位にあらず。若し爾らば清淨本覺は、無始より來た修行を觀す他力を得るに非ず、性徳圓滿し本智具足せり、また(六) 四句を出で、また(七) 五邊を離れたり、自然の言も自然なること能はず、清淨の心も清淨なること能はず、絶離絶離せり、是の如くの本處は明とやせん無明か。是の如きの本處は無明の邊域にして明の分位にあらず。若し爾らば(八) 一法界心は、(九) 百非にあらず(十) 千是を背けり(十一) 中非







(一) 等覺十地 顯  
 佛位の階段に入り  
 (二) 海印三昧 大  
 海は空中の一切を  
 影するが如く菩薩  
 の心は一切の機類  
 を印す此の狀態を  
 海印三昧と云ふ  
 (三) 一乘の教義 華  
 嚴經十門の所化の  
 機に應じて十種の  
 三昧門を建立する  
 意なり  
 (四) 別教 頓入者  
 の爲めに三乘と一  
 乘とは別なりと説  
 (五) 同教 漸入者  
 の爲めに一乘と三  
 乘とは同なりと説  
 (六) 性海果分 因  
 果の中に於て眞如  
 は大海の如しと譬  
 (七) 圓融自在 縁  
 を以て體を顯すも  
 縁の故に果分の自  
 在なるに  
 (八) 圓融自在 縁  
 を以て體を顯すも  
 縁の故に果分の自  
 在なるに

(一) 形對 因果を  
 對立させんが爲め  
 (二) 縁を離れて  
 縁を離れて  
 (三) 縁を離れて  
 縁を離れて  
 (四) 縁を離れて  
 縁を離れて  
 (五) 縁を離れて  
 縁を離れて  
 (六) 縁を離れて  
 縁を離れて  
 (七) 縁を離れて  
 縁を離れて  
 (八) 縁を離れて  
 縁を離れて  
 (九) 縁を離れて  
 縁を離れて  
 (十) 縁を離れて  
 縁を離れて

諭して曰く、所謂る不二摩訶衍及び圓圓海徳の諸佛とは、即ち是れ自性法身なり、是を秘密藏と名け、亦金剛頂大教王と名く。(一) 等覺十地等も見聞すること能はず、故に秘密の號を得、具には金剛頂經に説くが如し。  
 華嚴五教の第一の卷に曰く。今將さに釋迦佛の(二) 海印三昧(三) 一乘教義を開かんとするに、略して(四) 十門を作る。初めに建立乘を明さば、然も此の一乘教義の分齊を開きて二門となす。一には(五) 別教、二には(六) 同教。初の中にまた二つ。一つには是れ(七) 性海果分、是れ不可説義に當る、何を以ての故に、教と相應せざるが故に、即ち十佛の自境界なり。故に地論に因分可説果分不可説と云つば是れなり。二には是れ縁起因分即ち普賢の境界なり。又中卷の十玄縁起無碍法門義に云く、夫れ法界の縁起は乃ち自在無窮なり、今要門を以て略攝して二とす。一には究竟果證の義を明す、即ち十佛の自境界なり。二には縁に隨ひ因に約して教義を辯す、即ち普賢の境界なり。初めの義とは、(八) 圓融自在にして一即一切一切即一なり、其の狀相を説くべからずまのみのみ。華嚴經の中の究竟果分の國土海及び十佛の自體融義等の如きは即ち其の事なり。因陀羅及び微細等を論せず、此れ不可説の義に當れり。何を以ての故に、教と相應せざるが

故に。故に地論に因分可説果分不可説と云つば即ち其の義なり。問ふ、義若し是の如くならば、何が故にか經の中に、乃ち佛不思議品等の果を説くや。答ふ、此の果の義は是れ縁に約して、(一) 形對して因を成せんがための故に此の果を説く、究竟自在の果に據るにあらず。然る所以は、不思議法品等は、因位と同會にして説くがためなり、故に知りぬ形對するまのみのみ。又た云く。問ふ、上に果分は(二) 縁を離れて不可説の相なり。但し因分を論ずとは、何が故にか十信の終心に、即ち作佛得果の法を辯するや。答ふ、今作佛と言ふは、但し初め見聞より已去、乃至(三) 第二生に即ち解行を成じ、解行の終心に因位窮滿するもの、第三生に於て即ち彼の究竟自在圓融の果を得るなり。此の因の體は果に依りて成するに由るが故に。但し因位滿する者の、勝進して即ち果海の中に没す、是れ證の境界たるが故に不可説なりまのみのみ。  
 諭して曰く。十地論及び五教の性海不可説の文と、彼の龍猛菩薩の(四) 不二摩訶衍の圓圓性海不可説の言と懸かに會へり。所謂る因分可説とは顯教の分齊、果性不可説とは即ち是れ秘密の本分なり。何を以てか然か知るとならば、(五) 金剛頂經に分明に説くが故に、有智の者審に之を思へ。



(一) 三諦の理、空假中の三諦圓融の理。  
 (二) 隨他意語、所化の機に隨ひての教説。  
 (三) 隨自他意語、自己の所説を所化の機に相應させての教説。  
 (四) 隨自意語、全々機根を離れて自己の機に相應して自意のまゝの教説。  
 (五) 具は有、縁は空、雪は非有、鶴は常樂我淨、眞如なり。即ち成佛の四徳也。  
 (六) 二諦。眞俗空有の二諦。  
 (七) 眞俗空有の二諦。眞俗空有の二諦。  
 (八) 眞俗空有の二諦。眞俗空有の二諦。  
 (九) 眞俗空有の二諦。眞俗空有の二諦。  
 (十) 眞俗空有の二諦。眞俗空有の二諦。

天台止觀の第三の卷に云く。此の(一)三諦の理は、不可思議にして決定の性なし、實に説くべからず。若し縁のために説かば三つの意を出す。一には隨情説即ち(三)隨他意語なり。二には隨智説即ち(四)隨自意語なり。三には隨智説即ち(四)隨自意語なり。云何んが隨情説の三諦、旨の乳を識らざれば爲に(五)貝鉢雪鶴の四の譬を説く、四旨各各に解を作して執して四の諍ひを起すが如く、凡情の愚翳もまた復た是の如し。三諦を識らざれば、大悲方便をもて而も爲めに有門・空門・空有門・非空非有門を説きたまふ。是の諸の凡夫、終に(六)常樂我淨の眞實の相を見ること能はず、各の空有を執して、互相ひに是非すること彼の四旨の如し。所以に常途に(七)二諦を解する者(八)二十三家なり、家家不同にして各各に異見し、自を執し他を非す、甘露を飲むと雖も、命を傷つて早く夭すと云云。隨智説の三諦とは、初住より去た、但し中を説くに視聽を絶するのみにあらず、(九)眞俗もまた然なり。三諦言微にして唯智の所照なり、示すべからず思ふべからず、聞く者は驚恠しなん、内にあらず外にあらず、難にあらず易にあらず、相にあらず非相にあらず、是れ世法にあらず相貌あることなく、百非洞遺し四句皆亡す、唯し佛と佛とのみ乃し能く究盡したまへり。言語道斷し心行處滅す、凡情を以て圖り想ふべからず。若しは一、若しは三、

(一) 二乗。聲聞、緣覺の教理。  
 (二) 乳の眞色。隨智説の三諦の眞相。  
 (三) 一念の心中。一心に三千を觀じすを云ふなり。  
 (四) 此の宗。天台宗。  
 (五) 他宗。華嚴、三論、法相の三家の大乗。  
 (六) 楞伽經。楞伽經第八の文なり。  
 (七) 無餘涅槃。身心共に滅却したる灰身滅智の境を云ふなり。  
 (八) 授記。小を捨て大を求めしめんが爲めの注意の意味なり。  
 (九) 大惠。釋迦佛說法の時の上首。四諦の理を觀する行法。  
 (十) 大菩提。此處では大乘教所談の菩提を意味す。善提を應化佛の機に應じて種々身を現じたる佛身。

皆情望を絶つ、尙し(一)二乗の測るところにあらず、何かに況んや凡夫をや。(二)乳の眞色、眼開きたるは乃ち見、徒に言語を費せども旨は終に識らざるが如し。是の如くの説をば名けて隨智説の三諦の相となす、即ち是れ隨自意語なり。諭して曰く、此の宗の所觀は三諦に過ぎず(三)一念の心中に即ち三諦を具す、此れを以て妙となす。彼の百非洞遺四句皆亡、唯佛與佛乃能究盡の如きに至りては、(四)此の宗も(五)他宗も此れを以て極とす、此れ則ち顯教の關楔なり。但し眞言藏家には、これを以て入道の初門となす、是れ秘奥にはあらず、仰覺の薩埵、思はずんばあるべからず。(六)楞伽經に云く。佛大惠に告げたまはく、我れ曾し菩薩の行を行せしとき、諸の聲聞等の(七)無餘涅槃に依るがために而も(八)授記を與ふ。(九)大惠、我れ聲聞に授記を與ふことは、怯弱の衆生に勇猛の心を生せしめんがためなり。大惠、此の世界の中及び餘の佛國に、諸の衆生、菩薩の行を行じて、而もまた(一〇)聲聞法の行を樂ふあり、彼の心を轉じて(一一)大菩提を取らしめんがためなり。應化身の佛、應化の聲聞のために授記す、報佛法身の佛として記前を授くるにはあらず。諭して曰く、此の文に依らば、法華經は是れ(一二)應化佛の所説なり。何を以ての故に、



應化の聲聞等のために、佛は記前を授けたまふが故に。或る者は法身の説と談ず、甚だ誣罔なりまくのみ。

慈恩法師の二諦義に云く、(一) 唯識の二諦に各の四重あり、世俗諦の四名とは、一には(二) 世間世俗諦 または有名無實 二には(三) 道理世俗諦 または隨事差別 三には(四) 證得世俗諦 または方便安立 四には(五) 勝義世俗諦 または假名非安立諦と名づく。勝義諦の四名とは、一には世間勝義諦 または體用顯現 二には道理勝義諦 または因果差別 三には證得勝義諦 または依門顯實 四には勝義勝義諦 または癡詮談旨 前の三種をば安立勝義諦と名け、第四の一種は非安立勝義諦なり。又云く、勝義勝義諦とは、體妙離言にして迥かに衆法に超へたるを名けて勝義とす、聖智の内證にして前の四俗に過ぎたるを勝義諦と名く。又云く、第四の勝義勝義諦とは、謂く非安立癡詮談旨一眞法界なり。

喻して曰く。此の章の中の(九) 勝義勝義癡詮談旨、聖智内證一眞法界、體妙離言等といは、是の如くの絶離は即ち是れ顯教の分域なり。言く因位の人等の四種の言語みな及ぶこと能はず、唯し自性法身のみ有して、如義眞實の言を以て、能く是の絶離の境界を説きたまふ、是れを眞言秘教と名く、金剛頂等の經これなり。

(一) 慈恩法師の大成者 那天台の二諦義にあり 義林章第二にあり 俗を以て眞を影す 俗を以て眞を影す 眞を以て俗を影す 眞を以て俗を影す (二) 世間世俗諦 俗を以て眞を影す (三) 道理世俗諦 俗を以て眞を影す (四) 證得世俗諦 俗を以て眞を影す (五) 勝義世俗諦 俗を以て眞を影す (六) 勝義勝義諦 俗を以て眞を影す (七) 勝義勝義諦 俗を以て眞を影す (八) 勝義勝義諦 俗を以て眞を影す (九) 勝義勝義諦 俗を以て眞を影す

智度論の第五に云く。不生・不滅・不斷・不常・不一・不異・不去・不來なり。因縁生の法は諸の(一) 戲論を滅す、佛は能くこれを説きたまふ。我れ今當に禮すべし、乃至(二) 諸法は生にわらず、滅にわらず、不生にわらず、不滅にわらず、非不生滅にわらず、また非非不生滅にわらず。已に解脱を得つれば、空にわらず、不空にわらず。是の如き等は諸の戲論を捨滅して、言語道斷し深く佛法に入る、心通無碍にして不動不退なるを無生忍と名く、是れ(三) 助佛道の初門なり。又卅一に云く、また次に(四) 有爲を離れて則ち(五) 無爲なし。所以は何となれば、有爲の法の實相は即ち是れ無爲なり、無爲の相は則ち有爲にわらず。但し衆生の顛到せるがための故に、分別して有爲の相とは生滅住異なり、無爲の相とは不生・不滅・不住・不異なりと説けり、是れを入佛法の初門となす。龍猛菩薩の(六) 般若燈論の觀涅槃品の頌に曰く。彼の(七) 第一義の中には 佛は本より説法したまはず (八) 佛は無分別者なり 大乘を説くこと然らず (九) 化佛説法すといはト 是のこと則ち然らず

(一) 戲論 論理上の遊戯にして少しも眞理に觸れざるを云ふ (二) 諸法 森羅萬象 (三) 助佛道の初門 密教の初門なり (四) 有爲 形あるもの (五) 無爲 形なきもの (六) 般若燈論 唐波頗密多羅の譯 (七) 第一義の中なり (八) 佛は無分別者 眞如法身の中なり (九) 化佛 應化佛



(一) 無分別性空  
心行所滅なる故に  
その本性は空寂な  
(二) 衆生は無體  
無分別智には生佛  
能所等の差別の相  
なきが故に衆生も  
勿論無體なり。ま  
た佛體も無體なり  
(三) 分別云云  
若燈論なり。般  
(四) 一相の云云  
第一義諦は空理平  
等相なる故に一相  
と云ふその體は無  
相なり。  
(五) 不二智 眞俗  
は二の如くこれを  
不二なり。之れを  
知るを不二智とい  
ふ。  
(六) 辟支佛 緣覺  
人我と法我とを執  
すべき法にあらざ  
るを云ふ。  
(七) 第一波羅蜜  
第一義諦は畢竟空  
なり。觀する理。  
(八) 最上乘 秘密  
の最上の教。  
(九) 眞佛なり  
法身なり眞佛なり  
化身なり眞佛なり  
應化身

佛は説法に心なし 化者は是れ佛にあらず  
第一義の中に於て 彼れまた説法せず  
(一) 無分別性空にして 悲心あること然らず  
(二) 衆生は無體の故に また佛體のあることなし  
彼の佛は無體の故に また悲愍の心なし  
(三) 分別明菩薩の釋に云く、此の中に第一義を明さば、(四) 一相の故に所謂る無相なり、佛も無く亦大乘もなし。第一義とは是れ(五) 不二智の境界なり。汝が説く偈は正しく是れ我が佛法の道理を説けり、今當に汝がために如來の身を説かん。如來の身とは無分別なりと雖も、先に利他の願力を種へしを以て、大誓の莊嚴薰修するが爲めの故に、能く一切衆生を攝して、一切時に於て化佛の身を起す。此の化身に因りて文字章句ありて次第に聲を出す、一切の外道・聲聞・辟支佛に共せざるが故に、而も爲めに(六) 二種の無我を開演す。(七) 第一義波羅蜜を成就せんと欲ふが爲めの故に、(八) 最上乘に乗ずる者を成就せんと欲ふが爲めの故に、名けて大乘となす。(九) 第一義の佛あるが故に、彼の佛に依止して(一〇) 化身を起す、此の化身より説法を起す、第一義の佛は説法の因とな

即ち俗諦のための  
佛身なり。

(一) 觀邪見品 般  
若燈論第七觀邪  
見品の文なり。  
(二) 色は見を起す  
諸の外道小乘等は  
五蘊法に於て生滅  
斷常等の見を起す  
が故に之れを起す  
色は即ち空なるが  
故に蘊も空なるが  
なり。  
(三) 般若波羅蜜  
智慧到彼岸と譯す  
(四) 遮情の門 智  
の心を主として  
を遮す顯教の眞諦  
無佛無生の意なり  
(五) 表徳の秘密の  
教へに於て不二果  
海あり、法界曼荼  
羅ありと表すを云  
ふ。

るに由るが故に、我が所立の義をも壞せず、また世間の所欲をも壞せず。  
又た云く、第一義の中には幻の如く化の如し、誰か説き誰れか聽かん、是を以ての故に如來は處所なし、一法として爲めに説くべきことなし。  
又(一) 觀邪見品に云く、般若の中に説かく、佛、勇猛極勇猛菩薩に告げたまはく、(二) 色は見を起す處にあらず、また見を斷ずる處にあらず、乃至(三) 受想行識も見を起す處にあらず、また見を斷ずる處にあらずと知るをば、是れを(四) 般若波羅蜜と名く。今は起等の差別縁起なきを以て、開解せしむることは所謂る一切の戲論及び一異等の種種の見を息めて、悉く皆寂滅なり、是れ自覺の法なり、是れ如虛空の法なり、是れ無分別の法なり、是れ第一義の境界の法なり、是の如く等の眞實の甘露を以て開解せしむる、是れ一部の論宗なり。  
喩して曰く、今この文に依らば明かに知んぬ、中觀等は、諸の戲論を息めて寂滅絶離なるを以て宗極となす。是の如くの義の意は、皆これ(五) 遮情の門なり、是れ(六) 表徳の謂ひにはあらず。論主自ら入道の初門と斷りたまへり、意わらむ智者、心を留めて之を九思せよ。







(一) 言文能く名に依りてその體を表すこと。如實云云法體の義は文字を離れたる故に。我が説法應化佛の説法を指す如義語なり。法身の如義語なり。文字を籍りて能くその體を表すこと。實空云云眞如實相の空理は虚妄ならざるが故に不空。二相 空と不空。中間 亦は實空とに非ざるもの。三不空 實空と實空と不空。處所 實空二邊の中と云ふ。起信論にあり。

無言説とは、本受用虚妄の境界を念じて、境界によりて夢みる、覺め已りて虚妄の境界に依りて、不實なりと知りて而も生ず。大惠、執著言説とは、本と所聞所作の業を念じて而も生ず。大惠、無始言説とは、無始より來た、戲論に執著して煩惱の種子勳翌して而も生ず。三昧契經の中に是の如くの説をなす。舍利弗の言さく、一切の萬法は皆悉く(一)言文なり、言文の相は即ち義とするにあらず、(二)如實の義は言説すべからず。今は如來何んが説法したまふ。佛の言ひたまはく、(三)我が説法とは、汝衆生、生に在りて説くを以ての故に不可説と説く、之の故に是れを説く。我が所説とは、(四)義語にして文にあらず、衆生の説とは、(五)文語にして義にあらず、義語にあらざるものは皆悉く空無なり、空無の言は義を言ふことなし、義を言はざるものは皆これ妄語なり。如義語とは、(六)實空にして不空なり、空實にして不實なり、(七)二相を離れて(八)中間にも中らず、不中の法は(九)三相を離れたり、(一〇)處所を見ず、如如如説の故に。是の如くの五が中に、前の四の言説は虚妄の説なるが故に、眞を談すること能はず。後の一の言説は如實の説なるが故に、眞理を談することを得。(一一)馬鳴菩薩は前の四に據るが故に、是の如きの説を作して離言説相と云ふ。心量に十あり、云何んが十とする、

(一) 眼識心 眼よ  
(二) 眼識心 眼よ  
(三) 眼識心 眼よ  
(四) 眼識心 眼よ  
(五) 眼識心 眼よ  
(六) 眼識心 眼よ  
(七) 眼識心 眼よ  
(八) 眼識心 眼よ  
(九) 眼識心 眼よ  
(一〇) 眼識心 眼よ  
(一一) 眼識心 眼よ  
(一二) 眼識心 眼よ  
(一三) 眼識心 眼よ  
(一四) 眼識心 眼よ  
(一五) 眼識心 眼よ  
(一六) 眼識心 眼よ  
(一七) 眼識心 眼よ  
(一八) 眼識心 眼よ  
(一九) 眼識心 眼よ  
(二〇) 眼識心 眼よ  
(二一) 眼識心 眼よ  
(二二) 眼識心 眼よ  
(二三) 眼識心 眼よ  
(二四) 眼識心 眼よ  
(二五) 眼識心 眼よ  
(二六) 眼識心 眼よ  
(二七) 眼識心 眼よ  
(二八) 眼識心 眼よ  
(二九) 眼識心 眼よ  
(三〇) 眼識心 眼よ  
(三一) 眼識心 眼よ  
(三二) 眼識心 眼よ  
(三三) 眼識心 眼よ  
(三四) 眼識心 眼よ  
(三五) 眼識心 眼よ  
(三六) 眼識心 眼よ  
(三七) 眼識心 眼よ  
(三八) 眼識心 眼よ  
(三九) 眼識心 眼よ  
(四〇) 眼識心 眼よ  
(四一) 眼識心 眼よ  
(四二) 眼識心 眼よ  
(四三) 眼識心 眼よ  
(四四) 眼識心 眼よ  
(四五) 眼識心 眼よ  
(四六) 眼識心 眼よ  
(四七) 眼識心 眼よ  
(四八) 眼識心 眼よ  
(四九) 眼識心 眼よ  
(五〇) 眼識心 眼よ  
(五一) 眼識心 眼よ  
(五二) 眼識心 眼よ  
(五三) 眼識心 眼よ  
(五四) 眼識心 眼よ  
(五五) 眼識心 眼よ  
(五六) 眼識心 眼よ  
(五七) 眼識心 眼よ  
(五八) 眼識心 眼よ  
(五九) 眼識心 眼よ  
(六〇) 眼識心 眼よ  
(六一) 眼識心 眼よ  
(六二) 眼識心 眼よ  
(六三) 眼識心 眼よ  
(六四) 眼識心 眼よ  
(六五) 眼識心 眼よ  
(六六) 眼識心 眼よ  
(六七) 眼識心 眼よ  
(六八) 眼識心 眼よ  
(六九) 眼識心 眼よ  
(七〇) 眼識心 眼よ  
(七一) 眼識心 眼よ  
(七二) 眼識心 眼よ  
(七三) 眼識心 眼よ  
(七四) 眼識心 眼よ  
(七五) 眼識心 眼よ  
(七六) 眼識心 眼よ  
(七七) 眼識心 眼よ  
(七八) 眼識心 眼よ  
(七九) 眼識心 眼よ  
(八〇) 眼識心 眼よ  
(八一) 眼識心 眼よ  
(八二) 眼識心 眼よ  
(八三) 眼識心 眼よ  
(八四) 眼識心 眼よ  
(八五) 眼識心 眼よ  
(八六) 眼識心 眼よ  
(八七) 眼識心 眼よ  
(八八) 眼識心 眼よ  
(八九) 眼識心 眼よ  
(九〇) 眼識心 眼よ  
(九一) 眼識心 眼よ  
(九二) 眼識心 眼よ  
(九三) 眼識心 眼よ  
(九四) 眼識心 眼よ  
(九五) 眼識心 眼よ  
(九六) 眼識心 眼よ  
(九七) 眼識心 眼よ  
(九八) 眼識心 眼よ  
(九九) 眼識心 眼よ  
(一〇〇) 眼識心 眼よ

一には(一)眼識心、二には(二)耳識心、三には(三)鼻識心、四には(四)舌識心、五には(五)身識心、六には(六)意識心、七には(七)末那識心、八には(八)阿梨耶識心、九には(九)多一識心、十には(一〇)一識心なり。是の如くの十が中に、初めの九種の心は眞理を縁せず、後の一種の心は、眞理を縁して而も境界となることを得。今前の九に據りて、是の如くの説を作して離心縁相と云ふ。  
 諭して曰く言語心量等の離不離の義は、此の論に明かに説けり、顯教の智者は詳かんにて迷を解け。  
 金剛頂發菩提心論に云く。諸佛菩薩、昔し因地に在して、是の心を發し已りて、勝義(シヨウギ)行願(ギョウガン)・三摩地(サンマヂ)を戒となす、乃し成佛に至るまで、時として暫くも忘るゝことなし、惟し眞言法の中にのみ即身成佛するが故に、是れ(一)三摩地(サンマヂ)の法を説く、諸教の中に於て闕して書せず。  
 諭して曰く。此の論は龍樹大聖所造の千部の論の中の密藏肝心の論なり。是の故に顯密二教の差別淺深、及び成佛の遲速勝劣、皆此の中に説けり。謂く諸教とは他受用身及び變化身等所説の法の諸の顯教なり。是れ三摩地の法を説くとは、自性法身所説の



秘密真言三摩地門これなり、所謂る金剛頂十萬頌の經等これなり。

國譯辯顯密二教論卷の上終

國譯辯顯密二教論

沙門空海の撰

卷の下

(一)六波羅蜜經の第一に云く。

(二)法寶は自性恒に清淨なり 諸佛世尊は是の如く説きたまふ

(三)客塵煩惱に覆はるゝこと 雲の能く日の光明を翳すが如し

無垢の法寶は衆徳を備へて (四)常樂我淨悉く圓滿せり

法性の清淨なるをば云何んが求めん (五)無分別智のみ而も能く證す

第一の法寶とは、即ち是れ(六)摩訶般若解脱法身なり。第二の法寶とは、謂く(七)戒定智慧の諸の妙功德なり。所謂る(八)三十七菩提分法なり、乃至この法を修するを以て、而も能く彼の清淨法身を證す。第三の法寶とは、所謂る過去無量の諸佛所説の正法と、及び(九)我が今の所説となり。所謂る八萬四千の諸の妙法蘊なり、乃至有縁の衆生を調伏し純熟す、而も阿難陀等の諸大弟子をして、一たび耳に聞き、皆悉く憶持せしむ。

(一)六波羅蜜經の第一に云く。 (二)法寶は自性恒に清淨なり。 (三)客塵煩惱に覆はるゝこと。 (四)常樂我淨悉く圓滿せり。 (五)無分別智のみ而も能く證す。 (六)摩訶般若解脱法身なり。 (七)戒定智慧の諸の妙功德なり。 (八)三十七菩提分法なり。 (九)我が今の所説なり。 (十)所謂る八萬四千の諸の妙法蘊なり。 (十一)乃至有縁の衆生を調伏し純熟す。 (十二)而も阿難陀等の諸大弟子をして、一たび耳に聞き、皆悉く憶持せしむ。



(一)素怛纒藏 經藏と譯す。又名契經。  
 (二)毗奈耶藏 調伏と譯す。又名律藏。  
 (三)阿毗達磨藏 論藏と譯す。又名對治。  
 (四)般若波羅蜜藏 智慧到彼岸藏と譯す。又名般若。  
 (五)四重 犯姪、犯盜、殺人、大妄語なり。  
 (六)八重 四重は男僧のみの戒なれど之れは尼僧に科するものにして摩訶重境、八事成重、覆尼重戒、隨舉必罰を加へたるものなり。  
 (七)五無間 殺父母、殺阿羅漢、出佛科血、破法輪僧なり。  
 (八)謗法等經 大乘教を信ぜざる罪。  
 (九)一闍提 因果不信せざる罪。  
 (一〇)陀羅尼藏 呪文藏と譯す。即ち眞言密法のことなり。

攝して五分とす、一には素怛纒、二には毗奈耶、三には阿毗達磨、四には般若波羅蜜多、五には陀羅尼門なり。此の五種の藏をもて有情を教化し、度すべきところに隨へて而も爲めに之れを説く。若し彼の有情、山林に處し常に閑寂に居して、靜慮を修せむと樂ふには、而も彼れがために(一)素怛纒藏を説く。若し彼の有情、威儀を習ふて正法を護持し、一味和合にして久住することを得せしめんと樂ふには、而も彼が爲めに(二)毗奈耶藏を説く。若し彼の有情、正法を説きて性相を分別し、循環研覈して甚深を究竟せんと樂ふには、而も彼が爲めに(三)阿毗達磨藏を説く。若し彼の有情、大乘眞實の智慧を習ふて、我法執著の分別を離れんと樂ふには、而も彼れが爲めに(四)般若波羅蜜多藏を説く。若し彼の有情、契經調伏對法般若を受持すること能はず、或はまた有情、諸の惡業の(五)四重・(六)八重・(七)五無間罪・(八)謗方等經・(九)一闍提等の種々の重罪を造れるを銷滅することを得せしめ、速疾に解脱し頓悟涅槃すべきには、而も彼れがために諸の(一〇)陀羅尼藏を説く。此の五法藏は、譬へば乳・酪・生蘇・熟蘇及び妙醍醐の如し。契經は乳の如く、調伏は酪の如く、對法教は彼の生蘇の如く、大乘般若は猶し熟蘇の如く、惣持門は譬へば醍醐の如し醍醐の味は乳酪蘇の中に微妙第一にして、能く諸病を

(一)慈氏 釋尊の異名。

(二)五味 乳、酪、生蘇、熟蘇、醍醐なり。  
 (三)五藏 契經、調伏、對法、般若、眞言なり。  
 (四)震旦 支那の異名。  
 (五)我が乗たる内證智 我が乗たる内證智の意なり。  
 (六)南大國 南印度即ち南天竺なり。  
 (七)龍樹菩薩 此の南天竺の鐵塔中より大日經及金剛頂經の兩部の大經を得したるなり。  
 (八)大乘無上の法 眞言秘密の法門。

除き、諸の有情をして身心安樂ならしむ。總持門は契經等の中に取も第一たり、能く重罪を除き、諸の衆生をして生死を解脱し、速かに涅槃安樂の法身を證せしむ。復次に(一)慈氏、我が滅度の後に阿難陀をして所説の素怛纒藏を受持せしめ、其の卽波離をして所説の毗奈耶藏を受持せしめ、迦多衍那をもて所説の阿毗達磨藏を受持せしめ、曼殊室利菩薩をして所説の大乘般若波羅蜜多を受持せしめ、其の金剛手菩薩をして、所説の甚深微妙の諸の總持門を受持せしむ。喻して曰く。今この經文に依らば、佛、(二)五味を以て(三)五藏に配當し、總持をば醍醐と稱し、四味をば四藏に譬へたまへり。(四)震旦の人師等、醍醐を争ひ盜むで各の自宗に名く。若し斯の經を鑿みば、則ち掩耳の智、割割を待たじ。楞伽經の第九に云く。(五)我が乗たる内證智は、妄覺は境界にあらず、如來滅世の後、誰か持して我がために説かん。如來滅度の後、未來に當さに人あるべし。大惠、汝諦かに聽け、人ありて我が法を持すべし。(六)南大國の中に於て、大徳の比丘あり、龍樹菩薩と名じん、能く有無の見を破して、人のために我が乗たる、(七)大乘無上の法を説くべし。喻して曰く。我が乗たる内證智と言つは、是れ即ち眞言秘密藏を示す、如來明に記し







(一)五智 大日如來の無量智を五つに分類したるものなり。即ち法界體性智、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智なり。(二)四種法身 自性法身、受用法身、變化法身、等流法身なり。即ち大日如來の發現關係を四分したるものなり。(三)自受用佛 自ら說法して自ら受樂する位。(四)三密門 身語意の三密の法門。自受用法樂の法門。自ら聞いて自ら樂しむこと。

(六)海會の壇 曼荼羅なり。(七)三界 過去現在未來の三界なり。

とは、此れ即ち理智法身の境界なり。

また金剛頂瑜祇經に云く。金剛界遍照如來は、(一)五智所成の(二)四種法身を以て、本有金剛界金剛心殿の中に於て、自性所成の眷屬乃至微細法身の秘密心地の、十地を超過せる身語心の金剛と與なり等云云。また云く。諸地の菩薩、能く見ること有ることなし、俱に覺知せずと云云。また分別聖位經に云く。(三)自受用佛は、心より無量の菩薩を流出す皆同一性なり謂く金剛の性なり。是の如くの諸佛菩薩は自愛法樂の故に、各の自證の(四)三密門を説きたまふ云云。是の如く等は、並びに是れ自性・受用・理智法身の境なり。是の法身等は(五)自受法樂の故に、此の内證智の境界を説きたまふ。彼の楞伽の法身は内證智の境を説き、應化は説かずと云ふ文と冥かに合へり。此れ則ち顯教の絶離する所の處なり。若し有智の人、纔に斯の文を目ば、雲霧は忽ちに朗かんじて、關鑰自ら開けん、井底の鱗は逸に巨海に泳ぎ、蕃籬の翼は翰く寥廓に飛ばん、百年の生盲は乍ちに乳の色を辯へ、萬劫の暗夜は頓に日光を塞げん。金剛頂分別聖位經に云く。眞言陀羅尼宗とは、一切如來秘奧の教、自覺聖智修證の法門なり、またはれ一切如來の(六)海會の壇に入りて菩薩の職位を受け、(七)三界を超過

(一)三摩地門 眞言教なり。

(二)五智 三十七方面より分類して三十七となす。(三)地前の菩薩 六度萬行の行の意ある因位の行の意ある四諦の十二因縁、六度等及權大乘之れ小乘及權大乘の法門なり。

(五)雙樹 拘尸那城の邊り跋提河畔の邊り釋尊入滅の處なり。(六)報身 他受用報身なり。

(七)皆同一性 皆自受用佛と同一の性質を有するものなり。

して、佛の教勅を受くる(一)三摩地門なり。是の因縁を具すれば、頓に功德廣大の智慧を集めて、無上菩提に於て皆退轉せず、諸の天魔、一切の煩惱及び諸の罪障を離れ、念念消融して佛の四種身を證す。謂く自性身、受用身、變化身、等流身なり。(二)五智三十七等の不共の佛の法門を満足す。此れは宗の大意を標す。然も如來の變化身は、閻浮提摩竭陀國の菩提道場に於て、等正覺を成じ、(三)地前の菩薩・聲聞・緣覺・凡夫のために、(四)三乘の教法を説き、或は他意趣に依りて説き、或は自意趣にして説きたまふ。種々の根器種々の方便をもて、説の如く修行すれば、人天の果報を得、或は三乘解脱の果を得、或は進み或は退ひて、無上菩提に於て三無數大劫に、修行し勤若して、方に成佛するたとを得、王宮に生じ(五)雙樹に滅して、身の舍利を遺す。塔を起て供養すれば、人天勝妙の果報及び涅槃の因を感受す。此れは略して釋迦如來(六)報身の毗盧遮那、色界頂第四禪阿迦尼吒天宮に於て、雲集せる盡虛空遍法界の一切の諸佛、十地満足の諸大菩薩を證明として身心を驚覺して、頓に無上菩提を證するには同せず、此れは他受用身の佛は心より無量の菩薩を流出す、(七)皆同一性なり。謂く金剛の性なり、遍照如來に對して、灌頂の職位を受く、彼等の菩薩は各の三密門を説きて、以て毗盧遮那如來及び



(一) 加持の教勅なり  
(二) 未流通の教勅なり  
(三) 世出間の菩薩の住處、出世間の菩薩の住處、悉く成就することなり  
(四) 五輪と成爲て本標幟を持せり  
(五) 若は見、若は聞、若は輪壇に入りぬれば、能く有情の五趣輪轉の生死の業障を斷じ、五解脱輪の中に於て一佛より一佛に至るまで供承事して、皆無上菩提を獲得して、決定の性を成せしむ、猶し金剛の沮壞すべからざるが如し。此れ即ち毗盧遮那聖衆の集會なり、便ち現證窳都婆塔となる、一一の菩薩、一一の金剛、各の(五)本三昧に住して自解脱に住す、皆大悲願力に住して廣く有情を利す。若は見、若は聞、悉く三昧を證して、功德智慧頓集成就す。此れは自性身自受用身の說法及び得益を説く。

(六) 三身說法の差別、變化身は三乘を説き、他受用身は一乘を説き、自受用身は密乘を説く差別なり  
(七) 楞伽の三身說法は内證を説き、應化身は外證を説き、相説なりと談ずる説者、薄伽梵能破者、譯す佛身也。

一切如來に獻じて、便ち(一)加持の教勅を請す。毗盧遮那佛の言たまはく、汝等將來に無量の世界に於て、最上乘者の爲めに、現生に(二)世出間の悉地成熟を得せしむべしと。彼の諸の菩薩は如來の勅を受け已りて、佛足を頂禮し、毗盧遮那佛を圍繞し已りて、各の本方本位に還りて、(三)五輪と成爲て(四)本標幟を持せり。若は見、若は聞、若は輪壇に入りぬれば、能く有情の五趣輪轉の生死の業障を斷じ、五解脱輪の中に於て一佛より一佛に至るまで供承事して、皆無上菩提を獲得して、決定の性を成せしむ、猶し金剛の沮壞すべからざるが如し。此れ即ち毗盧遮那聖衆の集會なり、便ち現證窳都婆塔となる、一一の菩薩、一一の金剛、各の(五)本三昧に住して自解脱に住す、皆大悲願力に住して廣く有情を利す。若は見、若は聞、悉く三昧を證して、功德智慧頓集成就す。此れは自性身自受用身の說法及び得益を説く。

諭して曰く。此の經に明かに(六)三身說法の差別淺深、成佛の遲速勝劣を説けり、彼の(七)楞伽の三身說法の相と義合へり。顯學の智人は皆法身は說法せずと導ふ、此の義然らず。顯密二教の差別は是の如し、審かに察せよ。

金剛頂一切瑜祇經に云く。一時、(八)薄伽梵金剛界遍照如來(此れは總句を以て諸尊の總を歎す)五智所成の四

(一) 大圓鏡智、水の澄寂にして一切の相顯現するが如きを云ふ  
(二) 平等性智、一切の萬像其の如く顯現して無高下に於て平等なるが如きを云ふ  
(三) 妙觀察智、水中一切の色相差別顯現するが如きを云ふ  
(四) 成所作智、一切の情非情類水に依りて滋長するが如きを云ふ  
(五) 法界體性智、其水遍せざると云ふなきが如きを云ふ  
(六) 不壞金剛之れ身密  
(七) 光明心 意密  
(八) 中 語密

(九) 十六大菩薩、慈願愛慢の四菩薩より各々四菩薩と出して十六菩薩となる  
(一〇) 四攝行の天女使、鉤索、鈴、の四菩薩を云ふ  
(一一) 金剛内外云

種法身を以て、(一)謂く五智とは、一には(二)大圓鏡智、二には(三)平等性智、三には(四)妙觀察智、四には(五)成此の四種身に、四種法身とは、一には自性身、二には受用身、三には變化身、四には等流身なり、本有金剛界は性德法界體性智を明す、自在大三昧耶(此れは即ち妙觀察智、自覺本初智、平等性、大菩提心普賢滿月智、不壞金剛光明心殿の中に於て、謂く(六)不壞金剛とは、總じて諸尊の常住の身を歎す光明心とは心の覺德を歎す、はこれ三密なり、彼の五邊百非を離れて、獨り非の中に住す、等覺十地も見聞すること能はず、所謂る法身自證の境界なり、また是れ成所作智なり、三密の業用みな此れより生ず、已上の五句は總じて住處を明す、住處の名は則ち五佛の秘號妙德なり、密意知るべし)自性所成の眷屬金剛手等の(九)十六大菩薩、及び(一〇)四攝行の天女使(一一)金剛内外八供養の金剛天女使と與なりき。各各に本誓加持を以て、自ら金剛月輪に住し、本三摩地標幟を持せり、みな以て微細法身秘密心地の十地を超過せる身語心の金剛なり、此れは三十七の根本自性法身の内眷屬智を明す、各の五智の光明峯杵に於て、五億俱胝の微細の金剛を出現して、虚空法界に遍滿せり。(一二)諸地の菩薩も能く見ることあることなし、俱に覺知せず、熾然の光明自在の威力あり、此れは三十七尊の根本の五智に各々恒沙の性德を具すること、明に是の如くの諸常に(一三)三世に於て不壞の化身にして、有情を利樂して時として暫くも息む事なし。謂く三世とは三密なり、(一四)不壞とは金剛を表す、化とは業用なり、言く常に金剛阿闍佛の印、光明遍照と寶光佛の印、清淨不壞と清淨法界種種の業用と羯磨智身の印、方便加持方便受用とを以て







畜生道にては畜生  
界にては草木とな  
りて現れる法身な  
り。  
 (一) 釋迦の三身と  
無色無形の法身と  
之れに人格を附し  
たる報身と印度出  
現の釋迦となり。  
 (二) 天帝釋須彌  
山頂に住する帝釋  
天なり。

(三) 種々の身。他  
受用等の身なり。  
 (四) 法性身。自性  
身若しくは自受用  
身を云ふなり。  
 (五) 生身。變化身  
若しくは等流身を  
云ふなり。  
 (六) また云く。智  
度論の第九の文な  
り。

(一) また云く。智  
度論第十の文なり。  
 (二) 密迹金剛經  
大寶積經第十の文  
なり。

(三) 彼の尊。釋尊  
のことなり。  
 (四) 小教。四阿含  
等の小乘教なり。  
 (五) 外人の說。佛  
教以外の教なり。  
 (六) 華嚴等の教。華  
嚴等の一乘の教  
なり。  
 (七) 三即ち聲聞  
緣覺。菩薩の三乘  
なり。  
 (八) 總持。眞言門  
は一切の總持なる  
が故にかく云ふな  
り。

ることを得せしむ。また今者の釋迦牟尼世尊の無盡の虚空界に流遍して、諸の刹土に於て、佛事を動作するが如し。  
此の文は、大日尊の三身、諸の世界に遍じて佛事を作すこと、また釋迦の三身の如くなることを明す。  
 (一) 釋迦の三身、大日の三身各不同なり當きに之れを知るべし。

守護國界陀羅尼經の第九に云く。佛、秘密主に告げて言く、善男子、此の陀羅尼とは、毗盧遮那世尊、色究竟天にして、天帝釋及び諸の天衆のために、已に廣く宣説したまへり。我れ今この菩提樹下金剛道場に於て、諸の國王及及び汝等がために、略して此の陀羅尼門を説くと。智度論の第九に云く。佛に二種の身あり、一には法性身、二には父母生身なり。此の法性身は十方虚空に満ちて無量無邊なり、色像端政にして相好莊嚴せり、無量の光明、無量の音聲あり、聽法の衆もまた虚空に満てり。  
此れは衆も性身なり、生死の人の所見にあらざることを明す。  
 常に種種の身、種種の名號を出し、種種の生處にして、種種の方便をもて衆生を度す。常に一切を度して、須臾も息む時なし。是の如きは、法性身の佛なり、能く十方の衆生を度し諸の罪報を受くるものは是れ生身の佛なり。  
 (三) 生身の佛は次第に説法すること人の法の如し。  
 (四) また云く。法身の佛は常に光明を放ちて常に説法す。而るを罪を以ての故に見ず聞かざること、譬へば日 излеとも盲者は

見ず、雷霆地を振へども聾者は聞かざるが如し。是の如くの法身は、常に光明を放ちて常に説法したまへども、衆生無量劫の罪垢厚重なることありて見ず聞かざること、明鏡淨水の面を照すときは則ち見、垢翳不淨なるときは則ち所見なきが如し、是の如く衆生の心清淨なるときは則ち佛を見、若し心不淨なるときは則ち佛を見ず。  
 (一) また云く。  
 (二) 密迹金剛經の中に説くが如し、佛に三身あり、身密語密意密なり。一切の諸の天人は皆解らず、知らず。  
上來の經論等の文は、並びに是れ顯密の差別法身説法の證なり披き鑑む智者は詳にして迷を解け。  
 問ふ、若し所談の如くならば、法身内證智の境を説きたまふを名けて秘密といひ、自外をば顯といふ。何が故にか釋尊所説の經等に秘密藏の名あるや。また彼の尊の所説の陀羅尼門をば、何れの藏にか攝するや。答ふ、顯密の義は重重無數なり、若し淺を以て深に望むれば、深は則ち秘密、淺略は則ち顯なり。所以に外道の經書にもまた秘密藏の名あり、如來の所説の中にも顯密重重なり。若し佛、小教を説きたまふを以て、外人の說に望むれば即ち深密の名あり。大を以て小に比すればまた顯密あり、一乘は三を簡ふを以て秘密の名を立つ、總持は多名に擇むで密の號を得、法身の説は深奥なり、應化の教は淺略なり、所以に秘と名く。所謂る秘密に且だ二義あり、一には衆生秘密、二には如來秘



密なり。衆生は無明妄想を以て、本性の眞覺を覆藏するが故に、衆生自秘といふ。應化の説法は機に逗つて樂を施す、言は虚しからざるが故に。所以に他受用身は内證を秘して、其の境を説きたまはず、則ち等覺も希夷し十地も離絶せり、是れを如來秘密と名く。是の如く秘の名は重重無數なり。今秘密と謂ふは、究竟最極法身の自境を以て秘藏となす。また應化所説の陀羅尼門は、是れ同く秘藏と名くと雖も、然れども法身の説に比すれば權にして實にあらず、秘に權實あり應に隨ひて攝すべしまくのみ。

國譯辯顯密二教論卷下終

國譯般若心經秘鍵

序を并せたり

遍照金剛の撰

(一) 文殊の (二) 利劔は諸戲を絶つ 覺母の (三) 梵文は調御の師なり

(四) 眞言を種子となす 諸教を含藏せる (五) 陀羅尼なり

無邊の生死をば何んか能く斷つ 唯 (六) 禪那と (七) 正思惟とのみありてす

(八) 尊者の三摩は仁に譲らず 我れ今讚述す哀悲を垂れたまへ

夫れ佛法は遙かなるにあらず心中にして即ち近し、(九) 眞如は外にあらず身を棄てて何くんか求めん。迷悟は我れに在れば則ち發心すれば即ち到る、明暗は他にあざれば則ち信修すれば忽に證す。

哀れなるかな哀れなるかな長眠の子、苦しいかな痛いかな狂醉の人、痛狂は醉はざるを笑ひ、酷睡は覺者を嘲ける、曾て醫王の藥を訪らはずんば、何れの時にか大日の光りを見ん。翳障の輕重、覺悟の遲速の若きに至りては、機根不同にして性欲も即ち異なり。遂使て(一〇) 二教は轍を殊んじて、手を金蓮の場に分ち、五乘 鑣を並べて蹄を幻影

(一) 文殊 妙吉祥  
(二) 利劔 雲名なり  
(三) 梵文 絶つ  
(四) 眞言 種子なり  
(五) 陀羅尼 總持  
(六) 禪那 靜慮  
(七) 正思惟 觀  
(八) 尊者 佛  
(九) 眞如 眞實  
(一〇) 二教 胎藏界の法なり















(一)七つ 前の六  
 (二)後の一は是れ真  
 (三)言行人也。因に二  
 (四)果に二因行證入也  
 (五)三本質と活用名  
 (六)四種大明無上  
 (七)大神大明無上  
 (八)無等なり  
 (九)呪の文。二は是大明  
 (十)呪の文。三はは無上  
 (十一)呪の文。四はは無等  
 (十二)等呪の文。三師歸一  
 (十三)の三隅を以て所示  
 (十四)の一隅に歸一せよ  
 (十五)の意なり  
 (十六)は能く一字に無量  
 (十七)の教を總じ一法に  
 (十八)一切法を總じ一法に  
 (十九)忍呪と云ふ。故  
 (二十)に總持と云ふ。故  
 (二十一)術を云ふ。神驗奇  
 (二十二)の聲字。地水火  
 (二十三)音響の四大相觸れて  
 (二十四)を聲と云ひ、聲發  
 (二十五)して虚しからず、聲發  
 (二十六)す物の名を表すを必  
 (二十七)字と云ふ。

行、無碍離障は即ち入涅槃、能證の覺智は即ち證果なり、文の如く思知せよ。頌に曰く、

行人の數は是れ七つ (一)重二は彼れの法なり

圓寂と菩提と 正依は何事か乏しからん。

第四の總歸持明分にまた三つあり(一)名・體・用なり、(二)四種の呪明は名を擧げ、眞實不虛は體を指し、能除諸苦は用を顯す。名を擧ぐる中に、初めの大神呪は聲聞の眞言(三)二は緣覺の眞言、(四)三は大乗の眞言、(五)四は秘藏の眞言なり、若し通の義を以ば、一一の眞言にみな四名を具す、略して一隅を示す、圓智の人は三即歸一せよ。頌に曰く、

(一)總持に文義あり (二)忍呪は悉く持明なり

(三)聲字と人法と 實相とに此の名を具す

第五の秘藏眞言分に五つあり。初めの揭諦(梵字)は聲聞の行果を顯し、二の揭諦(梵字)は緣覺の行果を擧げ、三の波羅揭諦(梵字)は諸大乘最勝の行果を指し、四の波羅揭諦(梵字)は眞言曼荼羅具足輪圓の行果を明し、五の菩提沙婆呵(梵字)は上みの諸乘究竟

(一)眞言 眞に  
 (二)虚ならず秘密の  
 (三)法門を云ふ  
 (四)心無明淨菩提  
 (五)法如所煩惱  
 (六)身如理を云ふ  
 (七)圓寂を云ふ  
 (八)客舍の如し三  
 (九)客舍の如し三  
 (十)客舍の如し三  
 (十一)客舍の如し三  
 (十二)客舍の如し三  
 (十三)客舍の如し三  
 (十四)客舍の如し三  
 (十五)客舍の如し三  
 (十六)客舍の如し三  
 (十七)客舍の如し三  
 (十八)客舍の如し三  
 (十九)客舍の如し三  
 (二十)客舍の如し三  
 (二十一)客舍の如し三  
 (二十二)客舍の如し三  
 (二十三)客舍の如し三  
 (二十四)客舍の如し三  
 (二十五)客舍の如し三  
 (二十六)客舍の如し三  
 (二十七)客舍の如し三  
 (二十八)客舍の如し三  
 (二十九)客舍の如し三  
 (三十)客舍の如し三  
 (三十一)客舍の如し三  
 (三十二)客舍の如し三  
 (三十三)客舍の如し三  
 (三十四)客舍の如し三  
 (三十五)客舍の如し三  
 (三十六)客舍の如し三  
 (三十七)客舍の如し三  
 (三十八)客舍の如し三  
 (三十九)客舍の如し三  
 (四十)客舍の如し三  
 (四十一)客舍の如し三  
 (四十二)客舍の如し三  
 (四十三)客舍の如し三  
 (四十四)客舍の如し三  
 (四十五)客舍の如し三  
 (四十六)客舍の如し三  
 (四十七)客舍の如し三  
 (四十八)客舍の如し三  
 (四十九)客舍の如し三  
 (五十)客舍の如し三  
 (五十一)客舍の如し三  
 (五十二)客舍の如し三  
 (五十三)客舍の如し三  
 (五十四)客舍の如し三  
 (五十五)客舍の如し三  
 (五十六)客舍の如し三  
 (五十七)客舍の如し三  
 (五十八)客舍の如し三  
 (五十九)客舍の如し三  
 (六十)客舍の如し三  
 (六十一)客舍の如し三  
 (六十二)客舍の如し三  
 (六十三)客舍の如し三  
 (六十四)客舍の如し三  
 (六十五)客舍の如し三  
 (六十六)客舍の如し三  
 (六十七)客舍の如し三  
 (六十八)客舍の如し三  
 (六十九)客舍の如し三  
 (七十)客舍の如し三  
 (七十一)客舍の如し三  
 (七十二)客舍の如し三  
 (七十三)客舍の如し三  
 (七十四)客舍の如し三  
 (七十五)客舍の如し三  
 (七十六)客舍の如し三  
 (七十七)客舍の如し三  
 (七十八)客舍の如し三  
 (七十九)客舍の如し三  
 (八十)客舍の如し三  
 (八十一)客舍の如し三  
 (八十二)客舍の如し三  
 (八十三)客舍の如し三  
 (八十四)客舍の如し三  
 (八十五)客舍の如し三  
 (八十六)客舍の如し三  
 (八十七)客舍の如し三  
 (八十八)客舍の如し三  
 (八十九)客舍の如し三  
 (九十)客舍の如し三  
 (九十一)客舍の如し三  
 (九十二)客舍の如し三  
 (九十三)客舍の如し三  
 (九十四)客舍の如し三  
 (九十五)客舍の如し三  
 (九十六)客舍の如し三  
 (九十七)客舍の如し三  
 (九十八)客舍の如し三  
 (九十九)客舍の如し三  
 (一百)客舍の如し三

菩提證入の義を説く、句義是の如し。若し字相・義等に約して之れを釋せば、無量の人法等の義あり、劫を歴ても盡しがたし。若し要聞の者は法に依りて更に問へ。頌に曰く、

(一)眞言は不思議なり 觀誦すれば(二)無明を除く

一字に千理を含み 即身に(三)法如を證す

行行として(四)圓寂に至り 去々として(五)原初に入る

三界は客舍の如し (六)一心は是れ本居なり

問ふ、陀羅尼は是れ如來の秘密語なり。所以に(七)古への三藏、(八)諸の疏家は、みな口を閉ぢ筆を絶つ。今この釋を作る、深く聖旨に背けり。如來の説法に二種あり、一には顯、二には秘、顯機のためには(九)多名句を説き、秘根のためには(十)總持の字を説く。是の故に如來は自ら(十一)咒字(十二)三字等の種種の義を説きたまへり。是れ即ち秘機のため此の説を作す、龍猛、(十三)無畏、(十四)廣智等もまた其の義を説きたまふ、能不の間、教機にありまくのみ。之れを説き之れを默する、並びに佛意に契へり。

問ふ、顯密二教は其の旨天かに懸かなり、今この顯經の中に秘義を説くは不可なり。醫王の目には途に觸れて皆樂なり、解寶の人は鑽石を寶と見る、知ると知らざると何誰



(一) 金剛頂 金剛  
 (二) 頂修 般若儀軌  
 (三) 應化 說法の  
 ため 機根に 應じて  
 化身せる 佛陀  
 (四) 聲字は 云云  
 能詮の 聲字は 顯密  
 の 區別ある に あら  
 ず  
 (五) 無終 無始 窮  
 盡する 所の 終りな  
 く 發起の 始なき  
 を 云ふ  
 (六) 翳眼の 衆生  
 煩悩の 雲深く 覆へ  
 る 凡夫なり  
 (七) 曼儁般若 文  
 殊の 智慧と 般若の  
 空觀を 云ふ  
 (八) 甘露 煩悩なり  
 若の 法門を 指す

か罪過ぞ、また此の尊の眞言儀軌觀法は、佛(一)金剛頂の中に説きたまへり、此れ秘が中の極秘なり。(二)應化の釋迦は給孤園に在して、菩薩天人のために畫像壇法眞言手印等を説きたまふ、また是れ秘密なり、陀羅尼集經の第三の卷これなり。顯密は人になり、(三)聲字は即ち非なり。然れどもなほ顯が中の秘、秘が中の極秘なり、淺深重なりまくのみ。

我れ秘密眞言の義に依りて 略して心經五分の文を讚す

一字一文法界に遍し (四) 無終無始にして我が心分なり

(五) 翳眼の衆生は盲て見ず (六) 曼儁般若は能く(七)紛を解く

斯の(八)甘露を灑いで迷者を霑す 同じく無明を斷じて魔軍を破せん

國譯般若心經秘鍵 終

時に弘仁九年の春、天下大疫す。爰に帝王自ら黄金を筆端に染め、紺紙を爪掌に握りて、般若心經一卷を書寫し奉りたまふ。予講讀の撰に範りて、經旨の宗を綴

る。未だ結願の詞を吐かざるに、蘇生の族は途に于む。夜は變じて日光赫々たり、是れ愚身が戒徳にあらず、金輪の御信力の所爲なり。但し神舎に詣せん輩は、此の秘鍵を誦し奉るべし。昔し予、鷲峰說法の庭に陪りて、親り是の深文を聞き、豈に其の義に達せざらんやまくのみ。

入唐沙門空海上表す



(一)龍猛菩薩  
 言付法第三の祖  
 法第六の祖  
 軌範師と譯す  
 道とは外道二乘  
 の佛道以外論勝論等  
 二乘とは聲聞緣覺  
 等の小乘教  
 (二)阿耨多羅三藐  
 三菩提無上正等  
 正覺と譯す  
 (三)魔宮震動發  
 菩提心の爲めに  
 震動す怖畏して  
 (四)瑜伽相應  
 譯す今は兩部受茶  
 羅中の諸尊を稱す  
 (五)發菩提心  
 提心に二種あり  
 心王に二種あり  
 成ぜん願樂する  
 今諸尊の菩提心  
 大毗盧遮那佛  
 身數の願樂する故に心

# 國譯金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐 三菩提心論

亦是瑜伽惣持教門に菩提心の  
觀行修持を説く義と名く。

(一)龍猛菩薩の造

大興善寺の三藏沙門大廣智(二)不空 詔を奉けて譯す

(三)大阿闍梨の云たまはく。若し上根上智の人ありて、(四)外道二乘の法を樂はず、大度  
 量ありて、勇銳にして惑なからん者は、宜しく佛乘を修すべし。當に是の如くの心を  
 發すべし、我れ今、(五)阿耨多羅三藐三菩提を志求して餘果を求めず、誓心決定するが  
 故に、(六)魔宮震動し十方の諸佛皆悉く證知したまふ。常に人天に在りて勝快樂を受く、  
 所生の處に憶持して忘れず。若し(七)瑜伽の中の諸菩薩の身を成せんと願ふ者を、亦た  
 (八)發菩提心と名く。何とならば、次いでたる諸尊は皆(九)大毗盧遮那佛身に同なればな  
 り。人の名官を貪する者は、名官を求むる心を發して、名官を理むる行を修す。若し  
 財寶を貪する者は、財寶を求むる心を發して、財物を經營する行をなすが如し。凡そ



(一) 勝義 捨劣得勝の智慧  
 (二) 行願 慈悲の意  
 (三) 三摩地 定を譯す  
 (四) 含識 非常に對して有情ないふ  
 (五) 華嚴經に云く舊華嚴經卅六新華嚴經五十一  
 (六) 眞如智慧 衆生の心中に理行の佛性あり眞如は行佛性、智慧は行佛性を斷する時始めて斷するに始り  
 (七) 一功智 煩惱を斷するに始り  
 (八) 自然智 衆生の本來所具する自然なる故に本覺智なり  
 (九) 無礙智 本始の二覺一味不二一體なるを無礙智と云ふ

人の、善と惡とをなさんと欲するには、先づその心を標して而る後にその志を成す、この所以に菩提を求むる者は、菩提心を發して菩提の行を修す。既に是の如きの心を發し已はんぬれば、須らく菩提心の行相を知るべし。其の行相とは三門を以て分別す。諸佛菩薩、昔し因地に在して、是の心を發し已りて、(一)勝義、(二)行願、(三)三摩地を戒となす、乃し成佛に至るまで時として暫くも忘るゝことなし。惟し眞言法の中にのみ即身成佛するが故に、是れ三摩地の法を説く、諸教の中に於ては闕して書せず。一には行願、二には勝義、三には三摩地なり。

初めに行願とは、爲はく修習の人、常に是の如きの心を懷くべし。我れ當さに無餘の有情界を利益し安樂すべし、十方の(四)含識を觀すること猶し己身の如し。言ふ所の利益とは、いはく一切有情を勸發して、悉く菩提に安住せしめ、終に二乗の法を以て得度せしめず。今眞言行人應さに知るべし、一切有情は皆如來藏の性を含して、皆無上菩提に安住するに堪任せり。是の故に二乗の法を以て得度せしめず。故に(五)華嚴經に云く、一衆生として(六)眞如智慧を具足せずと云ふことなし。但し妄想顛倒の執著を以て證得せず、若し妄想を離れぬれば、(七)一切智、(八)自然智、(九)無礙智則ち現前することを得

(一) 自性 不改の本性  
 (二) 三毒 貪・瞋・癡  
 (三) 五欲 色・聲・香・味・觸  
 (四) 四諦 苦・集・滅・道  
 (五) 苦集 苦の因  
 (六) 道 滅の因  
 (七) 無漏法 有爲法に對して無漏なる法  
 (八) 有爲法 有爲の法  
 (九) 縁起 縁起の法  
 (十) 常任法 常任の法  
 (十一) 煩惱 煩惱の法  
 (十二) 迷悟 迷悟の法  
 (十三) 因縁 因縁の法  
 (十四) 生死 生死の理  
 (十五) 陰陽 陰陽の理  
 (十六) 水火風 水火風の理  
 (十七) 行識 行識の五蘊  
 (十八) 受想 受想の行識  
 (十九) 大受 大受の行識  
 (二十) 色受 色受の行識  
 (二十一) 明行 明行の行識  
 (二十二) 受取 受取の行識  
 (二十三) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (二十四) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (二十五) 四大五陰 四大五陰の理  
 (二十六) 大受 大受の行識  
 (二十七) 色受 色受の行識  
 (二十八) 明行 明行の行識  
 (二十九) 受取 受取の行識  
 (三十) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (三十一) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (三十二) 四大五陰 四大五陰の理  
 (三十三) 大受 大受の行識  
 (三十四) 色受 色受の行識  
 (三十五) 明行 明行の行識  
 (三十六) 受取 受取の行識  
 (三十七) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (三十八) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (三十九) 四大五陰 四大五陰の理  
 (四十) 大受 大受の行識  
 (四十一) 色受 色受の行識  
 (四十二) 明行 明行の行識  
 (四十三) 受取 受取の行識  
 (四十四) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (四十五) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (四十六) 四大五陰 四大五陰の理  
 (四十七) 大受 大受の行識  
 (四十八) 色受 色受の行識  
 (四十九) 明行 明行の行識  
 (五十) 受取 受取の行識  
 (五十一) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (五十二) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (五十三) 四大五陰 四大五陰の理  
 (五十四) 大受 大受の行識  
 (五十五) 色受 色受の行識  
 (五十六) 明行 明行の行識  
 (五十七) 受取 受取の行識  
 (五十八) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (五十九) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (六十) 四大五陰 四大五陰の理  
 (六十一) 大受 大受の行識  
 (六十二) 色受 色受の行識  
 (六十三) 明行 明行の行識  
 (六十四) 受取 受取の行識  
 (六十五) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (六十六) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (六十七) 四大五陰 四大五陰の理  
 (六十八) 大受 大受の行識  
 (六十九) 色受 色受の行識  
 (七十) 明行 明行の行識  
 (七十一) 受取 受取の行識  
 (七十二) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (七十三) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (七十四) 四大五陰 四大五陰の理  
 (七十五) 大受 大受の行識  
 (七十六) 色受 色受の行識  
 (七十七) 明行 明行の行識  
 (七十八) 受取 受取の行識  
 (七十九) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (八十) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (八十一) 四大五陰 四大五陰の理  
 (八十二) 大受 大受の行識  
 (八十三) 色受 色受の行識  
 (八十四) 明行 明行の行識  
 (八十五) 受取 受取の行識  
 (八十六) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (八十七) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (八十八) 四大五陰 四大五陰の理  
 (八十九) 大受 大受の行識  
 (九十) 色受 色受の行識  
 (九十一) 明行 明行の行識  
 (九十二) 受取 受取の行識  
 (九十三) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (九十四) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (九十五) 四大五陰 四大五陰の理  
 (九十六) 大受 大受の行識  
 (九十七) 色受 色受の行識  
 (九十八) 明行 明行の行識  
 (九十九) 受取 受取の行識  
 (一百) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (一百一) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (一百二) 四大五陰 四大五陰の理  
 (一百三) 大受 大受の行識  
 (一百四) 色受 色受の行識  
 (一百五) 明行 明行の行識  
 (一百六) 受取 受取の行識  
 (一百七) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (一百八) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (一百九) 四大五陰 四大五陰の理  
 (二百) 大受 大受の行識  
 (二百一) 色受 色受の行識  
 (二百二) 明行 明行の行識  
 (二百三) 受取 受取の行識  
 (二百四) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (二百五) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (二百六) 四大五陰 四大五陰の理  
 (二百七) 大受 大受の行識  
 (二百八) 色受 色受の行識  
 (二百九) 明行 明行の行識  
 (三百) 受取 受取の行識  
 (三百一) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (三百二) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (三百三) 四大五陰 四大五陰の理  
 (三百四) 大受 大受の行識  
 (三百五) 色受 色受の行識  
 (三百六) 明行 明行の行識  
 (三百七) 受取 受取の行識  
 (三百八) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (三百九) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (四百) 四大五陰 四大五陰の理  
 (四百一) 大受 大受の行識  
 (四百二) 色受 色受の行識  
 (四百三) 明行 明行の行識  
 (四百四) 受取 受取の行識  
 (四百五) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (四百六) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (四百七) 四大五陰 四大五陰の理  
 (四百八) 大受 大受の行識  
 (四百九) 色受 色受の行識  
 (五百) 明行 明行の行識  
 (五百一) 受取 受取の行識  
 (五百二) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (五百三) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (五百四) 四大五陰 四大五陰の理  
 (五百五) 大受 大受の行識  
 (五百六) 色受 色受の行識  
 (五百七) 明行 明行の行識  
 (五百八) 受取 受取の行識  
 (五百九) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (六百) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (六百一) 四大五陰 四大五陰の理  
 (六百二) 大受 大受の行識  
 (六百三) 色受 色受の行識  
 (六百四) 明行 明行の行識  
 (六百五) 受取 受取の行識  
 (六百六) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (六百七) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (六百八) 四大五陰 四大五陰の理  
 (六百九) 大受 大受の行識  
 (七百) 色受 色受の行識  
 (七百一) 明行 明行の行識  
 (七百二) 受取 受取の行識  
 (七百三) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (七百四) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (七百五) 四大五陰 四大五陰の理  
 (七百六) 大受 大受の行識  
 (七百七) 色受 色受の行識  
 (七百八) 明行 明行の行識  
 (七百九) 受取 受取の行識  
 (八百) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (八百一) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (八百二) 四大五陰 四大五陰の理  
 (八百三) 大受 大受の行識  
 (八百四) 色受 色受の行識  
 (八百五) 明行 明行の行識  
 (八百六) 受取 受取の行識  
 (八百七) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (八百八) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (八百九) 四大五陰 四大五陰の理  
 (九百) 大受 大受の行識  
 (九百一) 色受 色受の行識  
 (九百二) 明行 明行の行識  
 (九百三) 受取 受取の行識  
 (九百四) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (九百五) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (九百六) 四大五陰 四大五陰の理  
 (九百七) 大受 大受の行識  
 (九百八) 色受 色受の行識  
 (九百九) 明行 明行の行識  
 (一千) 受取 受取の行識  
 (一千一) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (一千二) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (一千三) 四大五陰 四大五陰の理  
 (一千四) 大受 大受の行識  
 (一千五) 色受 色受の行識  
 (一千六) 明行 明行の行識  
 (一千七) 受取 受取の行識  
 (一千八) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (一千九) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (二千) 四大五陰 四大五陰の理  
 (二千一) 大受 大受の行識  
 (二千二) 色受 色受の行識  
 (二千三) 明行 明行の行識  
 (二千四) 受取 受取の行識  
 (二千五) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (二千六) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (二千七) 四大五陰 四大五陰の理  
 (二千八) 大受 大受の行識  
 (二千九) 色受 色受の行識  
 (二千一十) 明行 明行の行識  
 (二千一十一) 受取 受取の行識  
 (二千一十二) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (二千一十三) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (二千一十四) 四大五陰 四大五陰の理  
 (二千一十五) 大受 大受の行識  
 (二千一十六) 色受 色受の行識  
 (二千一十七) 明行 明行の行識  
 (二千一十八) 受取 受取の行識  
 (二千一十九) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (二千二十) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (二千二十一) 四大五陰 四大五陰の理  
 (二千二十二) 大受 大受の行識  
 (二千二十三) 色受 色受の行識  
 (二千二十四) 明行 明行の行識  
 (二千二十五) 受取 受取の行識  
 (二千二十六) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (二千二十七) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (二千二十八) 四大五陰 四大五陰の理  
 (二千二十九) 大受 大受の行識  
 (二千三十) 色受 色受の行識  
 (二千三十一) 明行 明行の行識  
 (二千三十二) 受取 受取の行識  
 (二千三十三) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (二千三十四) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (二千三十五) 四大五陰 四大五陰の理  
 (二千三十六) 大受 大受の行識  
 (二千三十七) 色受 色受の行識  
 (二千三十八) 明行 明行の行識  
 (二千三十九) 受取 受取の行識  
 (二千四十) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (二千四十一) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (二千四十二) 四大五陰 四大五陰の理  
 (二千四十三) 大受 大受の行識  
 (二千四十四) 色受 色受の行識  
 (二千四十五) 明行 明行の行識  
 (二千四十六) 受取 受取の行識  
 (二千四十七) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (二千四十八) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (二千四十九) 四大五陰 四大五陰の理  
 (二千五十) 大受 大受の行識  
 (二千五十一) 色受 色受の行識  
 (二千五十二) 明行 明行の行識  
 (二千五十三) 受取 受取の行識  
 (二千五十四) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (二千五十五) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (二千五十六) 四大五陰 四大五陰の理  
 (二千五十七) 大受 大受の行識  
 (二千五十八) 色受 色受の行識  
 (二千五十九) 明行 明行の行識  
 (二千六十) 受取 受取の行識  
 (二千六十一) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (二千六十二) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (二千六十三) 四大五陰 四大五陰の理  
 (二千六十四) 大受 大受の行識  
 (二千六十五) 色受 色受の行識  
 (二千六十六) 明行 明行の行識  
 (二千六十七) 受取 受取の行識  
 (二千六十八) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (二千六十九) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (二千七十) 四大五陰 四大五陰の理  
 (二千七十一) 大受 大受の行識  
 (二千七十二) 色受 色受の行識  
 (二千七十三) 明行 明行の行識  
 (二千七十四) 受取 受取の行識  
 (二千七十五) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (二千七十六) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (二千七十七) 四大五陰 四大五陰の理  
 (二千七十八) 大受 大受の行識  
 (二千七十九) 色受 色受の行識  
 (二千八十) 明行 明行の行識  
 (二千八十一) 受取 受取の行識  
 (二千八十二) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (二千八十三) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (二千八十四) 四大五陰 四大五陰の理  
 (二千八十五) 大受 大受の行識  
 (二千八十六) 色受 色受の行識  
 (二千八十七) 明行 明行の行識  
 (二千八十八) 受取 受取の行識  
 (二千八十九) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (二千九十) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (二千九十一) 四大五陰 四大五陰の理  
 (二千九十二) 大受 大受の行識  
 (二千九十三) 色受 色受の行識  
 (二千九十四) 明行 明行の行識  
 (二千九十五) 受取 受取の行識  
 (二千九十六) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (二千九十七) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (二千九十八) 四大五陰 四大五陰の理  
 (二千九十九) 大受 大受の行識  
 (三千) 色受 色受の行識  
 (三千一) 明行 明行の行識  
 (三千二) 受取 受取の行識  
 (三千三) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (三千四) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (三千五) 四大五陰 四大五陰の理  
 (三千六) 大受 大受の行識  
 (三千七) 色受 色受の行識  
 (三千八) 明行 明行の行識  
 (三千九) 受取 受取の行識  
 (三千一十) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (三千一十一) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (三千一十二) 四大五陰 四大五陰の理  
 (三千一十三) 大受 大受の行識  
 (三千一十四) 色受 色受の行識  
 (三千一十五) 明行 明行の行識  
 (三千一十六) 受取 受取の行識  
 (三千一十七) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (三千一十八) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (三千一十九) 四大五陰 四大五陰の理  
 (三千二十) 大受 大受の行識  
 (三千二十一) 色受 色受の行識  
 (三千二十二) 明行 明行の行識  
 (三千二十三) 受取 受取の行識  
 (三千二十四) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (三千二十五) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (三千二十六) 四大五陰 四大五陰の理  
 (三千二十七) 大受 大受の行識  
 (三千二十八) 色受 色受の行識  
 (三千二十九) 明行 明行の行識  
 (三千三十) 受取 受取の行識  
 (三千三十一) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (三千三十二) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (三千三十三) 四大五陰 四大五陰の理  
 (三千三十四) 大受 大受の行識  
 (三千三十五) 色受 色受の行識  
 (三千三十六) 明行 明行の行識  
 (三千三十七) 受取 受取の行識  
 (三千三十八) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (三千三十九) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (三千四十) 四大五陰 四大五陰の理  
 (三千四十一) 大受 大受の行識  
 (三千四十二) 色受 色受の行識  
 (三千四十三) 明行 明行の行識  
 (三千四十四) 受取 受取の行識  
 (三千四十五) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (三千四十六) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (三千四十七) 四大五陰 四大五陰の理  
 (三千四十八) 大受 大受の行識  
 (三千四十九) 色受 色受の行識  
 (三千五十) 明行 明行の行識  
 (三千五十一) 受取 受取の行識  
 (三千五十二) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (三千五十三) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (三千五十四) 四大五陰 四大五陰の理  
 (三千五十五) 大受 大受の行識  
 (三千五十六) 色受 色受の行識  
 (三千五十七) 明行 明行の行識  
 (三千五十八) 受取 受取の行識  
 (三千五十九) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (三千六十) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (三千六十一) 四大五陰 四大五陰の理  
 (三千六十二) 大受 大受の行識  
 (三千六十三) 色受 色受の行識  
 (三千六十四) 明行 明行の行識  
 (三千六十五) 受取 受取の行識  
 (三千六十六) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (三千六十七) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (三千六十八) 四大五陰 四大五陰の理  
 (三千六十九) 大受 大受の行識  
 (三千七十) 色受 色受の行識  
 (三千七十一) 明行 明行の行識  
 (三千七十二) 受取 受取の行識  
 (三千七十三) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (三千七十四) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (三千七十五) 四大五陰 四大五陰の理  
 (三千七十六) 大受 大受の行識  
 (三千七十七) 色受 色受の行識  
 (三千七十八) 明行 明行の行識  
 (三千七十九) 受取 受取の行識  
 (三千八十) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (三千八十一) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (三千八十二) 四大五陰 四大五陰の理  
 (三千八十三) 大受 大受の行識  
 (三千八十四) 色受 色受の行識  
 (三千八十五) 明行 明行の行識  
 (三千八十六) 受取 受取の行識  
 (三千八十七) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (三千八十八) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (三千八十九) 四大五陰 四大五陰の理  
 (三千九十) 大受 大受の行識  
 (三千九十一) 色受 色受の行識  
 (三千九十二) 明行 明行の行識  
 (三千九十三) 受取 受取の行識  
 (三千九十四) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (三千九十五) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (三千九十六) 四大五陰 四大五陰の理  
 (三千九十七) 大受 大受の行識  
 (三千九十八) 色受 色受の行識  
 (三千九十九) 明行 明行の行識  
 (四千) 受取 受取の行識  
 (四千一) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (四千二) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (四千三) 四大五陰 四大五陰の理  
 (四千四) 大受 大受の行識  
 (四千五) 色受 色受の行識  
 (四千六) 明行 明行の行識  
 (四千七) 受取 受取の行識  
 (四千八) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (四千九) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (四千一十) 四大五陰 四大五陰の理  
 (四千一十一) 大受 大受の行識  
 (四千一十二) 色受 色受の行識  
 (四千一十三) 明行 明行の行識  
 (四千一十四) 受取 受取の行識  
 (四千一十五) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (四千一十六) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (四千一十七) 四大五陰 四大五陰の理  
 (四千一十八) 大受 大受の行識  
 (四千一十九) 色受 色受の行識  
 (四千二十) 明行 明行の行識  
 (四千二十一) 受取 受取の行識  
 (四千二十二) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (四千二十三) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (四千二十四) 四大五陰 四大五陰の理  
 (四千二十五) 大受 大受の行識  
 (四千二十六) 色受 色受の行識  
 (四千二十七) 明行 明行の行識  
 (四千二十八) 受取 受取の行識  
 (四千二十九) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (四千三十) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (四千三十一) 四大五陰 四大五陰の理  
 (四千三十二) 大受 大受の行識  
 (四千三十三) 色受 色受の行識  
 (四千三十四) 明行 明行の行識  
 (四千三十五) 受取 受取の行識  
 (四千三十六) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (四千三十七) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (四千三十八) 四大五陰 四大五陰の理  
 (四千三十九) 大受 大受の行識  
 (四千四十) 色受 色受の行識  
 (四千四十一) 明行 明行の行識  
 (四千四十二) 受取 受取の行識  
 (四千四十三) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (四千四十四) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (四千四十五) 四大五陰 四大五陰の理  
 (四千四十六) 大受 大受の行識  
 (四千四十七) 色受 色受の行識  
 (四千四十八) 明行 明行の行識  
 (四千四十九) 受取 受取の行識  
 (四千五十) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (四千五十一) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (四千五十二) 四大五陰 四大五陰の理  
 (四千五十三) 大受 大受の行識  
 (四千五十四) 色受 色受の行識  
 (四千五十五) 明行 明行の行識  
 (四千五十六) 受取 受取の行識  
 (四千五十七) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (四千五十八) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (四千五十九) 四大五陰 四大五陰の理  
 (四千六十) 大受 大受の行識  
 (四千六十一) 色受 色受の行識  
 (四千六十二) 明行 明行の行識  
 (四千六十三) 受取 受取の行識  
 (四千六十四) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (四千六十五) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (四千六十六) 四大五陰 四大五陰の理  
 (四千六十七) 大受 大受の行識  
 (四千六十八) 色受 色受の行識  
 (四千六十九) 明行 明行の行識  
 (四千七十) 受取 受取の行識  
 (四千七十一) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (四千七十二) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (四千七十三) 四大五陰 四大五陰の理  
 (四千七十四) 大受 大受の行識  
 (四千七十五) 色受 色受の行識  
 (四千七十六) 明行 明行の行識  
 (四千七十七) 受取 受取の行識  
 (四千七十八) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (四千七十九) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (四千八十) 四大五陰 四大五陰の理  
 (四千八十一) 大受 大受の行識  
 (四千八十二) 色受 色受の行識  
 (四千八十三) 明行 明行の行識  
 (四千八十四) 受取 受取の行識  
 (四千八十五) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (四千八十六) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (四千八十七) 四大五陰 四大五陰の理  
 (四千八十八) 大受 大受の行識  
 (四千八十九) 色受 色受の行識  
 (四千九十) 明行 明行の行識  
 (四千九十一) 受取 受取の行識  
 (四千九十二) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (四千九十三) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (四千九十四) 四大五陰 四大五陰の理  
 (四千九十五) 大受 大受の行識  
 (四千九十六) 色受 色受の行識  
 (四千九十七) 明行 明行の行識  
 (四千九十八) 受取 受取の行識  
 (四千九十九) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (五千) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (五千一) 四大五陰 四大五陰の理  
 (五千二) 大受 大受の行識  
 (五千三) 色受 色受の行識  
 (五千四) 明行 明行の行識  
 (五千五) 受取 受取の行識  
 (五千六) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (五千七) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (五千八) 四大五陰 四大五陰の理  
 (五千九) 大受 大受の行識  
 (五千一十) 色受 色受の行識  
 (五千一十一) 明行 明行の行識  
 (五千一十二) 受取 受取の行識  
 (五千一十三) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (五千一十四) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (五千一十五) 四大五陰 四大五陰の理  
 (五千一十六) 大受 大受の行識  
 (五千一十七) 色受 色受の行識  
 (五千一十八) 明行 明行の行識  
 (五千一十九) 受取 受取の行識  
 (五千二十) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (五千二十一) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (五千二十二) 四大五陰 四大五陰の理  
 (五千二十三) 大受 大受の行識  
 (五千二十四) 色受 色受の行識  
 (五千二十五) 明行 明行の行識  
 (五千二十六) 受取 受取の行識  
 (五千二十七) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (五千二十八) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (五千二十九) 四大五陰 四大五陰の理  
 (五千三十) 大受 大受の行識  
 (五千三十一) 色受 色受の行識  
 (五千三十二) 明行 明行の行識  
 (五千三十三) 受取 受取の行識  
 (五千三十四) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (五千三十五) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (五千三十六) 四大五陰 四大五陰の理  
 (五千三十七) 大受 大受の行識  
 (五千三十八) 色受 色受の行識  
 (五千三十九) 明行 明行の行識  
 (五千四十) 受取 受取の行識  
 (五千四十一) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (五千四十二) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (五千四十三) 四大五陰 四大五陰の理  
 (五千四十四) 大受 大受の行識  
 (五千四十五) 色受 色受の行識  
 (五千四十六) 明行 明行の行識  
 (五千四十七) 受取 受取の行識  
 (五千四十八) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (五千四十九) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (五千五十) 四大五陰 四大五陰の理  
 (五千五十一) 大受 大受の行識  
 (五千五十二) 色受 色受の行識  
 (五千五十三) 明行 明行の行識  
 (五千五十四) 受取 受取の行識  
 (五千五十五) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (五千五十六) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (五千五十七) 四大五陰 四大五陰の理  
 (五千五十八) 大受 大受の行識  
 (五千五十九) 色受 色受の行識  
 (五千六十) 明行 明行の行識  
 (五千六十一) 受取 受取の行識  
 (五千六十二) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (五千六十三) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (五千六十四) 四大五陰 四大五陰の理  
 (五千六十五) 大受 大受の行識  
 (五千六十六) 色受 色受の行識  
 (五千六十七) 明行 明行の行識  
 (五千六十八) 受取 受取の行識  
 (五千六十九) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (五千七十) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (五千七十一) 四大五陰 四大五陰の理  
 (五千七十二) 大受 大受の行識  
 (五千七十三) 色受 色受の行識  
 (五千七十四) 明行 明行の行識  
 (五千七十五) 受取 受取の行識  
 (五千七十六) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (五千七十七) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (五千七十八) 四大五陰 四大五陰の理  
 (五千七十九) 大受 大受の行識  
 (五千八十) 色受 色受の行識  
 (五千八十一) 明行 明行の行識  
 (五千八十二) 受取 受取の行識  
 (五千八十三) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (五千八十四) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (五千八十五) 四大五陰 四大五陰の理  
 (五千八十六) 大受 大受の行識  
 (五千八十七) 色受 色受の行識  
 (五千八十八) 明行 明行の行識  
 (五千八十九) 受取 受取の行識  
 (五千九十) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (五千九十一) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (五千九十二) 四大五陰 四大五陰の理  
 (五千九十三) 大受 大受の行識  
 (五千九十四) 色受 色受の行識  
 (五千九十五) 明行 明行の行識  
 (五千九十六) 受取 受取の行識  
 (五千九十七) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (五千九十八) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (五千九十九) 四大五陰 四大五陰の理  
 (六千) 大受 大受の行識  
 (六千一) 色受 色受の行識  
 (六千二) 明行 明行の行識  
 (六千三) 受取 受取の行識  
 (六千四) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (六千五) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (六千六) 四大五陰 四大五陰の理  
 (六千七) 大受 大受の行識  
 (六千八) 色受 色受の行識  
 (六千九) 明行 明行の行識  
 (六千一十) 受取 受取の行識  
 (六千一十一) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (六千一十二) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (六千一十三) 四大五陰 四大五陰の理  
 (六千一十四) 大受 大受の行識  
 (六千一十五) 色受 色受の行識  
 (六千一十六) 明行 明行の行識  
 (六千一十七) 受取 受取の行識  
 (六千一十八) 十二因縁 十二因縁の行識  
 (六千一十九) 即ち生死の理 即ち生死の理の行識  
 (六千二十) 四大五陰 四大五陰の理  
 (六千二十一) 大受 大受の行識















三密觀乃至五相成身。眞言宗に於ては五相成身の三密の觀を重用するが如きなり。次に五相成身を明すとすは、一には是れ通達心、二には是れ菩提心、三には是れ金剛心、四には是れ金剛身、五には是れ無上菩提を證して金剛堅固の身を獲るなり。然もこの五相を具さに備ふれば方に本尊の身となるなり。その圓明は即ち普賢の身なり、亦た是れ普賢の心なり、十方の諸佛と之れ同じ、亦た乃ち三世の修行、證に前後あれども、達悟に及び已んぬれば去來今なし。凡人の心は合蓮華の如く、佛心は満月の如し。この觀もし成じぬれば、十方國土の、若しは淨、若しは穢、六道の含識、三乘の行位、及び三世の國土の成壞、衆生の業の差別、菩薩の因地の行相、三世の諸佛悉く中に於て現じ、本尊の身を證して、普賢の一切の行願を満足す。故に大毗盧遮那經に云く、是の如くの眞實心は、故佛の宣説し給ふところなり。問ふ、前に二乘の人は法執あるが故に成佛することを得ずと言ふと。今また菩提心を修せしむる三摩地とは云何んが差別なる。答ふ、二乘の人は法執あるが故に、久久に理を證し、沉空滯寂して限るに劫數を以てし、しかして大心を發し、また散善門の中

普賢 卅七尊  
故佛 修生顯  
得の大日に對して  
三世常住本有の大  
日云ふ  
法體に  
實有の執著ある也  
三密五相等の秘觀  
三乘散善門の一乘  
は定中の説、三乘  
は然らずの故に今  
は他縁覺心の分齊  
を云ふ也

大日如來の四  
自性心(本地身)  
絕對能現(加持身)  
身相對能現(受用身)  
身相對所現(等流身)  
而皆同自性身な  
るが故に四種共に  
法身と稱す。經に  
同經悉地出現品の  
文。金剛頂經不  
空譯三卷教王經。不  
薩一釋迦如來菩薩  
薩三時如來名菩薩  
三摩地的菩提心を觀す  
行相即ち五相成身の  
なり。觀等を修する

が如きこれなり。二には語密とは、密に眞言を誦して、文句をして丁了分明ならしめ、  
謬誤なきが如し。三には意密とは、瑜伽に住して白淨月の圓滿に相應し、菩提心を觀  
するが如きなり。次に五相成身を明すとすは、一には是れ通達心、二には是れ菩提心、  
三には是れ金剛心、四には是れ金剛身、五には是れ無上菩提を證して金剛堅固の身を  
獲るなり。然もこの五相を具さに備ふれば方に本尊の身となるなり。その圓明は即ち普  
賢の身なり、亦た是れ普賢の心なり、十方の諸佛と之れ同じ、亦た乃ち三世の修行、  
證に前後あれども、達悟に及び已んぬれば去來今なし。凡人の心は合蓮華の如く、佛  
心は満月の如し。この觀もし成じぬれば、十方國土の、若しは淨、若しは穢、六道の  
含識、三乘の行位、及び三世の國土の成壞、衆生の業の差別、菩薩の因地の行相、三  
世の諸佛悉く中に於て現じ、本尊の身を證して、普賢の一切の行願を満足す。故に  
大毗盧遮那經に云く、是の如くの眞實心は、故佛の宣説し給ふところなり。問ふ、  
前に二乘の人は法執あるが故に成佛することを得ずと言ふと。今また菩提心を修せ  
しむる三摩地とは云何んが差別なる。答ふ、二乘の人は法執あるが故に、久久に理  
を證し、沉空滯寂して限るに劫數を以てし、しかして大心を發し、また散善門の中

に乗じて無劫數を經、是の故に厭離すべきに足れり依止すべからず。今眞言行人は、  
既に人法の上執を破して、能く正しく眞實を見るの智なりといへども、或は無始の  
間隔の爲めに、未だ如來の一切智智を證すること能はざるが故に、妙道を欲求して、  
次第を修持して凡より佛位に入るものなり。即ちこの三摩地は、能く諸佛の自性に達  
し、諸佛の法身を悟り、法界體性智を證して、大毗盧遮那佛の自性身、受用身、變  
化身、等流身を成ず。爲はく行人未だ證せざるが故に、理として宜しく之れを修す  
べし。故に大毗盧遮那經に云く、悉地は心より生ずと。金剛頂經に説くが如し、  
一切義成就菩薩、初めて金剛座に坐し、無上道を取證して、遂に諸佛のこの心地を  
授くることを蒙て、然して能く果を證すと。凡そ今の人、若し心決定して、教の如く  
修行すれば、座を起たすして三摩地現前し、こゝに本尊の身を成就すべし。故に大毗  
盧遮那經供養次第法に云く、若し勢力の、廣く増益することなくんば、法に住して  
但し菩提心を觀すべし、佛の中に滿行を具し、淨白純淨の法を満足すと説きた  
まふ。この菩提心は、能く一切諸佛の功德の法を包藏するが故に、若し修證し出現す  
れば即ち一切の導師となる。若し本に歸すれば則ち是れ密嚴國土なり、座を起たす



(三) 佛慧一切智  
智なり即ち如實知  
自心の理を欣求す  
る人を佛慧を求む  
る云ふ。  
(四) 父母所生の身  
現在の肉身。大日如  
來の位。

して、能く一切の佛事を成す。菩提心を讚して曰く。

若し人(三)佛慧を求めて 菩提心に通達すれば

(三) 父母所生の身に 速に(三)大覺の位を證す

金剛頂瑜伽中阿耨多羅三藐三菩提心を發するの論なり。

### 國譯金剛頂中發阿耨多羅三藐三菩提心論 終

(一) 縑細 書帙の  
いひ

(二) 牛頭 支那の  
炎帝神農氏は人身  
牛頭なり故に名く  
(三) 斷菑 支那の  
周公旦のこゝ  
(四) 空華 空中に  
花なきに在ると思  
ふこゝ  
(五) 龜毛 水龜に  
毛ありと見ること  
(六) 塵郷 所迷の  
六塵の境界のこと  
(七) 燒種 一闍提  
にして、含具衆惡  
又は無信と譯せり  
惡業なすこゝ佛  
種を燒する故なり

## 國譯秘藏寶鑰

### 卷の上

序を并せたり

#### 沙門遍照金剛の撰

悠悠たり悠悠たり太だ悠悠たり

内外の(一)縑細千萬の軸あり

杳杳たり杳杳たり甚だ杳杳たり

道を云ひ道を云ふに百種の道あり

書死へ諷死へなましかば本と何んか爲ん

知らじ知らじ吾も知らじ

思ひ思ひ思ひ思ふとも聖も心ることなけん

(二)牛頭草を嘗めて病者を悲み

(三)斷菑車を機つて迷方を惑れむ

三界の狂人は狂せることを知らず

四生の盲者は盲なることを識らず

生れ生れ生れ生れて生の始に暗く

死に死に死に死んで死の終に冥し。

(四)空華眼を眩かし(五)龜毛情を迷はして、實我に謬着し醉心封執す。渴鹿野馬(六)塵郷に

奔り、狂象跳猿識都に蕩かるが如くに至つては、遂使して十惡心に快うして日夜に作

り、六度耳に逆うて心に入れず。人を謗し法を謗して(七)燒種の辜を顧みず、酒に耽

國譯秘藏寶鑰卷の上



(一) 後身の報を覺らん。閻魔獄卒は獄を構へて罪を斷はり、餓鬼禽獸  
 (二) 業のため將來に於て受くる果報のこ  
 (三) 六行、苦難障  
 (四) 淨妙離なり。苦難障  
 (五) 唯種云々。聲  
 (六) 聞業の宗要を明す  
 (七) 空智種を抜く  
 (八) 辟支佛の智慧深利  
 (九) 種を抜くをいふ  
 (十) 無縁に悲を起  
 (十一) 第六仙縁大乘  
 (十二) 心を生ずる  
 (十三) 第七覺心不生  
 (十四) 心を生ずる  
 (十五) 第一道云々第八  
 (十六) 一道無爲心を明す  
 (十七) 九住心な明す。第  
 (十八) 極密因を明す。顯  
 (十九) 金剛薩埵の不動尊  
 (二十) 不動明王の利劍を  
 (二十一) 揮つて業無窮の  
 (二十二) 命を斷じて大空不  
 (二十三) 生を得ること。降三世  
 (二十四) のこと。八供天女 金

り、色に耽て誰か(一)後身の報を覺らん。閻魔獄卒は獄を構へて罪を斷はり、餓鬼禽獸  
 は口を爛して躰に挂く、三界に輪廻し四生に踏躰す、大覺の慈父此れを觀て何ぞ默し  
 たまはん。是の故に、種種の業を設けて種種の迷を指す。意此れに在るか、於焉に  
 三綱五常を修すれば、則ち君臣父子の道序有て亂れず、(二)六行、四禪を習へば、則ち  
 厭下欣上の觀勝進して樂を得、(三)唯蘊に我を遮すれば八解六通あり、因縁に身を修す  
 れば(四)空智種を抜く、(五)無縁に悲を起し唯識境を遣れば、則ち二障伏斷し四智轉得す。  
 (六)不生に心を覺り、獨空慮絶すれば、則ち一心寂靜にして不二無相なり、(七)一道を本  
 淨に觀すれば、觀音熙怡し、(八)法界を初心に念へば、普賢微笑したまふ。(九)心外の礦  
 垢、於此に悉く盡き、曼荼の莊嚴是の時漸く開く。麼吒の惠眼は無明の昏夜を破し、  
 日月の定光は(一〇)有智の薩埵を現す。五部の諸佛は智印を撃けて森羅たり、四種の曼荼  
 は法體に住して駢填たり、(一一)阿遮一睨すれば(一二)業壽の風定り、(一三)多餘三喝すれば無  
 明の波洶れぬ。(一四)八供の天女は雲海を妙供に起し、四波の定妃は適悅を法樂に受く、  
 十地も窺窺すること能はず、(一五)三自も齒接することを得ず、秘中の秘、覺中の覺なり、  
 吁吁自實を知らず狂迷を覺と謂へり愚に非ずして何ん。考慈心に切なり教に非んば何

剛界内外の八供養  
 天女使のこと。  
 (一) 三自 釋論所  
 明のこと。心摩訶  
 (二) 金剛内外の壽  
 地大の阿字は有  
 情外は非情阿字は  
 一切情非情の命根  
 なれば内外壽とい  
 ふ。  
 (三) 離言 水大壽  
 字なり。  
 (四) 垢過 火大壽  
 字なり。  
 (五) 等空 空大伎  
 字なり。  
 (六) 風大訶字  
 たり。  
 (七) 制體等 制底  
 は塔婆にして大日  
 如來の三摩耶形な  
 り。  
 (八) 旗光蓮貝 東  
 方寶幢佛の三摩耶  
 形(旗)南方開敷華  
 王佛の三摩耶形(光)  
 西方無量壽佛  
 の三摩耶形(蓮)北  
 方天鼓雷音佛の三  
 摩耶形(鼓)  
 (九) 薄伽梵  
 のこと。十種 大日經

ぞ濟はん、藥を投すること此れに在り、服せずんば何んぞ療せむ。徒らに論じ、徒ら  
 に誦すれば醫王呵叱したまふ。爾れば乃ち九種の心藥は外塵を拂て迷を遮し、金剛の  
 一宮は内庫を排いて寶を授く。樂と不樂と得と不得と自心能く爲す、哥に非ず社に非  
 ず我が心自ら證すのみ。求佛の薩埵知らずんばある可らず。摩尼と鷲石と驢乳と牛髓  
 と察せずんばある可らず、察せずんばある可らず。住心の深淺經論に明かに説けり、  
 具さに列すること後の如し。頌にいはいはく、  
 (一) 金剛内外の壽と (二) 離言(三)垢過(四)等空の(五)因と  
 作遷慢如真乘の寂と (六)制體(七)旗光蓮貝の仁と  
 日幢華眼鼓の勃駄と 金寶法業歌舞の人と  
 捏鑄刻業威儀等との 丈夫無碍にして刹塵に過ぎたまへるを歸命したてまつる  
 我れ今詔を蒙て十住を撰す 頓に三妄を越て心眞に入らしめん  
 霧を褰げて光を見るに無盡の寶あり 自他受用日に彌よ新なり  
 帔祖して(八)伽梵を求む 幾郵してか本床に到る  
 如來明かに此れを説き玉へり (九)十種にして(一〇)金場に入る



所説の十心三劫の心續生なり。  
○金場第十の住心金剛の宮なり

(一)羊車の三藏法華譬喩品に出づ  
羊鹿牛を聲聞緣覺菩薩の三乘に譬ふる中の聲聞乘教の事。  
(二)身を十二に修して五蘊の無常を覺る事。  
(三)八不云々不正觀を以て生滅等八迷の戲論を斷絶する事。

已に住心の數を聽つ 請ふ彼の名相を開け  
心の名は後に明かに列ぬ 諷讀して迷方を悟れ。

第一異性羝羊心 凡夫狂醉して 吾が非を知らず 但し婬食を念ずること 彼の羝羊の如し。

第二愚童持齋心 外の因縁に由て 忽ち節食を思ふ 施心萌動して 穀の縁に遇ふが如し。

第三嬰童無畏心 外道天に生じて 暫らく蘇息を得 彼の嬰兒と 犢子との母に隨ふが如し。

第四唯蘊無我心 唯し法有を解して 我人皆な遮す (一)羊車の三藏 悉く此の句に攝す。

第五拔業因種心 (二)身を十二に修して 無明種を抜く 業生已に除て 無言に果を得。

第六他緣大乘心 無縁に悲を起して 大悲初めて發る 幻影に心を觀じて 唯識境を遮す。

第七覺心不生心 (三)八不に戲を絶ち 一念に空を觀すれば 心原空寂にして 無相安樂なり。

第八如實一道心 一如本淨にして 境智俱に融ず 此の心性を知るを 號して遮那と曰ふ。

第九極無自性心 水は自性なし 風に遇て即ち波たつ 法界は極に非ず 譬を蒙て忽ち進む。

第十秘密莊嚴心 願樂塵を拂ひ 眞言庫を開く 秘寶忽に陳じて 萬徳即ち證す。

### 第一異性羝羊心

異性羝羊心とは何ん、凡夫狂醉して善惡を辨へず、愚童癡暗にして因果を信せざる

(一)磁石 夫婦の情愛の親切なるに喩ふ。

(二)老子經に、道一混元一氣を生ず、二天地を生ず、三三方を生ず、三萬物を生ずとあり。  
(三)鯨鯢等 海中の大魚なり。  
(四)羅刹 速疾鬼又は可畏と云ふ暴鬼なり。  
(五)人な嚇ふ

の名なり、凡夫種種の業を作て種種の果を感ず、身相萬種にして生ず、故に異生と名く。愚癡無智なること、彼の羝羊の劣弱なるに均し、故に以て之に喩ふ。夫れ生は吾が好むに非ず、死は亦人の惡むなり、然れども猶ほ生れ之き生れ之いて六趣に輪轉し、死に去り死に去て三途に沈淪す。我を生める父母も生の由來を知らず、生を受くる我が身も亦た死の所去を悟らず、過去を顧みれば、冥冥としてその首めを見ず、未來に臨めば、漠漠としてその尾りを尋ねず。三辰頂に戴けども暗きこと狗の眼に同じく、五嶽足を載すれども迷へること羊の目に似たり、日夕に營營として衣食の獄に繋かれ、遠近に趁り逐つて名利の坑に墜つ。加之らず、(一)磁石鋼を吸へば則ち剛柔馳せ逐ひ、方諸水を招けば則ち父子相ひ親しむ、父子の親親たる親の親たることを知らず、夫婦の相ひ愛たる愛の愛たることを覺らず。流水相ひ續き飛魚相ひ助く、徒らに妄想の繩に縛られて空しく無明の酒に酔へり、既に夢中に遇へるが如し、還て逆旅に逢ふに似たり、(二)一二道より展生し、萬物三に因て森羅たり、自在能く生し梵天の所作なりと云ふが如くに洎では、未だ生人の本いを知らず、誰か死者の起りを談せん。遂に乃ち豺狼狡虎は毛物を咀嚼し、(三)鯨鯢摩竭は鱗族を吞飲す、金翅龍を食み(四)羅刹人



(一) 四種の口業  
(二) 兩舌綺語妄語惡口  
(三) 三箇の意過  
貪欲瞋恚愚癡。

(三) 牛狗の戒外  
道所持の惡禁なり  
糞を食し尿を飲み  
牛狗所行の諸事を  
清淨となすなり。

を喫ふ、人畜相ひ呑み強弱相ひ噉ふ。況んや復た弓箭野を亘れば、猪鹿の戸種<sup>トボツ</sup>を絶ち、網罟澤を籠むれば魚鼈郷族らを滅す、鷹隼飛べば鶯鶯涙を流し、豺犬走れば狐兔腸を斷つ、禽獸は盡れども心には未だ飽かず、厨屋には満てども舌には厭はず、強竊二盜は珍財に迷て戮を受け、和強兩軒は娥眉に惑て身を殺す。(二) 四種の口業は舌に任せて斧を作り、(三) 三箇の意過は心を縦にして自ら毒す、無慚無愧にして八萬の罪盡く作り、自作教他して塵沙の過常<sup>トガ</sup>に爲す、都て一一の罪業、三惡の苦を招き、一一の善根、四徳の樂に登ることを覺知せず。有るが云く、人は死して氣に歸へり、更に生を受けじと、此の如くの類をば斷見と名く、有るが云く、人は常に人爲り、畜は常に畜爲り、貴賤常に定まり、貧富恒に分れたりと、此の如くの類をば常見と名く。或は(三) 牛狗の戒を持ち、或は恒河に投死す、此の如くの類をば、邪見と云ふ、邪見外道その數無量なり、出要を知らず、妄見を祖とし習へり、是の如く等の類は皆悉く羶羊の心なり。頌に曰く、四顧

凡夫は善惡に盲いて 因果あることを信せず  
但し眼前の利を見る 何ぞ地獄の火を知らん

羞ることなくして十惡を造り 空しく神我ありと論ず

執着して三界を愛す 誰か煩惱の鎖を脱れん

問ふ、何れの經に依てか此の義を建立する、答ふ、大日經なり、彼の經に何んが説く、經に云はく、秘密主、無始生死の愚童凡夫は、我名と我有に執着して無量の我分を分別す。秘密主、若し彼れ我の自性を觀せざれば則ち我我所生ず。餘は復た時と地等の變化と、瑜伽の我と、建立の淨と、不建立の無淨と、乃至聲と非聲とありと計す。秘密主、是の如く等の我分は、昔しより以來<sup>ココロ</sup>た分別と相應して順理の解脱を希求す。秘密主、愚童凡夫の類は猶し羶羊の如しと。龍猛の菩提心論に云はく、謂はく、凡夫は名聞利養資生の具に執着して、務むに安身を以てし、恣に三毒五欲を行す、眞言行者、誠に厭患すべし、誠に棄捨すべしと。

### 第一愚童持齋心

夫れ禿<sup>カボラ</sup>なる樹は定んで禿なるに非ず、春に遇ふときは則ち榮え華さく、増なれる父何んど必ず氷ならん、夏に入るときは則ち泮<sup>ト</sup>け注ぐ、殺牙<sup>キヤ</sup>濕<sup>シ</sup>ひを待ち卉葉時に結ぶ。(二) 戴淵心を改めて(三) 周處忠孝あつしが如くに至ては、礮石忽ちに珍なり、魚珠夜を照

(一) 戴淵字は若  
思廣陵の人なり。  
(二) 周處字は子  
隱義興陽羨の人なり。



(一) 探湯不及 惡  
を去ることの疾き  
に喩へ、不及は善  
を修することの及  
ばざる如くなるを  
いふ、論語に見ゆ。

(二) 四序 四時の  
和す  
るを玉燭といふ、  
爾雅に出づ。

す、物に定まる性なし、人何ぞ常に惡ならん、縁に遇ふときは則ち庸愚も大道を庶幾  
ふ、教に順するときは則ち凡夫も賢聖に齊しからんと思ふ、羝羊自性なし愚童も亦た  
愚にあらず。是の故に、本覺内に熏じ佛光外かに射して、欸爾に節食し數數に檀  
那す、牙種庖葉の善、相續して生じ、敷華結實の心(一)探湯不及なり。五常漸く習ひ十  
善鑽仰す、五常と言ふは、仁・義・禮・智・信なり、仁をば不殺等に名く、己を恕て物に  
施す、義は則ち不盜等なり、積んで能く施す、禮は曰はく不邪等なり、五禮序あり、  
智は是れ不亂等なり、審かに決し能く理はる、信は不妄の稱なり、言つて必らず行す、  
能く此の五を行するときは、則ち(二)四序玉燭し五才金鏡なり、國に之を行へば即ち  
天下昇平なり、家に之を行へば、則ち路に遺を拾はず、名を擧げ先を顯はすの妙術、  
國を保ち身を安するの美風なり。外には五常と號し、内には五戒と名く、名異にして  
義融し、行同うして益別なり、斷惡修善の基漸、脫苦得樂の濫觴なり、故に經に云は  
く、下品の五戒は膽部洲に生じ、中品の五戒は勝身國、上品は牛貨、上上と及び無  
我とは、鬱單越なりと、廣く之を説けり。四洲の人民に各各王者あり、王に五種あり、  
粟散と、四輪王となり、此の五種の王は必ず十善に乗じて來御す、故に仁王經に云は

(一) 英軌 善法の  
ハナ。

く、十善の菩薩大心を發して、長く三界の苦輪海を別る、中下品の善は粟散王、上品  
の十善は鐵輪王、習種は銅輪にして二天下なり、銀輪は三天性種性なり、道種堅徳の  
轉輪王は、七寶の金輪四天下なりと。今此の文を案するに、王者及び民は必ず五戒十  
善を行じて人中に生ずることを得、未だ有らじ此を棄て、能く得るものは、前生に善  
を修して今生に人を得、此の生に修せずんば還て三途に墜ちなむ、春の種を下さず  
んば、秋の實何んが獲ん、善男善女仰がすんばあるべからず、仰がすんばあるべから  
ず、十惡十善の報、聖王凡王の治、具さには十住心論の如し。頌に曰はく、三觀  
愚童少しき貪瞋の毒を解して 欸爾に持齋の美を思惟し  
種子内に熏じて善心を發す 牙庖相續して(一)英軌を尙ふ  
五常十善漸く修習すれば 粟散輪王もその旨を仰ぐ  
問ふ、此の住心は亦何れの經に依てか説く、答ふ、大日經なり、彼の經に何んが説く、  
經に云はく、愚童凡夫或る時に一法の想生することあり、所謂る持齋なり、彼れ此  
の少分を思惟して、歡喜を發起し、數數に修習す、秘密主、是れ初の種子の善業の發  
生するなり。復た此を以て因と爲して、六齋日に於て、父母男女親戚に施與する、是



(二) 尊宿 學行高尚にして世の師表とする所のもの。

(三) 悲想 無色界の第四天なり。

れ第二の牙種なり。復た此の施を以て、非親識の者に授與する、是れ第三の疱種なり。復た此の施を以て、器量高德の者に與ふ、是れ第四の葉種なり。復た此の施を以て歡喜して、伎樂の人等に授與し、及び(三)尊宿に獻する是れ第五の敷華なり。復た此の施を以て、親愛の心を發して、而も之を供養する、是れ第六の成果なり。

第二嬰童無畏心

嬰童無畏心とは、外道人を厭ひ、凡夫天を欣ぶの心なり、上(三)悲想に生じ、下(一)も仙宮に住して、身量四萬由旬壽命八萬劫にして、下界を厭ふこと瘡癩の如く、人間を見ること、蟬蛸の如し。光明日月を蔽くし福報輪王に超たりと云ふと雖も、然れども猶ほ彼の大聖に比すれば、劣弱愚蒙なること、此の咳兒に似たり、小分の厄縛を脱るゝが故に無畏なり、未だ涅槃の樂を得ざるが故に嬰童なり。問ふ聞導ならく、淮犬高く踏み、費龍遠く飛ぶこと、並に是れ藥力の致す所、師術の爲す所なり。今此の天等は何れの教に依り、誰れの師に就てか、能く是の如くの自在光明の身壽命長遠の樂を得る、又た天に幾く種かある、請ふその名を示せ、高問來り叩く、鐘谷何ぞ默さむ、嘗試に之を論せん、夫れ狂毒自ら解けず、醫王能く治す、摩尼自ら寶にあらず、工人能く鑿

(一) 一切智智 諸法の究竟實際を知る絶對智なり。

(二) 五通智道 五通仙の道なり。  
(三) 乾闥婆 尋香香陰等と譯す樂神なり。  
(四) 摩睺羅伽 大腹行と譯す。  
(五) 外道 佛教を内道と稱し是れ以外道の波羅門等の教を外道と稱す。

く、所謂る醫王と工人と豈に異人ならんや、我が大師薄伽梵その人なり。如來の徳は萬種を具せり、一一の徳は即ち一法門の主なり、彼の一一の身より機根量に隨て、種種の法を説て、衆生を度脱したまふ、故に大日經に云はく、如來應供正遍知、(一)一切智智を得て、無量の衆生のために、廣演分布し、種種の趣、種種の性欲に隨て、種種の方便道をもて、一切智智を宣説したまふ。或は聲聞乘道、或は緣覺乘道、或は大乗道、或は(二)五通智道、或は願て天に生じ、或は人中及び龍・夜叉・(三)乾闥婆に生じ、乃至(四)摩睺羅伽に生ずる法を説きたまふと云云、今此の文に依らば、三乘及び人天乘の教は並に皆な如來の所説なり、若し教に依て修行する者は、必ず天上に生ず。問ふ、若し然らば、諸の(五)外道等の所行は、皆な是れ佛法か、答ふ、此れに二種あり、一には合、二には違なり、合とは如來の所説に契合するが故に、違とは佛説に違乖するが故に、元は是れ佛説なりと云ふと雖も、然れども無始の時より來た展轉相承して本旨を違失せり、或は自見に隨て、牛狗等の戒を持て、以て生天を求む、是の如くの類は並に本意を失せり。問ふ、若し是れ佛説ならば、宜しく直ちに佛乘等を説くべし、何ぞ天乘等を説くことを用ふる、機根契當の故に、餘の乘は益なきが故に。問ふ、已に師



(一) 四吠陀論 吠陀は波羅門教徒の根本聖典にして印度最古の經典なり。此に四吠陀あり。一リグ・二ヤジュル・三サマ・四アタル吠陀。四サマ吠陀は主の空三昧(二) 他主の異名なり。外道の異名なり。常一主宰の我體ありと立て此に由て無想及び非想等の唯我のみ存して我所作の一切因果生滅等を空無する定を他主空三昧と(三) 空惠發生す。他主空三昧に由て空定と相應する有漏世間種種の勝智を發起生得するも

及び教を聞きつ、請ふ天の數を示せ、天に三種あり、謂はく、欲・色・無色界是れなり、初の欲界に六天あり、四天王・忉利・夜摩・都史・樂變化・他化。是れなり。色界に十八あり、此れに四の別あり、四禪各別の故に、初禪に三つあり、梵衆・梵輔・大梵是れなり、二禪に三つあり、少光・無量光・極光淨是れなり、三禪に又三つあり、少淨・無量淨・遍淨。是れなり、第四禪に九つあり、無雲・福生・廣果・無想・無煩・無熱・善見・善現・色究竟是れなり。無色界に四つあり、空無邊・識無邊・無處有處・非想非非想是れなり。此れ是の廿八種の天、海を去る遠近、身量の大小壽命の長短等は、具さには十住心論の如し、繁を恐れて述べず。問ふ、既に天の名數を聞きつ、重ねて請ふ彼の行相を示せ、答ふ、諸の外道等も亦た三寶三學等の名を立つ、梵天等を覺寶と爲し、(一) 四吠陀論等を法寶となし、傳授修行者を僧寶となし、十善等を戒となす、四禪那は即ち定なり、此の定は六行に由て得。六行とは言はく、苦・癡・障・淨・妙・離。是れなり、下界を厭て、苦癡障の想を作し、上天を欣て淨妙離の觀を作す。此の觀に由るが故に、展轉上生し、(二) 他主の空三昧に由て(三) 空惠發生す、此の三學に由て、上天の妙樂を得。然りと雖も道究竟にあらざるが故に、生死を出で、涅槃を得ること能はず、上み非想を射すれども、

還て地獄に墜ること、譬へば箭を虚空に射るに、力盡きて即ち下るが如し。是の故に樂求すべからず。問ふ、諸の外道同じく三學を修して、彼の二界に生じ、空三昧を證して、言亡慮絶す、何に由てか、煩惱を斷じ涅槃を證することを得ざる、答ふ、觀、二邊に著し、定、二見を帶するが故なり。問ふ、同じく非有非無を觀ず、何ぞ二邊二見に墮する、他主に繫屬して因縁の中道を知らざるが故なり。因縁の中道その意云何ん、因縁の有を觀するが故に、斷邊に墮せず、自性空を觀するが故に常見に墜ち、有空即ち法界なりと觀すれば、則ち中道正觀を得、此の中道正觀に由るが故に、早く涅槃を得、外道邪見の人は此の義を知らず、是の故に眞の圓寂を得ず、若し此の理を聞かば、即ち羅漢を得む。問ふ、戒を護て天に生ずるに幾ばく種かある、生天に四種あり一には外道前の説の如し、二には二乘亦た天上に生ず、三には大乘の菩薩必ず十天の王と爲るが故に、四には應化の諸佛菩薩、化して天王と作るが故に。具さには十住心論に説くが如し。頌に曰く、

外道發心して天の樂を願ひ 虔誠に戒を持して歸依を覓む  
 大覺圓滿者を知らず 豈に梵天(一)龍尊の非を悟らんや

(一) 龍尊 外道の信奉する諸大龍王なり。



道(二)の五熱云々  
苦行にして  
頂上に火を  
燃やして  
身の上を  
炙ぶるな  
り。

六行修觀して無色に生じ

身心(二)五熱して徒らに自ら嘸みむ

一一四

斷常空有に勝住を願ふ

若し世尊に遇ひたてまつらば我が違を覺らん

問ふ、今此の住心は亦何れの經論に依てか解説する、答ふ、大日經・菩提心論なり。彼の經に何んが説く、彼の經に云はく、秘密主、彼れ戒を護て天に生ずるは、是れ第七の受用種子なり、復た次に秘密主、此の心を以て生死に流轉するに、善友の所に於て是の如くの言を聞く、此れは是れ天なり大天なり、一切の樂を與ふる者なり、虔誠に供養すれば、一切の所願皆な滿んず、いはゆる自在天・梵天・那羅延天・商羯羅天・自在天子・日天・月天・龍尊等、乃至或は天仙大闍陀論師なり、各各に應に善く供養すべしと。彼れ是の如くなるを聞て、心に慶悅を懷て、慇重に恭敬し隨順し修行す。秘密主、是れを愚童異生の生死に流轉する無畏依の第八の嬰重心と名くと。又云はく、復た次に殊勝の行あり、彼の所説の中に隨て、殊勝に住して解脱を求むる惠生す、いはゆる常無常空なり、是の如くの説に隨順す。秘密主彼れ空と非空とを知解するに非ず、常と斷となり、非有非無俱に彼れ分別を無分別とす、云何んが空を分別せん。諸法の空を知らざれば、彼れ能く涅槃を知るにあらず、是の故に應に空を了知して斷常を

離るべしと。

解して云はく、外道出要を願て種種に身心を苦しむ斷常空有の教は角を據て乳を求るが如し、若し因縁の空を知らば忽爾に解脱を得む。

又云はく、秘密主、世間の因果及び業若しは生若しは滅、他主に繫屬して、空三昧生ず、是れを世間の三味道と名く。又云はく、若し諸天世間の眞言法教の道術、是の如くの勇者衆生を利せんがための故なりと。龍猛菩薩の菩提心論に云はく、諸の外道等は其の身命を戀んで、或は助くるに藥物を以てして、仙宮の住壽を得、或は復た天に生ずるを究竟と以爲へり、眞言行人應に彼等を觀すべし、業力若し盡きぬれば、未だ三界を離れず、煩惱尙ほ存し、宿殃未だ殄びず、惡念旋起す。彼の時に當て、苦海に沈淪して出離すべきこと難し、當さに知るべし、外道の法は、亦た幻夢陽燄に同じ。

## 國譯秘藏寶鑰卷の上終



# 國譯秘藏寶鑰

## 卷の中

### 第四唯蘊無我心

(一) 勝論師が六諦の數論師が二十五諦の數  
 (二) 梵天  
 (三) 梵天  
 (四) 四向四果  
 (五) 那羅延天  
 (六) 非を防ぐ身  
 (七) 口七支の非を防止  
 (八) 念とは四念處觀  
 (九) 背は八背捨即ち八  
 (十) 解脱のこ  
 (十一) 半月に罪を明  
 (十二) 十五日黒月晦日の  
 (十三) 十五日説戒する故  
 (十四) 行する時は布薩を  
 (十五) 行する時自の罪  
 (十六) 言ふ  
 (十七) 一夏意に隨  
 (十八) 居にして隨意は  
 (十九) 自恣なり

若し夫れ鉛刀終に鏝邪の續なし、泥虵豈に應龍の能あらんや、燕石珠に濫じ、璞鼠名  
 渉る、名實相濫すること由來尙し。然れば則ち(一)勝論師が諦の名(二)梵天が佛の號、長  
 爪が實相犢子が絶言、徒らに解脱の智を勞して、未だ涅槃の因を知らず。是の故に  
 大覺世尊、此の羊車を説て、三途の極苦を拔出し、八苦の業縛を解脱したまふ。其  
 の教爲らく、三藏廣く張り四諦普ねく觀ず、三十七品は道の助たり、(三)四向四果は即ち  
 人の位なり、識を言へば唯し六つ、七八なし、成を告れば三生六十劫、(四)非を防ぐは  
 則ち二百五十、善を修すれば即ち(五)四念八背なり、(六)半月に罪を説て、持犯立るに顯れ、  
 (七)一夏意に隨て凡聖乍ちに別る、禿頭割衣し、鐵杖銅盃あり、行くとときんば則ち安徐し  
 て虫を護り、坐するときんば、則ち低頭して息を數ふ、斯れ則ち身の標儀なり、殺を  
 言ひ收を言ふに、即ち知淨の語あり、行雲廻雪には即ち死尸の想ひあり、斯れ乃ち心

(一) 生空三昧 人  
 無我觀なり。

(二) 十八 十八變  
 化なり。

(三) 身智の灰滅  
 無漏の智火を以て  
 身智を都滅する無  
 餘涅槃のこと。  
 (四) 簡持 人我を  
 簡去して五蘊の法  
 を持取すること。

口の灰屑なり。塚間に目を閉ぢ、白骨に心を在く、聚落に分衛して麁飯想を吐く、樹  
 葉雨を遮す、誰か聖室を願はん、糞掃風を防ぐ何ぞ必しも執綺ならん。(一)生空三昧に  
 神我の幻陽を知り、無生盡智に煩惱の後有を斷ず。その通は則ち日月を虧蔽し、天地  
 を顛覆す、目には三世を徹し、身には(二)十八を現す、石壁無碍にして虚空に能く飛ぶ、  
 其の徳は則ち輪王頂接し、釋梵歸依し、八部供承し四衆欽仰す。遂に乃ち五蘊の泡  
 露を厭て、三途の塗炭を惡み、等持の清涼を欣つて、廓大虚に同じ、湛然として無爲  
 なり、何ぞそれ樂なるや、(三)身智の灰滅を尙ふ、乘の趣きたること大體此の如し。法  
 を存するが故に唯蘊なり、人を遮するが故に無我なり、(四)簡持を義と爲るが故に唯な  
 り。憂國公子玄關法師に問て曰はく、今聲聞乘の人及び法を聞くに、既に道、人天より  
 も妙へに、人、釋輪に超たることを知んぬ、六通具足し、三明圓滿せり、人天の仰ぐ所  
 福田是れ憑みあり、理誠に然るべし。所以に前來の聖帝賢臣廣く伽藍を建て、僧人を  
 安置す、萬戸を割て鐘を鳴らし、千頃を開て斷食す、憑み仰ぐこと他に非ず、只だ國  
 家を鎮押し黎元を利濟するに在り。然るに今在らゆる僧尼、頭を剃て欲を剃らず、  
 衣を染めて心を染めず、戒定智慧は鱗角よりも乏しく、非法濫行は龍鱗よりも鬱んな



り、日夜に經營して頭を臣妾の履に叩き、朝夕に苞直して膝を僕隸の足に屈す、釋風  
 茲れに因て陵替し、佛道之に由て毀廢す、早滂莽りに至り、疫癘年に起る、天下の  
 版盪、公私の塗炭職として此の由なり、若かじ一切に度を停めて供を絶んには、若  
 し羅漢得道の者あらば、身を屈して頂敬し、國を傾けて供給せんのみ。師の曰はく、  
 善いかな、斯の間多く利益あり、宜しく子伶倫が聰耳を開き、顔子が敏心を借て、諦  
 らかに聴き、善く思へ、且く一二を舉げて子が迷を塞げん。夫れ蠅螟は大鵬の翼を  
 見ず、蝦蟇何ぞ難陀が鱗を知らん、蝸角は穹昊の頂を衝くことを得ず、僬僥何ぞ能  
 く溟渤が底を踐まむ、生盲は日月を知らず、聾聵は雷鼓を聞かず、愚少の分蓋し此の  
 如し。又た夫れ物に善惡あり、人に賢愚殊なり、賢善の者は希れに、愚惡の者は多し、  
 麒麟鸞鳳は禽獸の奇秀たるものなり、摩尼金剛は金石の靈異たるものなり、人の挺粹  
 なるは賢聖、帝の稱首たるは堯舜、后の美なるは文母、臣の歎せらるゝは元凱、麟鳳  
 一たび見ゆれば則ち天下大平なり、摩剛一たび目ゆれば則ち萬物聲に應ず、聖君世に  
 出れば四海無爲なり、賢臣機を輔くれば、一人垂拱す、然りと雖も聖君には遇ふこと  
 希れなり、千載に一たび御す、賢佐は得難し、五百に一たび執る、摩尼は空しく名の

みを聞く、麟鳳誰か實を見る。然れば則ち麟鳳を見ざれども、羽毛の族ひを絶つべか  
 らず、如意を得ざれども、金玉の類を抛つべからず、堯舜再び生れざれども、天下の  
 生何ぞ無からん、元凱更に出でざれども、率士の臣豈に休せんや、孔麟既に摧しかど  
 も好儒の輩ら邦毎に袂を連ね、李牛已に西せしかども、求道の徒ら縣毎に肩を側たつ、  
 代に扁華なけれども醫道何んぞ斷へざる、時に孛養絶たれども、武術誰か廢るべき、師  
 鍾天の絲綺に感じ、義獻仙の龍管に應ず、その人既に往く、其の術誰か得たる、然れど  
 も猶ほ彈指耳に聒しく、書札目を汗す所以は、並に皆な能むことを得ずして之を爲す  
 ことの猶ほ賢ればなり。然れば則ち羅漢の聖果は一生に得難し、是の故に鈍根は六十  
 劫、利智は則ち三生なり、修煉苦行して乃し聖位を證す、向果の賢聖なしと雖も、その道  
 何ぞ絶んや、公子が曰はく、賢聖に遇ひ難きこと誠に其れ然かなり、持戒智慧何ぞそれ  
 未だ聞えざる思、師の曰はく、時に増減有り、法に正像有り、増劫の日は人皆な十善  
 を思ひ、減劫の年は、家ごとに十惡を好む、正法千年の内には持戒得道の者多く、像  
 法千載の外には護禁修徳の者少し、今に當て時は是れ濁惡にして人は根劣鈍なり、其  
 の道に依倚たり、其の風に髣髴たり、妙道鑽り難く、輕毛風に隨ふ、斯れ乃ち蒼天西



に傾く、群星何ぞ東せん、黃輿震裂す、草木何ぞ靜ならん、公子が曰はく、若し還り答ふるが如きは、時根に牽かれて逆流猶は難し、若し然らば五濁惡世には定で持戒定慧の人なからんや、師の曰はく、何爲ぞそれ然らんや、夫れ圓蓋は西に轉すと雖も、日月は東流す、南斗は隨ひ運れども、北極は移らず、冬天は盡く殺せども、松柏は凋まず、陰氣水を凍せども潮酒は氷らず、紂民戸を編んで戮すべし、然れども猶ほ三人は仁と稱せらる、堯戸は屋を比べて封すべし、然れども猶ほ四凶は殛を受たり、火曰に物を焼けども布鼠中に遊ぶ、水能く人を溺らせども、龍鼈内に泳ぐ、此を以て之を觀れば同き者ありと云ふと雖も、亦た和せざる者あり、此に由て言はば、時は濁濫なりと雖も、何ぞ其の人なからん、公子が曰はく、既に人あることを知んぬ、その人安んかある、師の曰はく、大方は隅なし、大音は聲希れなり、大白は辱れたるが若し、大直は屈たるが若し、大成は缺たるが如し、大盈は沖しきが若し、玄德玄同なり、聖に非ずんば熟れか知らん、人を知ることの病こと古聖も亦難くせり、公子が曰はく、和光同塵は抑も前聞あり、然れども猶ほ山は玉を藏して草木茂し、嶽は劍を收めて光彩衝く、闕を尋ねて形を知り、煙を見て火を悟る、有智有行何ぞ必しも知り難らん、師の曰

はく、物は心なきが故に相を現す、人は心を含むが故に辨へ回し、公子が曰はく、既に聖賢の辨へ易からざることを聞きぬ、然れども猶ほ佛法は國に盡たり、僧人は蠶食す、其の益安くんかある、師の曰はく、有益無益は後に更に陳答せん、且く大綱を擧げて道俗の損益を示さむ、今子が問を聞くに佛法の流傳を思はず、只だ國家の損益を憂るに在り、並に忠臣義士は誠に然るべし、夫れ國を建て、職を設け、君を樹て民を御むる所以は、本と天下を宰て君王に供し、海内を屠つて臣佐に給はんが爲めには非ず、當に天下の父母と萬人の塗炭を漚はんと以爲へり、然れば則ち馬を御むるの法、鑣策に非れば能はず、人を馭るの道、教令に非れば得ず、是の故に、五常の法を垂れて、四海の人を導く、五經三史其の正路を示し、金科玉條其の邪逸を防ぐ、若し主上之行へば則ち天下無爲なり、黎下之に遵へば則ち宇内無事なり、君臣父子の禮序有り、上和下睦の義缺くることなし、然るに今ま詩を誦する者温惠淳和の心なく、禮を讀む者恭儉揖讓の志を忘れたり、惡を懲し、善を勸むるは春秋の宗とする所、潔靜精微は周易の尊ぶ攸なり、代を擧げて披誦すれども誰か孔丘の誠に契ひ、周公の勅に合へる、能く誦し能く言ふこと鸚鵡も能く爲す、言ふて行せずんば何ぞ猩猩に異



らん、又た夫れ百工天に代はり、九牧人を馭む、七道五畿の長、三百六十の守、縣縣の令尉、郷郷の里正、家家の父子、門門の百姓、その數無量にして貴賤無邊なり、然れども猶ほ仁義を行ふ者の幾何ぞ、忠孝を修むる者幾許ぞ、禮信を慎み守る者幾くかある、律令を犯さざる者幾人ぞ、並に皆上下文を讀めども、其の行を慎します、貴賤口には是すれども、心行は悉く非なり、諺に曰はく、孝經を撃て母の頭べを打つと、蓋し斯の謂か。曾て自己が法教に乖越することを顧みず、還て他人の經法に違犯することを談毀す、所謂る己が臙脚を蔽して、他の腫れ足を發はす者なり、公子が論する所の如きは、天下に有らゆる百工令長並に皆な法に乖ける者多し、率土に有らゆる元元忠孝なるは聞ゆること希れなり、三教は皆な是れ一人の弘傳する所なり、何を以てか釋縑の違犯をば毛を吹て瑕を求め、儒素の邪非をば含弘にして糺さざる、又た夫れ諸寺の封戸は一萬に出でず、僧尼の喫粒は一鉢に過ぎず、經を讀み、佛を禮して國家の恩を報じ、觀念坐禪して四恩の徳を答す、然るを今ま俗素の衣食は或は萬戸の俵を食み、或は千乗の國を費す、百里の宰三公の職、尸坐溪壑し、碩鼠尾間なり、空しく人祿を食み、徒に人官を受く、八元の美、五臣の徳、伊尹斯を負ひ、公望約を垂

る、張良が三略、陳平が六奇、是の如きの功、此の如きの徳、何を以てか聞えざる、若し僧尼の一鉢を責めば、何ぞ俗素の多くの費を檢かへざる、於是に公子忙然として言ふことなし、喟然として良久ふして曰はく、俗官の俸祿は官位の當る所なり、加以らず、星見えて出で、星みえて入り、風に櫛り、雨に沐して、日夜に公に在り、何を以てか辭讓せん、僧尼の經を讀み、佛を禮するが如きに至ては、堂上に宴坐して意に任せて修行す、何ぞ能く一卷の般若を誦み、一佛の名號を禮して、國家の鴻恩を報じ、四恩の廣徳を答せんや、師の曰はく、公子が言ふことは是に似たりと雖も、然れども未だ妙を知らず、夫れ法をば諸佛の師と名く、佛は則ち傳法の人なり、一句の妙法は億劫にも遇ひ難し、一佛の名字は憂曇も喩に非ず、是の故に雪重身を投げ、精進皮を剝ぐ、滿界の財寶は一句の法に如かず、恒沙の身命は四句の偈に比せず、輪王床と爲り、喜見身を焼く良とに以へ有るかな、一佛の名號を稱して、無量の重罪を消し、一字の眞言を讀して、無邊の功德を獲、何に況んや一鉢の麤飯四種の恩徳何を以てか酬いざらん、公子が曰はく、此の言迂誕なり、未だ信受するに足らず、吾が師孔李曾て言を吐かず、若し經を誦するを功となし、佛を禮するを積とせば、吾も亦た五經三史の文を誦し、周旦孔



丘の像を禮す、此と何ぞ別ならん、又た五經の文三藏の字、文字是れ同じ、誦持何ぞ異ならん、師の曰はく、公子が言ふこと乍ちに聞けば是に似たれども、熟々思へば天に殊なり、深義乍ちに信じ難し、且らく譬を以て之を説かん。夫れ勅詔の官符と臣下の往來と文字是れ同じけれども功用太だ別なり、勅書の一命の如きは、則ち天下奉行して賞を施し罰を施すに百姓喜懼す、如來の經法も亦た復た是の如し、菩薩聲聞天龍八部何れの人か信せざらむ、當に知るべし外書は百姓の文の如く、佛經は天子の勅の如し、是の故に釋帝之を誦して、修羅の軍を摧き、閻王之に跪いて受持の人を禮す、未だ五經を誦して罪を消し、三史を讀みて災を抜くと云ふことあらじ。公子が曰はく、釋迦は辯にして功徳を説き、孔丘は謙にして自ら伐らず、師の曰はく、斯の言を遵ふこと莫れ、孔甫自ら西方の聖を稱禮し、李老も亦た復吾が師の談を吐けり、大聖妄語したまはず、誘すれば即ち深坑に墮つ、公子が曰はく、十惡五逆を作る者は、理として地獄に墮つべし、人を誘し法を誘する何に由てか然るべき、師の曰はく、子ち未だ療病の法を聞かずや、身病を治するには必ず三の法に資る、一には醫人、二には方經、三には妙藥なり、病人若し醫人を敬ひ、方藥を信じ心を致して服餌すれば、疾即ち除愈す、

病人若し醫人を罵り、方藥を信せず、妙藥を服せずんば病疾何に由てか除くことを得む、如來衆生の心病を治したまふことも亦た復た是の如し、佛は醫王の如く、教は方經の如く、理は妙藥の如し、理の如く思惟するは猶し藥を服するが如し、法に依て藥を服すれば罪を滅し果を證す、然るを今ま重罪の愚人は人を誘し法を誘す、重罪何ぞ脱れん、法は人に資て弘まり、人は法を待て昇る、人法一體にして別異なることを得ず、是の故に人を誘するは則ち法なり、法を毀るは則ち人なり、人を誘し法を誘すれば定で阿鼻獄に墮して更に出る期なし、世人斯の義を知らずして舌に任て輒く談じて深害を顧みず、寧ろ日夜に十惡五逆を作るべくとも、一言一語も人法を誘す合らず、殺盜を行する者は現に衣食の利を得、人法を誘する者は、我れに於て何の益かある、公子が曰はく謹で示南を承んぬ、今ま自り以後敢て違犯せじ、公子が曰はく、既に人法を誘すべからざることを承んぬ、然れども未だ委うせず、人法に幾ばく種かある、爲當深淺ありや、師の曰はく、大に之を論ずれば二種あり、一には顯教の法、二には密教の法なり、顯教の中に又た二つあり、言はく一乘三乘別なるが故に、一乗とは如來の他受用身十地従り初地に至るまで現じたまふ所の報身所説の一乗の法是れなり、



三乘とは應化の釋迦二乘及び地前の菩薩等のために説きたまふ所の經是れなり、密教とは自性法身大毗盧遮那如來自眷屬と自受法樂の故に説きたまふ所の法是れなり、所謂る眞言乘とは是れなり、是の如きの諸の經法は其の機根に契當して並に皆な妙藥なり、其の經教に隨て菩薩論を造り、人師疏を作る、末代の弟子、斯の經論に依て讀誦し修行す、斯れ乃ち人法の差別なり、淺深福罰は十住心論の如し。公子が曰はく、今主師の説を聞くに已に人法の別なることを知んぬ、然るを今諸の論疏を造る者、皆な他を破して自を立つ、誑法と成らずや、師の曰はく、菩薩の用心は皆な慈悲を以て本と爲し、利他を以て先と爲す、能く斯の心に住して淺執を破して深教に入る、は利益尤も廣し、若し名利の心を挾んで淺教を執して深法を破せば斯の尤を免かれじ、公子が曰はく、既に提撕を蒙て、心霧忽に消えぬ、然れども猶ほ心中に未だ決せざる者あり、何んとなれば既に得道の者無しと雖も其の道絶つべからず、戒慧を具せる者は辱の若く味の若しと承んぬ、然るを今世間を見るに逃役の者衆く、奸盜の者多し、代を御むる聖皇、時を佐くる賢臣、斯の獼猴を見て黙し忍ぶこと能はず、佛教と王法と相和すること如何ん。師の曰はく、此れに二種あり、一には悲門、二には智門、大悲の門には

二 薩遮 大薩遮  
 三 尼乾子受記經  
 四 十輪 地持十  
 輪經なり(七七)

開して遮することなし、大智の門には制して開すことなし、制門は涅槃(二)薩遮等の經の如し、悲門は(三)十輪等の經の如し、相和に與奪あり、坐贓をも斷はるのみ、又人王の法律と法帝の禁戒と事異にして義融せり、法に任て控馭すれば利益甚だ多し、法を枉げて心に隨へば罪報極て重し、世人斯の義を知らず、王法を細くせず、佛法を訪らばず、愛憎に隨て浮沈し、貴賤に任て輕重す、此を以て代を馭む後報何ぞ免れむ、慎まさんばあるべからず、慎まさんばあるべからず、又た公子が先に談する所の早滂瘦癘天下の版盪僧人の招く所なりとは、此れ亦た然らず、子ち未だ大道を見ずして妄りに斯の言を吐く、今ま當に秦鏡を攪て子が面に臨むべし、若し災は非法の僧尼に由ると者ば、堯の代の九年の水、湯の時の七載の旱、是の如くの早滂誰の僧に由てか興りし、彼の時に僧なし、何ぞ必しも僧に由らん、夏の運顛覆し、殷の祚夷滅し、周の末絶廢し、秦の嗣早く亡せしこと、並に皆な禍三女より起り、運天命に隨ふ、其の日僧なかりき、豈に佛法に預げんや。夫れ災禍の興りに畧して三種あり、一には時の運、二には天の罰、三には業感なり、時の運とは所謂る陽九百六なり、堯の水、湯の旱之に當れり、是の故に聖帝震に出で機を見て逆備せり、滅劫の五濁亦た是れなり、天の罰とは



教令理に乖くに由て、天即ち之を罰す、孝婦雨らさざりしよの誅、忠臣霜を降すのよ囚、是の如くの類是れなり、業感とは悪業の衆生同く悪時に生れて業感の故に是の如くの災を招く、是の如く論は具さには歴代の五行志等、及び守護國經王法正論經等の如し、子ぢ曾て斯の義を知らずして、横よさまに狂言を吐く、理當るべからず、師の曰はく、有益無益は後に當に陳答すべしと。夫れ病ひ無きときは則ち藥なし、障り有るときは則ち教あり、妙藥は病を悲むで興り、佛法は障を惑むで顯る。是の故に聖人の世に出ること必ず慈悲に由る、大慈は樂を與へ、大悲は苦を抜く、拔苦與樂のもと本源を防がんには如かず、源を防ぐの基は教に非んば得ず、疾に輕重あれば藥則ち強弱あり、障に厚薄あれば、教則ち淺深なり、増切には病輕ければ輪王人を御し、減切には障厚ければ如来教を垂れたまふ、五濁惡世の衆生は病重く、三毒ず麁りに興て八苦身を迫め、福徳薄少にして貧病極めて多し、斯れ即ち前世惡因の報感なり、遂に乃ち味を嗜む者は生命を殺して腹に填て、財を貪る者は他物を奪て衣食す、色に耽ける飛蛾は炎を拂ふて身を滅ぼし、酒を好む猩猩はた食きの邊に縛せらる、是の如くの邪見の行勝て計ふべからず、此の生に惡業を作て、後に當に途に墜つべし、三途の苦は劫を経ても免れ

難し、如來の慈父此極苦を見て、其の因果を説きたまふ、惡の因果を説て、其の極苦を抜き、善の因果を示して、其の極樂を授く。其の教を修する者に畧して二種あり、一には出家、二には在家なり、出家とは頭を剃り衣を染むる比丘比丘尼等は是れなり、在家とは冠を戴き纓を絡へる優婆塞優婆夷等は是れなり、上み天子に達し、下も凡庶に及ぶまで五戒十善等を持って、佛法に歸依する者は皆な是れなり、菩薩と言ふは、是の如くの在家の人十善戒を持って六度の行を修する者は是れなり、出家して大心を發する者も亦た是れなり、惡を斷するが故に、苦を離れ、善を修するが故に樂を得、下も人天より、上み佛果に至るまで皆な是れ斷惡修善の感得する所なり、斯の兩趣を示さんのために、大聖教を設けたまふ、佛教既に存せり、弘行人に在り、是の故に法を知る者は出家して燈を傳へ、道を仰ぐ者は道に入て形を改む。經に云はく、若し國王父母有て、人民男女等を放して出家入道せしむる所得の功徳無量無邊なりと、僧尼あるが故に佛法絶えず、佛法存するが故に人皆な眼を開く、眼明にして正道を行す、正路に遊ぶが故に涅槃に至る、加以らず經法の在ある所は諸佛護念し諸天守衛す、是の如くの利益騰て計ふべからず、公子が曰はく、法を知て道を弘ひむる者は利益灼然なり、非法











在前の故に、復た二種の因縁あり、謂はく、盡智の故に、無生智の故に、復た二種の因縁あり、隨順して真諦の理を覺悟するが故に、隨順して真諦の智を獲得するが故に、此は是れ衆生の煩惱を除滅する清淨の因縁なり、如來悉く知りたまへり、復た次に、善男子、煩惱の因縁數量あることなければ、解脱の因縁も亦た數量あることなし、或は煩惱有て能く解脱の與めに以て因縁と爲る、實體を觀するが故に、或は解脱有て能く煩惱の與めに以て因縁と爲る、執着を生ずるが故に。頌に曰はく、

緣覺の鹿車は言説なし 部行と麟角と類不同なり

因縁の十二を深く觀念し 百劫に修習して神通を具す

業と煩惱と及び種子とを抜き 灰身滅智して虚空の如し

湛然として久しく三昧に醉臥せり 警めを蒙て一如の宮に廻心す。

問ふ、此の住心は亦何れの經論に依てか説く、答ふ、大日經菩提心論なり、彼の經論に何んが説く、經に云はく、緣覺は業煩惱の株杭と無明の種子の十二因縁を生ずるを抜く、建立宗等を離れたり、是の如くの湛寂は一切外道の知る能はざる所なり、先佛一切の過を離れたりと宣説したまへり、又言はく、緣覺は深く因果を觀察し、無言説の法

(二) 本涅槃 無餘 涅槃なり。

(三) 發生 大乘心を發生するなり。  
(四) 劫限等 預流は八萬劫一來は六萬劫不還は四萬劫阿羅漢は二萬劫辟支佛は十千劫なり。

に住して轉せずして言説なし、一切の法に於て極滅語言三昧を證す、是を緣覺の三昧道と爲す。又云はく秘密主若し緣覺聲聞所説の眞言に住すれば、諸過を摧害すと、又云はく、聲聞所説の眞言は一一の句安布せり、是の中に辟支佛は復た小きの差別あり、謂く三昧分異にして業生を淨除すと。龍猛菩薩の菩提心論に云く、又二乗の人あり、聲聞は四諦の法を執し、緣覺は十二因縁を執す、四大五陰畢竟磨滅すと知て、深く厭離を起して衆生の執を破す、本法を勤修して其の果を尅證し、(二) 本涅槃に越くを究竟と已爲へり、眞言行者當に觀すべし、二乗の人は人執を破すと雖も、猶し法執あり、但し意識を淨めて其の他を知らず、久久に果位を成じ灰身滅智を以て、その涅槃に越くこと、太虚空の如くして湛然常寂なり、定性有る者は(三) 發生すべきこと難し、要す(四) 劫限等の滿を待て方に乃ち發生す、若し不定性の者は劫限を論することなし、緣に遇へば便ち廻心向大す、化城從り起て三界を超えたりと以爲へり、謂く宿し佛を信せしが故に、乃し諸佛菩薩の加持力を蒙て、方便を以て遂に大心を發す、乃し初め十信從り下も遍ねく諸位を歷て、三無數劫を經、難行苦行して然して成佛することを得、既に知んぬ、聲聞緣覺は智慧狹劣なり、亦た樂ふ可らず、十住論に云く、若は聲聞地



及び辟支佛地に墮す、若し爾らば是れ大なる衰患なり、助道法の中に説くが如し。

若し聲聞地 及び辟支佛地に墮するをば

是を菩薩の死と名く 則ち一切の利を失す

若し地獄に墮するは 是の如きの畏を生せず

若し二乘地に墮するをば 即ち大怖畏と爲す

地獄の中に墮すれば 畢竟して佛に至ることを得べし

若し二乘地に墮すれば 畢竟して佛道を遮す

佛自ら經の中に於て 是の如きの事を解説したまへり

人の壽を貪する者は 首べを斬るを則ち大なる畏とするが如く

菩薩も亦た是の如し 若し聲聞地

及び辟支佛地に於て 應に大怖畏を生ずべし

### 國譯秘藏寶鑰卷の中終

## 國譯秘藏寶鑰

### 卷の下

#### 第六他緣大乘心

（一）大士 菩薩の  
（二）二空三性  
法二空と依他起性  
圓成實性通計所執  
の三性なり。  
（三）自執人法二執  
と通計所執なり。  
（四）阿耨多羅三  
藐三菩提の事。

粵に（一）大士の法あり、樹て、他緣乘と號す、建爪を越て高く昇り、聲緣を超て廣く運ぶ、（二）二空三性に（三）自執の塵を洗ひ、四量四攝に他利の行を齊ふ、（四）阿耨の深細を思惟し、幻焰の似心に專注す、於是に芥城竭て還て滿ち、巨石礮て復た生ず、三種の練磨は初心の退せんと欲するを策し、四弘の願行は後身の勝果を仰ぐ、等持の城を築て、唯識の將を安じ、魔旬の仗陣を征して煩惱の賊師を伐つ、八正の軍士を整へて、縛るに同事の繩を以てし、六通の精騎を走せて、殺すに智慧の劍を以てす、勞績を封するに、五等の爵を以てし、心王を冊くに四徳の都を以てす、勝義勝義太平の化を致し、廢詮談旨無事の風を扇ぐ、一眞の臺に垂拱し法界の殿に無爲たり、三大僧祇の庸ら於是に帝と稱し、四智法王の號本と無ふして今を得たり、爾れば乃ち藏海には七轉の波を息め、蘊落には六賊の害を斷つ、無分の正智は眞常の函に等しく、後得の權悲は



諸趣の類に逼す、三藏の法令を製て、三根の有情を化し、十善の格式を造て、六趣の衆生を導く、乘を言へば即ち三つ、識を談すれば唯し八つ、五性に成と不とあり、三身は即ち常と滅となり、百億の應化は同じく六舟を汎べ、千葉の牟尼は等しく三駕を授く、法界の有情を縁するが故に他縁なり、聲獨の羊鹿に簡ぶが故に大の名あり、自他を圓性に運ぶが故に乘と曰ふ、此れ乃ち君子の行業菩薩の用心なり、此れ北宗の大綱蓋し此の如し。頌に曰はく、七韻

心海湛然として波浪なし 識風鼓動して去來を爲す

凡夫は幻の男女に眩著し 外道は唇の樓臺を狂執す

自心の天獄爲ることを知らず 豈に唯心の禍災を除くことを悟らんや

六度萬行は三劫に習ひ 五十二位一心に開く

煩惱所知已に斷じて淨ければ 菩提涅槃是れ吾が財なり

四三點の徳今も具足す 覺らずして外に求むる甚だ悠なる哉

言亡慮絶して法界に逼せり 沈葬の一子尤も哀むべし

問ふ、此の住心は亦た何れの經論に依てか建立する、答ふ、大日經菩提心論等なり、彼の

經等に何んが説く、答ふ大日經に云く、秘密主、大乘の行あり、無緣乘の心を發して、法に我性無し、何を以ての故に、彼れ往昔に是の如く修行せし者の如きは、蘊の阿頼耶を觀察して、自性は幻と陽燄と影と響と旋火輪と乾闥婆城との如しと知る、龍猛菩薩の菩提心論に云く、又衆生有て大乘の心を發して、菩薩の行を行す、諸の法門に於て遍修せざるることなし、復た三阿僧祇劫を経て、六度萬行を修し、皆な悉く具足して、然して佛果を證す、久遠にして成ずることは斯れ所習の法教の致次第あるに由てなりと。問ふ二障を斷じて四徳を證する、此の如くの没駄は究竟とや爲む、是の如くの行處は未だ本源に到らず、何を以てか知ることを得る、龍猛菩薩の説かく、一切の行者一切の惡を斷じ、一切の善を修して十地を超え、無上地に到て三身を圓滿し、四徳を具足す、是の如くの行者は無明の分位にして明の分位に非ずと。今ま此の證文に依らば、此の住心の佛は未だ心原に到らず、但し心外の迷を遮して秘藏の寶を開くことなし。

### 第七覺心不生心

夫れ大虛寥廓として萬象を越一氣に含み、巨壑泓澄として千品を爰一水に孕む、誠に知んぬ一は百千が母爲り、空は即ち假有の根、假有は有に非れども有有として森羅たり、



(一) 水波の不離  
眞俗二諦の不一不  
異の喩を示す。  
(二) 四中の一對偏  
の中二盡偏の中三  
絶待の中四成假の  
中。

絶空は空に非れども空空として不住なり、色空に異ならざれば諸法を建て、宛然とし  
て空なり、空色に異ならざれば諸相を泯じて宛然として有なり、是の故に色即ち是  
れ空、空即ち是れ色なり、諸法も亦た爾なり何に物か然らざらん、(一) 水波の不離  
に似たり、金莊コンソウの不異に同じ、不一不二の號立ち二諦(二) 四中の稱顯チョウケンはる、空性を無  
得に觀じ戲論を八不に越ゆ、時に四魔戰はざるに面縛し三毒殺さざるに自降す、  
生死即ち涅槃なれば更に階級なし、煩惱即ち菩提なれば斷證を勞すること莫し、然り  
と雖も無階の階級なれば五十二位を壊せず、階級の無階なれば一念の成覺を碍へず、  
一念の念に三大を経て自行を勤め、一道の乘に三駕を馳せて化他を勞す、唯蘊の無性  
に迷へるを悲み、他縁の境智を阻てたるを歎く、心王自在にして本性の水を得、心數の  
客塵は動濁の波を息む、權實二智は圓覺を一如に證し、眞俗兩諦は教理を絶中に得、心  
性の不生を悟り境智の不異を知る、斯れ乃ち南宗の綱領なり、故に大日尊秘密主に  
告げて言はく、秘密主、彼れ是の如く無我を捨て、心主自在にして自心の本不生  
を覺る、何を以ての故に、秘密主、心は前後際不可得なるが故にと。釋して曰く、心  
主とは即ち心王なり、有無に滯せざるを以ての故に、心に罣碍なくして所爲の妙業

(一) 二諦方言等  
吉藏法師二諦章三  
卷を著して中道を  
明す又所撰の大乗  
玄論の中に二諦の  
ありて中に三種の  
方言あり。  
(二) 佛性等の章  
大乘玄論第三卷に  
佛性義あり。

意に隨て能く成ず故に心主自在と云ふ、心王自在とは、即ち是れ淨菩提心の更に一  
轉の開明を作して前劫に倍勝することを明す、心王は猶し池水の性の本より清淨なる  
が如く、心數の淨除は猶し客塵の清淨なるが如し、是の故に此の性淨を證する時、即  
ち能く自ら心の本不生を覺る、何を以ての故に、心は前後際俱に不可得なるが故に。  
譬へば大海の波浪の縁従り起するを以ての故に、即ち是れ先にも無く後にも無し、而  
も水性は爾らず、波浪の縁従り起する時、水性は是れ先きにも非ず、波浪の因  
縁盡くる時、水性は是れ後に無きにも非るが如く、心王も亦復た是の如し、前後際な  
し、前後際斷するを以ての故に、復た境界の風に遇ふて縁に隨て起滅すと雖も、而  
も心性は常に生滅なし、此の心の本不生を覺らば、是れ漸く阿字門に入るなり、是の  
如くの無爲生死の縁因生壞等の義は勝鬘經實性佛性論等の中に廣く明すが如し、謂く  
本不生とは兼て不生不滅不斷不常不一不異不去不來等を明す、三論家には此の八不を  
擧げて以て究極の中道と爲す、故に吉藏法師の(一) 二諦方言(二) 佛性等の章に盛り此の  
義を談せり、頌に曰く、五觀

因縁生の法は本より無性なり

空假中道は都べて不生なり



(二)五邊 著邊の法にして中道實相と相應せざるの義を論通支抄第三を參照せよ。第八第九の住心なり。

波浪の滅生は但し是れ水なり 一心は本より湛然として澄めり  
色空不壞にして智能く達す 真俗宛然として理分明なり  
八不の利刀戲論を斷つ (二)五邊面縛し自降して平かなり  
心通無碍にして佛道に入る 此の初門從り(三)心亭に移る  
經に云く、秘密主、彼れ是の如く無我を捨て、心主自在にして自心の本不生を覺る、何を以ての故に、秘密主、心は前後際不可得なるが故に、是の如く自心の性を知るは、是れ二劫を超越する瑜祇の行なりと。菩提心論に云く、當に知るべし一切の法は空なり、已に法の本無生を悟んぬれば、心體自如にして身心を見ず、寂滅平等究竟眞實の智に住して退失無からしむ、妄心若し起らば知て隨ふこと勿れ、妄若し息む時は心源空寂なりと。

問ふ、諸の戲論を絶て寂靜無爲なり、是の如くの住心は極底に到るや不や、那伽羅樹那菩薩の説かく、清淨本覺は無始從り來、修行を觀たず、他力を得るに非ず、性徳圓滿し、本智具足せり、亦た四句を出で亦た五邊を離れたり、自然の言も自然なること能はず、清淨の心も清淨なること能はず、絶離絶離せり、是の如くの本處は無明の邊

域にして明の分位に非すと。

第八一道無爲心

又は如實知自心と名け又は空性無境心と名け

(一)百會 釋迦を稱す。華胥 印度の國。一乘三草 法華方便品と藥草品に出づ。一乘とは法華唯一乘にして之を分別して三乘(三草)を説く。界外の一車 大白牛車を言ふ。

(五)會三歸 一三乘の方便權教を會して法華の眞實教に入せしむることを指本遮末釋迦牟尼佛の今番の證果を述して久遠本地に入ることを

若し夫れ孔宣震旦に出で、五常を九州に述べ、(一)百會(二)華胥に誕れて(三)一乘を三草に開く、於是に狂醉の黎元は住て進まず、癡闇の黔首は往て歸らず、七十の達者は願るその堂に昇り、萬千の羅漢は乃ち金口を信ず、度内の五常は方圓合はず、(四)界外の一車は大小入らず、是の故に三七に樹を觀じ、四十に機を待つ、初には四諦方等を轉じて、人法の垢穢を洗ひ、後には一雨の圓音を灑で草木の芽葉を露す、蓮華三昧に入て、性徳の不染を觀じ、白毫の一光を放つて修成の遍照を表するが如きに至ては、(五)會三歸一して、佛智の深多を讚し、(六)指本遮末して、成覺の久遠を談じ、寶塔騰踊して二佛同座し、娑界震裂して四唱一處なり、髻珠を賜ひ瓔珞を獻す、利智の鷲子は吾が佛の魔に變せるかと疑ひ、等覺の彌勒は子の年の父に過ぎたることを恠む、一實の理本懷を此の時に吐き、無二の道満足を今日に得たり。爾れば乃ち羊鹿斃れて露牛疾し、龍女出で、象王迎ふ、二種の行處は身心の室宅に宿り、十箇の如是は止觀の宮殿に安ず、寂光の如來は境智を融じて心性を知見し、應化の諸尊は行願を顧みて



分身相に随ふ、寂にして能く照なり、照にして常に寂なり、澄水の能く鑒るに似たり、瑩金の影像の如し、濕金即ち照影、照影即ち金水なり、即ち知んぬ、境即ち般若、般若即ち境なり、故に無境界と云ふ、即ち此れ實の如く自心を知るを名て菩提と爲す。故に大日尊、秘密主に告げて云く、秘密主、云何んが菩提とならば、謂く實の如く自心を知るなり、秘密主、是の阿耨多羅三藐三菩提は乃至彼の法として少分も得べきことあることなし、何を以ての故に、虚空の相は是れ菩提なり、知解の者もなく、亦た開曉の者もなし、何を以ての故に、菩提は無相なるが故に、秘密主、諸法は無相なり、謂く虚空の相なり。爾の時に金剛手復た佛に白して言さく、世尊誰か一切智を尋求する、誰れか菩提の爲に正覺を成ずる者、誰か彼の一切智を發起する、佛の言く、秘密主、自心に菩提と及び一切智を尋求す、何を以ての故に、本性清淨なるが故に、心は内に在らず外に在らず、及び中間にも心不可得なり、秘密主、如來應正等覺は青に非ず黃に非ず、赤に非ず白に非ず、紅に非ず紫に非ず、水精色に非ず、長に非ず短に非ず、圓に非ず方に非ず、明に非ず暗に非ず、男に非ず女に非ず、不男女に非ず、秘密主、心は欲界と同性に非ず、色界と同性に非ず、無色界と同性に非ず、天龍・夜叉・

乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人趣と同性に非ず、秘密主、心は眼界に住せず、耳鼻舌身意界に住せず、見に非ず、顯現に非ず、何を以ての故に、虚空相の心は諸の分別と無分別とを離れたり、所以は何んとなれば、性虚空に同なれば即ち心に同なり、性心に同なれば即ち菩提に同なり、是の如く秘密主、心と虚空界と菩提との三種は無二なり、此等は悲を根本と爲して、方便波羅蜜を満足す、是の故に、秘密主、我れ諸法を説くこと是の如し、彼の諸の菩薩衆をして菩提心清淨にして其の心を知識せしむ、秘密主、若し族姓の男、族姓の女、菩提を識知せんと欲は、當に是の如く自心を識知すべし、秘密主、云何んが自心を知るとならば、謂く若しは分段或は顯色或は形色或は境界、若しは色若しは受想行識、若しは我若しは我所、若しは能執若しは所執、若しは清淨若しは界、若しは處、乃至一切の分段の中に求むるに不可得なり、秘密主、此れ菩薩の淨菩提心門なり、初法明道と名くと。釋して曰く、謂く無相虚空の相及び非青非黃等の言は並に是れ法身眞如一道無爲の眞理を明す、佛此を説て初法明道と名けたまふ、智度には入佛道の初門と名く、佛道と言ふは金剛界宮大日曼荼羅の佛を指す、諸の顯教に於ては是れ究竟の理智法身なれども、眞言門に望むれば、是れ則ち初門なり、



大日世尊及び龍猛菩薩並に皆な明かに説きたまへり、疑惑すべからず。又た下の文に云く、所謂る空性は根と境とを離れて相も無く境界も無し、諸の戲論を越て虚空に等同なり、有爲無爲界を離れ、諸の造作を離れ、眼耳鼻舌身意を離ると、亦た是れ理法身を明すなり。無畏三藏の説かく、行者此の心に住する時、即ち釋迦牟尼の淨土毀せずと知り、佛の壽量長遠本地の身と上行等の從地涌出の諸の菩薩と一處に同會すと見る、對治道を修する者は、迹補處きよほろに隣ると雖も然れども一人をも識らず、是の故に、此の事を秘密と名く、此の理を證する佛を亦常寂光土の毘盧遮那と名く。大隋の天台山國清寺の智者禪師、此の門に依て止觀を修し、法華三昧を得て、即ち法華中論智度を以て所依と爲て一家の義を構ふ、此の乘の趣き大體此の如し。頌に曰はく、四觀前劫の菩薩は戲論と作る 此の心の正覺も亦た眞に非す 無爲無相にして一道淨く 非有非無にして不二を陳せり 心境絶泯して常寂の土なり 語言道斷して遮那の寶なり 身心也滅して大虛に等し 隨類影現して變化の仁あり 問ふ、是の如くの一法界一道眞如の理をば究竟の佛とやせん、龍猛菩薩の説かく、一法

界心は百非に非す、千是を背けり、中に非す、中に非れば天を背けり、天を背きぬれば演水の談足斷て止り、審慮の量手亡じて住す、是の如くの一心は無明の邊域にして明の分位に非すと。

第九極無自性住心

極無自性心とは、今此の心を釋するに二種の趣あり、一には顯略趣、二には秘密趣なり、顯略趣とは夫れ甚深なるはこ麼囉、峻高なるは蘇迷、廣大なるは虚空、久遠なるは芥石、然りと雖も芥石も竭きつ磧つ、虚空も量りつべし、蘇迷は十六萬、麼囉は八億那なり、近くして見難きは我が心、細にして空に遍するは我が佛なり、我が佛思議し難し、我が心廣にして亦た大なり、巧藝心迷ふて竿を擲げ、離律眼盲くして見ることを休む、禹が名舌斷え夸が歩み足削る、聲緣の識も識らず、薩埵の智も知らず、奇哉の奇、絶中の絶なるは其れ只だ自心の佛か。自心に迷ふが故に、六道の波鼓動し、心原を悟るが故に、一大の水澄靜なり、澄靜の水影萬像を落し、一心の佛諸法を鑒知す、衆生此の理に迷て輪轉絶ゆること能はず、蒼生ただ狂醉して自心覺ること能はず、大覺の慈父其の歸路を指したまふ、歸路は五百由旬、此の心は則ち都亭

こ  
麼囉 水と譯す、今は海水のこと。



なり、都亭は常の舎に非ず、縁に隨て忽に遷移す、遷移定れる處なし、是の故に自性なし、諸法自性無きが故に卑を去け尊を取る、故に真如受熏の極唱、勝義無性の秘告あり、一道を彈指に驚かし、無爲を未極に覺す、等空の心於是に始て起り、寂滅の果果還て因と爲る、是の因是の心、前の顯教に望むれば極果なり、後の秘心に於ては初心なり、初發心の時に便ち正覺を成ずること宜しくそれ然るべし、初心の佛その徳不思議なり、萬徳始て顯はれ一心稍現す、此の心を證する時、三種世間は即ち我が身なりと知れり、十箇の量等は亦た我が心なりと覺る、盧舍那佛始め成道の時第二七日に普賢等の諸大菩薩等の與りに廣く此の義を談じたまへり、是れ即ち所謂華嚴經なり、爾れば乃ち華嚴を苞て以て家となし、法界を籠て國となす、七處に座を莊り、八會に經を開く、此の海印定に入て法性の圓融を觀じ、彼の山王の機を照して、心佛の不一を示す、九世を刹那に攝し、一念を多劫に舒ぶ、一多相入し理事相通す、帝網をその重重に譬へ、錠光を其の隱隱に喩ふ、遂使して覺母に就て以て發心し、普賢に歸して證果す、三生に練行し百城に友を訪ふ、一行に一切を行じ一斷に一切を斷す、初心に覺を成じ、十信に道圓なりと云ふと雖も、因果異ならずして五位を経て車を馳せ、

海印定 大海の内に萬像を印現する如く菩薩入定して大海の如く機に應じて異を現することといふ。

相性殊ならずして十身を渾けて同歸す、斯れ則ち華嚴三昧の大意なり。故に大日如來秘密主に告げて言たまはく、所謂空性は根境を離れて相も無く境界も無し、諸の戲論を越て虚空に等同なり、有爲無爲界を離れ、諸の造作を離れ、眼耳鼻舌身意を離れて極無自性心生ずと。善無畏三藏の説かく、此の極無自性心の一句に悉く華嚴教を攝し盡すと。所以は何んとなれば、華嚴の大意は始を原ね終を要むるに真如法界不守自性隨縁の義を明す、杜順和上此の法門に依て五教華嚴三昧法界觀等を造り、弟子の智儼相續し、智儼の弟子法藏法師又た五教を廣して旨歸綱目及び疏を作れり、即ち此れ華嚴宗の法門一一の義章なり。頌に曰く、六韻

(一) 風水龍王は一ッ法界なり 真如生滅此の岑に歸す  
 (二) 輪華能く體大等を出す 器衆正覺極めて甚深なり  
 縁起の十立は互に主伴たり 五教を吞流するは海印の音なり  
 重重無碍にして帝網に喩ふ 隱隱たる圓融は錠光の心なり  
 華嚴三昧は一切の行なり 果界の十尊は諸刹に臨めり  
 此の宮に入ると雖も初發の佛なり (三) 五相成身追て尋ねべし

(一) 風水龍王 生滅所入の名にして第九の住心に當る  
 (二) 輪華 華と云ふは淨明輝珠を喩ふなり  
 (三) 五相成身 身の成就する五種の觀念の方法一通達菩提心二修菩提心三成金剛心四圓滿金剛身五佛身圓滿



經に云く、有爲無爲界を離れ、諸の造作を離れ、眼耳鼻舌身意を離れて極無自性心生ず、等虚空無邊の一切の佛法此に依て相續して生ず、祕密主、是の如くの初心をば、佛成佛の因と説きたまふ、業煩惱より解脱すれども、而も業煩惱の具依たり。金剛頂經に説かく、薄伽梵大菩提心普賢大菩薩一切如來の心に住したまふ、時に如來此の佛世界に満ちたまふこと、猶し胡麻の如し、爾の時に一切如來雲集し、一切義成就菩薩摩訶薩の菩提場に坐したまへるに於て、往詣して受用身を示現して、咸く是の言を作したまふ、善男子、云何んが無上正等覺菩提を證する、一切如來の眞實を知らずして諸の苦行を忍ぶや。時に一切如來義成就菩薩、一切如來の警覺に由て、即ち(二)阿婆婆那伽三摩地從り起て、一切如來を禮して白して言さく、世尊如來我に教示したまへ、云何んが修行せん、云何んが是れ眞實なる、是の如く説き已て一切如來異口同音に彼の菩薩に告げて言たまはく、善男子、當に觀察自心三摩地に住して自性成就の眞言を以て自ら恣に誦すべしと。守護國經に云く、爾の時に釋迦牟尼佛の言たはく、祕密主、我れ無量無數劫の中に於て是の如くの波羅蜜多を修集して、最後身に至て六年苦行せしかども阿耨多羅三藐三菩提を得て大毘盧遮那と成らざりき、道場に坐せしとき無量の化佛猶し油

(二) 阿婆婆那伽三摩地、無義身等持といふ此の定に入る者は能く散亂等の障を治すなり。

麻の如く虚空に遍滿したまふ、諸佛同聲にして我に告げて言はく、善男子、云何んが成等正覺を求むる、我れ佛に白して言さく、我れは是れ凡夫なり、未だ求處を知らず、唯だ願くは慈悲して我が爲に解説したまへ。是の時に佛同じく我に告げて言さく、善男子、諦かに聽け、當に汝がために説くべし、汝今宜しく應當に鼻端に於て月輪を想ひ、月輪の中に於て唵字の觀を作すべし、此の觀を作し已て、後夜分に於て阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり、善男子、十方世界の如恒河沙の三世の諸佛、月輪に於て唵字の觀を作さずして、成佛することを得といはば是の處り有ることなし、何を以ての故に、唵字は即ち是れ一切の法門なり、亦是れ八萬四千の法門の寶炬關鑰なり、唵字は即ち是れ毗盧遮那の眞身なり、唵字は即ち是れ一切陀羅尼の母なり、此れより能く一切如來を生ず、如來從り一切の菩薩を生ず、菩薩從り一切衆生を生ず、乃至少分所有の善根を生ずといふ此れなり、龍猛の菩提心論に云はく、夫れ迷途の法は妄想從り生ず、乃至展轉して無量無邊の煩惱を成じて、六趣に輪廻す、若し覺悟し已んぬれば、妄想止除して種種の法滅す、故に自性あることなし。復た次に諸佛の慈悲は眞從り用を起して、衆生を救攝したまふ、病に應じて藥を與へ諸の法門を施して、其の煩



惱に隨て、迷津を對治す、椘に遇て彼岸に達しぬれば、法已に捨つべし、自性無きが故に、乃至妄若し息む時は心源空寂なり、萬德斯に具し、妙用無窮なり、但し自心性を具し、此の心を具する者能く法輪を轉んじて自他俱に利す。又云はく、性淨本覺は三世間の中に皆な悉く離れずして、彼の三を熏習して一覺と爲して、一大法身の果を莊嚴す、是の故に名て因熏習鏡と爲す、云何んが名て三種世間と爲る、一には衆生世間、二には器世間、三には智正覺世間なり、衆生世間とは、謂はく異生性界なり、器世間とは謂はく所依止の土なり、智正覺世間とは謂はく佛菩薩なり、是を名て三と爲す、此の中の鏡とは謂はく輪多梨華鏡なり、輪多梨華を取て一處に安置して周ねく諸物を集むるに、此の華の熏に由て一切の諸物皆な悉く明淨なり、又明淨の物、華の中に現前して皆な悉く餘無く、一切の諸物の中に彼の華現前して、亦復た餘無きが如く、因熏習鏡も亦復た是の如し、一切の法を熏じて清淨覺と爲て悉く平等ならしむ、問ふ是の如きの一心の本法は至極の住心か、龍猛菩薩の説かく、三自一心の法は、一も一なること能はず、能入の一を假る、心も心なること能はず、能入の心を假る、實に我の名に非れども我に目く、亦た自の唱へに非れども自に契へり、我の如く名を立れども實の我に非ず、自の如く

唱を得れども實の自に非ず、玄玄として又た玄なり、遠遠として又た遠なり、是の如きの勝處は無明の邊域にして明の分位に非ずと。

第十秘密莊嚴心六

九種の住心は自性無し 轉深轉妙にして皆な是れ因なり

眞言密教は法身の説 祕密金剛は最勝の眞なり

五相五智法界體 四曼四印此の心に陳す

剎塵の渤駄は吾が心の佛なり 海滴の金蓮は亦た我が身なり

一一の字門萬像を含み 一一の刀金皆な神を現す

萬徳の自性輪圓して足れり 一生に莊嚴の仁を證することを得べし

經に云はく、復た次に秘密主、眞言門に菩薩の行を修行する諸の菩薩は、無量無數百千俱胝那庾多劫に積集せる無量の功德智慧と、具さに諸行を修する無量の智慧方便とを皆な悉く成就すと。解して云はく、此は初めて眞言に入る菩薩の功德を歎す。又云はく爾の時に毘盧遮那世尊、一切如來一體速疾力三昧に入て、自證の法界體性三昧を説て言たまはく、我れ本不生を覺り、語言の道を出過し、諸過解脫することを得、因縁



を遠離し、空は虚空に等しと知て、如實相の智生ず、已に一切の暗を離ぬれば第一實無垢なりと。解して云はく、此の頌は文約にして義廣く言浮ことばむで心ろ深し、面に非んば説き難し、又た百字輪十二字等の眞言觀法三摩地門、及び金剛界三十七尊四智印の三摩地あり、即ち是れ大日如來の極秘の三昧なり、文廣くして具さに述ぶること能はず。又た龍猛菩薩の菩提心論に云はく、第三に三摩地と云ふは眞言行人はの如く觀じ已て云何んが能く無上菩提を證する、當に知るべし法爾に應に普賢大菩提心に住すべし、一切衆生は本有の薩埵なれども、貪瞋癡の煩惱の爲に縛せらるゝが故に、諸佛の大悲善巧智を以て此の甚深秘密瑜伽を説て、修行者をして内心の中に於て日月輪を觀せしむ、此の觀を作すに由て本心を照見するに、湛然清淨なること、猶し満月の光虚空に遍じて分別する所無きが如し、亦是は無覺了と名け、亦是淨法界と名け、亦是實相般若波羅蜜海と名く、能く種種無量の珍寶三摩地を合すること、猶し満月の潔白分明なるが如し、何となれば、爲く一切有情は悉く普賢の心を合せり、我れ自心を見るに、形月輪の如し、何んが故にか月輪を以て喩と爲とならば、爲く満月圓明の體は即ち菩提心と相類せり、凡そ月輪に一十六分あり、瑜伽の中の金剛薩埵より金剛拳に至るまで十六大

菩薩者あるに喩ふ、三十七尊の中に於て、五方の佛位に各の一智を表す、東方の阿闍佛は大圓鏡智を成するに由て亦た金剛智と名く、南方の寶生佛は平等性智を成するに由て亦た灌頂智と名く、西方の阿彌陀佛は妙觀察智を成するに由て亦た蓮華智と名け、亦た轉法輪智と名く、北方の不空成就佛は成所作智を成するに由て亦た羯磨智と名く、中方の毗盧遮那佛は法界智を成するに由て本と爲す、已上の四佛智より四波羅蜜菩薩を出生す、四菩薩は即ち金寶法業なり、三世一切の諸の聖賢生成養育の母なり、於是に印成せる法界體性の中より四佛を流出す、四方の如來に各の四菩薩を攝す、東方の阿闍佛に四菩薩を攝す、金剛薩埵・金剛王・金剛愛・金剛善哉を四菩薩と爲す、南方の寶生佛に四菩薩を攝す、金剛寶・金剛光・金剛幢・金剛笑を四菩薩と爲す、西方の阿彌陀佛に四菩薩を攝す、金剛法・金剛利・金剛因・金剛語を四菩薩と爲す、北方の不空成就佛に四菩薩を攝す、金剛業・金剛護・金剛牙・金剛拳を四菩薩と爲す、四方の佛の各の四菩薩を十六大菩薩と爲す、三十七尊の中に於て、五佛四波羅蜜及び後の四攝八供養を除て、但し十六大菩薩の四方の佛の所攝爲るを取る。又摩訶般若經の中に、内空より無性自性空に至るまで、亦た十六の義あり、一切有情の心質の中



に於て、一分の淨性あり、衆行皆な備れり、其の體極微妙にして皎然明白なり、乃至六趣に輪廻すれども、亦た變易せず、月の十六分の一の如し、凡そ月のその一分の明相、若し合宿の際に當んぬれば、但し日光のために其の明性を奪はる、所以に現せず、後ち起つ月の初より日日漸く加して十五日に至て圓滿無礙なり、所以に觀行者、初に阿字を以て本心の中の分の明を發起して、只し漸く潔白分明ならしめて無生智を證す。夫れ阿字とは一切諸法本不生の義なり、毘盧遮那經の疏に准せば阿字を釋するに、具に五義あり、一には阿字は證菩提の義なり、二には阿字は佛知見を開く、即ち覺て菩提心を開く、初の阿字の如し、是れ菩提心の義なり、示の字は佛知見を示す、第二の阿字の如し、是れ菩提心の義なり、悟の字は佛知見を悟る、第三の阿字の如し、是れ證菩提の義なり、入の字は佛知見に入る、第四の阿字の如し、是れ般涅槃の義なり、總じて之を言はゞ具足成就の第五の惡字なり、是れ方便善巧圓滿の義なり。即ち阿字は菩提心の義なることを讚するなり。頌に曰はく、

八葉の白蓮一肘の間に 阿字素光の色を炳現す

禪智俱に金剛縛に入れて 如來の寂靜智を召入す

扶れ阿字に會ふ者は皆な是れ決定して之を觀すべし、當に圓明の淨識を觀すべし、若し纔に見るをば則ち眞勝義諦を見ると名け、若し常に見れば則ち菩薩の初地に入る、

若し轉うたた漸く增長すれば、則ち廓法界に周わく量虛空に等し、卷舒自在にして、當に一切智を具すべし、凡そ瑜伽觀行を修習する人は、當に須く具さに三密の行を修して五相成身の義を證悟すべし、言ふ所の三密とは、一に身密とは、契印を結んで聖衆を召請するが如きなり、二に語密とは、密かに眞言を誦して文句をして丁了分明ならしめて謬誤無きが如きなり、三に意密とは、瑜伽に住して白淨月の圓滿に相應し菩提心を觀するが如きなり。次に五相成身を明さば、一には是れ通達心、二には是れ成菩提心、三には是れ金剛心、四には是れ金剛身、五には是れ無上菩提を證して金剛堅固身を獲るなり、然れども此の五相具さに備れば方に本尊の身と成るなり、其の圓明は則ち普賢の身なり、亦た是れ普賢の心なり、十方の諸佛と之れ同じ、亦た乃ち三世の修行證に前後あれども、達悟に及び已んぬれば去來今なし、凡人の心は合蓮華の如く、佛心は滿月の如し、此の觀若し成すれば、十方國土の若し淨、若し穢、六道の含識三乘の行位、及び三世の國土の成壞衆生の業の差別、菩薩の因地の行相三世の諸佛悉く中に於て現じ、本尊の身を證して普賢の一切の行願を滿足す、故に大毘盧遮那經に云はく、是の如くの眞實心は故佛の宣説したまふ所なりと。問ふ前に二乘の人は法執有るが故に、成佛する



ことを得ずと言ふ、今復た菩提心を修せしむる三摩地とは云何んが差別なる、答ふ二乗の人は法執あるが故に久久に理を證し沈空滯寂して、限るに劫數を以てし、然して大心を發し、又た散善門の中に乘じて無數劫を經、是の故に厭離すべきに足れり、依止すべからず、今眞言行人は、既に人法の上執を破して、能く正しく眞實を見るの智なりと雖、或は無始の(二)間隔の爲めに未だ如來の一切智智を證すること能はず、故に妙道を欲求し、次第を修持して凡從り佛位に入る者なり、即ち此の三摩地とは能く諸佛の自性に達し、諸佛の法身を悟り、法界體性智を證して、大毗盧遮那佛の自性身受用身變化身等流身を成ず、爲く行人未だ證せざるが故に、理宜しく之を修すべし、故に大毘盧遮那經に云はく、悉地は心從り生ずと、金剛頂瑜伽經に説くが如し、一切義成就菩薩初て金剛座に坐し、無上道を取證して、遂に諸佛の此の心地を授くることを蒙て、然して能く果を證す、凡そ今の人若し心決定して教の如く修行すれば、座を起たずして三摩地を現前し、應に於是に本尊の身を成就すべし、故に大毘盧遮那經の供養次第法に云はく、若し勢力の廣く増益するなくんば、法に住して但し菩提心を觀すべし、佛此の中に萬行を具して淨白純淨の法を満足すと説きたまふ、此の菩提心は能く一切諸佛の

(二) 間隔。煩憒迷  
闇のこと。

功德の法を包藏するが故に、若し修證し出現すれば則ち一切の導師と爲る、若し本に歸すれば則ち是れ密嚴國土なり、座を起たずして、能く一切の佛事を成ず、菩提心を讚じて曰はく、

若し人佛慧を求めて 菩提心に通達すれば

父母所生の身に 速に大覺の位を證す

問ふ、已に頌の詞を聞つ、請ふその義を説け、答ふ、眞言教法は一一の聲字、一一の言名、一一の句義、一一の成立、各の無邊の義を具せり、切を歷れども窮盡し難し、又た一一の字に三義を具せり、所謂る聲字實相なり、又た二義を具す、字相字義是れなり、又た一一の句等に淺略深秘の二義を具す、帥爾に談じ難し、若し實の如く説かば小機は疑を致し謗を生じて、定んで一闡提無間の人と爲らん、是の故に應化の如來は秘して談せず、傳法の菩薩は置て論せず、意此に在り、故に金剛頂經に説かく、此の毗盧遮那三摩地の法は未灌頂の者に向て一字をも説くことを得ざれ、若し本尊の儀軌眞言は、縱令ひ同法の行者なりと雖も、輒く説くことを得ざれ、若し説かば現前には天に中り殃を招き、後には無間獄に墮せんと云謹んで勸誡を承んぬ敢て遠越せじ、重ねて請ふ初の頌



の文を示説したまへ、九種住心無自性、轉深轉妙皆是因と云ふは、此の二句は前の所説の九種の心は皆な至極の佛果に非すと遮す、九種と言ふは異生羝羊心乃至極無自性心是れなり、中に就て初の一つは凡夫の一向行惡行不修微少善を擧ぐ、次の一は人乘を顯し、次の一は天乘を表す、即ち是れ外道なり、下も下界を厭ひ、上も生天を欣て、解脱を願樂すれども遂に地獄に墮す、已上の三心は皆な是れ世間の心なり、未だ出世と名けず、第四の唯蘊已後をば聖果を得と名く、出世の心の中に唯蘊拔業は是れ小乗教、他縁以後は大乗心なり、大乘に於て前の二は菩薩乘、後の二は佛乘なり、此の如きの乘乘自乘に佛の名を得れども、後に望むれば戲論と作る、前前は皆な不住なり、故に無自性と名く、後後は悉く果に非ず、故に皆な是れ因と云ふ、轉轉相望するに各各に深妙なり、所以へに深妙といふ、眞言密教法身説とは、此の一句は眞言の教主を顯す、極無自性以外の七教は皆な是れ他受用應化佛の所説なり、眞言密教兩部の秘藏は是れ法身大毗盧遮那如來自眷屬の四種法身と、金剛法界宮及び眞言宮殿等に住して、自受法樂の故に演説したまふ所なり、十八會の指歸等に其の文分明なれば、更に誠證を引かず、秘密金剛最勝眞とは、此の一句は眞言乘教の諸乘に超て究竟眞實な

ることを示すなり。

## 國譯秘藏寶鑰卷の下終











(一) 七宗 俱舍  
 成實・律・法相・三  
 論・天台・華嚴  
 (二) 三四 三は  
 聲・緣・善の三乘  
 四は法・三・天・華  
 の四宗  
 (三) 周比 論語に  
 君子は周うして比  
 らず小人は比て周  
 れからずと  
 (四) 善婆 能活ま  
 譯す、佛在世の時  
 の醫王、佛在の時  
 (五) 鈎挽野葛 毒  
 草の名、無病も口  
 中腹内に入れば身  
 命を絶つ  
 (六) 木黄金丹 木  
 黄さは白木黄精、木  
 金丹は仙薬、何れ  
 も良薬  
 (七) 密號名字 曼  
 荼羅列聖の從心流  
 出の聖者の名字  
 (八) 莊嚴 眞如無相  
 の性を眞如無相の  
 意に性性を藏するの  
 意  
 (九) 闍提 無佛性  
 (一〇) 自心佛 自心  
 本具の十界曼荼羅  
 の毗盧遮那佛  
 (一一) 無量乘 佛十法  
 界暨差別の顯教の法

運載するの乗なり。宗に名づくれば則ち(一)七宗、鑣を並べて和漢に馳せ、車を言へば  
 則ち(二)三四轍を雙べて東西に遊ぶ。各の己れが鞍を美めて、己が楯を忘れ、並びに他の  
 疵を發して他の善を蔽くす、是非紛紜として勝負不定なり。吠聲の徒、朋黨相ひ扇ぎ、  
 雷缶の響、(三)周比疇瘡す。是れ則ち方を設くるの本懐にあらず、還た醫王の雅意に乖  
 けり。譬へば寫を惡むで、補を求め、藥を愛して毒を惡むが如し、誰れか知らん病に  
 體は悉く藥、方に乖けば並びに毒なることを、嗚呼痛ましき哉、嗚呼痛ましき哉。縱  
 使ひ(四)者婆は更に生れ、神農は再び出づとも、豈に此れを棄て彼れを取り、毒を惡み  
 藥を愛せんや、(五)鈎挽野葛も病に應ずれば妙藥なり、何に況んや、(六)木黄金丹は誰  
 れか除病延算の積なからん。苦しい哉、末學は大虚を小室に逃し、鳴鐘を掩耳に偷む、  
 水を惡み火を愛し、心を捨て色を愛することを。若し能く明かに(七)密號名字を察し、  
 深く(八)莊嚴秘藏を開く時は、則ち地獄、天堂、佛性(九)闍提、煩惱菩提、生死涅槃、邊  
 邪中正、空有偏圓、二乘一乘、みな是れ(一〇)自心佛の名字なり、焉れをか捨て焉れをか  
 取らん。然りと雖も、秘號を知るものは猶し鱗角の如く、自心に迷へる者は既に牛毛  
 に似たり、是の故に大慈は此の(一一)無量乘を説いて一切智に入らしむ。若し豎に論すれ

(一) 大度 大度量  
 なり  
 (二) 灌頂の職位  
 我即大日法王の入  
 壇儀式なり  
 (三) 無盡莊嚴の寶  
 藏 直往頓悟の秘  
 密法門  
 (四) 大毗盧遮那經  
 住心品の文なり  
 (五) 秘密主 金剛  
 薩埵  
 (六) 一切智智 佛  
 の無分別智  
 (七) 因一切智智  
 を得る因なり  
 (八) 根 一切智智  
 の體  
 (九) 究竟 一切智  
 智の活動方面なり  
 (一〇) 相續の次第  
 淨菩提心なる十心  
 の漸々増明の次第

ば、則ち乘乘差別にして淺深あり、横に觀すれば智智平等にして一味なり。惡平等の  
 者は、未得を得とし不同を同とす。善差別の者は、分滿、不二、即離、不謬なり。之  
 れに迷ふ者は藥を以て命を天し、之れに達する者は藥に由りて仙を得。迷悟己れにあ  
 り執なくして到る、有疾の菩薩、迷方の狂子、慎ますんばあるべからず。秘密曼荼羅  
 金剛心殿の如きに至りては、是れ則ち最極究竟の心王如來大毘盧遮那自性法身の住處  
 なり。若し衆生ありて、輪王の種性に生じ、(一)大度有て勇銳にして、前の諸の住宮を  
 樂はずんば、則ち大日所乘の一體速疾神通の寶格を許し、具さに(二)灌頂の職位を授け  
 て、剎塵の(三)無盡莊嚴の寶藏を受用せしむ。淺深優劣を具さに列ぬること後の如し。  
 (四)大毗盧遮那經に、(五)秘密主、佛に問ふて言く、世尊云何んが如來應供正遍知(六)一切  
 智智を得たまふ。彼れ一切智智を得て、無量衆生のために廣演分布し、乃至是の如く  
 の智慧は何を以てか(七)因とし、云何んが(八)根とし、云何んが(九)究竟とする。大日尊答へ  
 たまはく、菩提心を因とし、大悲を根とし、方便を究竟となす。秘密主、云何んが菩  
 提とならば、謂く實の如く自心を知る。また問ふ、菩提に發趣する時、心の所住の處  
 の(一〇)相續の次第に幾く種かある、佛具さに之れを答へたまふ。故に經の初品を名づけ



(一)住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心  
 (二)住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心  
 (三)住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心  
 (四)住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心  
 (五)住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心  
 (六)住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心  
 (七)住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心  
 (八)住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心  
 (九)住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心  
 (十)住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心 住心

て(一)住心といふ。今この經に依りて、眞言行者の(二)住心の次第を顯す、顯密二教の差別もまた此の中にあり。住心は無量なりと雖も、且く十綱を擧げて之れに衆毛を攝す。

- 一には異生羝羊住心。
- 二には愚童持齋住心。
- 三には嬰童無畏住心。
- 四には唯蘊無我住心。
- 五には拔業因種住心。
- 六には他緣大乘住心。
- 七には覺心不生住心。
- 八には一道無爲住心。
- 九には極無自性住心。
- 十には秘密莊嚴住心。

異生羝羊住心第一

(一)我々所執已 常一主宰の我を計に  
 (二)我々の我を計に 常一主宰の我を計に  
 (三)我々の我を計に 常一主宰の我を計に  
 (四)我々の我を計に 常一主宰の我を計に  
 (五)我々の我を計に 常一主宰の我を計に  
 (六)我々の我を計に 常一主宰の我を計に  
 (七)我々の我を計に 常一主宰の我を計に  
 (八)我々の我を計に 常一主宰の我を計に  
 (九)我々の我を計に 常一主宰の我を計に  
 (十)我々の我を計に 常一主宰の我を計に

異生羝羊心とは、此れ則ち凡夫の善惡を知らざるの迷心、愚者の因果を信せざるの妄執なり。(一)我我所執を常に胸臆に懷き、(二)虛妄分別を鎮へに心意に蘊めり。陽燄を逐ふて渴愛し、華燭を拂ひて身を焼く。既に羝羊の草煙を思ふに同じく、還た孩童の水月を愛するに似たり。曾て(三)我の自性を觀せず、何ぞ能く(四)法の實諦を知らん、教に違し理に違すること此れより生ず。冥より冥に入り、相續して斷せず、循廻を車輪に比し、無端を環玉に均しくす。昏夜長遠なり、金鷄何ぞ響かん、雲霧變難たり、日月誰れか蹇げん。來途始めなし、歸舍幾くの日ぞ。(五)火宅の八苦を覺らずして、牽ろ(六)罪報の三途なることを信せんや。遂に乃ち(七)滋味を(八)水陸に嗜み、(九)琴色を乾坤に耽る鷹を放ち犬を催して、填腹の禽命を斷ち、馬を走らせ弓を彎いて快舌の獸身を殺す。澤を涸して鱗族を竭し、藪を傾けて羽毛を斃す、合せ圍むを以て樂とし、多く獲るを以て功とす。網を解くの仁みを顧みず、豈に辜に泣くの悲しみをを行はんや。荒煙を度ること無くして、晝夜に樂むこと只し。或は他の財物を抄掠し、人の妻妾を奸犯す。(一〇)四種の口過と(一一)三種の心非は、人法を誹謗し聞提を播植す。時として作さざることなく、日として行せざることなし。忠ならず孝ならず、義もなく慈もなし、五常も



(二) 邪師 六師外道、十六知見等。(三) 衆生 俱舍の光記に生るれば必ず死し、生さざるべし故に衆生と云ふ。(四) 善無畏三藏 支那に始めて大日經を傳へし人、大疏の述者也。(五) 心相續 一毒の淨菩提心は漸々増し曾て斷絶せず、金剛輪際に至る、故に心相續と云ふ。(六) 智度論 第十卷に十八空の中の無始空を説く、此の意を取らざる。(七) 法 五蘊の法體也。(八) 不可得 無の義也。(九) 薩埵 有情と譯す。(一〇) 六道 地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天。(一一) 三界 過去・現在・未來。

(一) 所計の我 分別心なり。(二) 十六知見 六我を云ふ、即ち我者と衆者と命者と生者と養育者と衆數者と人者と作者と使起者と起者と受者と知者と見者と壽者と智と智度論の卅五に説く。(三) 諸蘊 五蘊なり。(四) 正眼 法眼淨とも云ふ、人無我の無漏の正智の別名。(五) 我は身の中云 是れ十六知見の中の二三を擧げて餘計を顯す、即ち我我所執の邪智を云ふ。(六) 水草 食物なり。(七) 麤惡 惡口なり。(八) 離間 兩舌なり。(九) 無義 綺語なり。

羅網すること能はず、三乘も牢籠することを得ず。(二) 邪師を祖として習ひ邪教に依り憑る、曾て出要を求めずして一向眼前を營む。是の如くの(三) 衆生を名づけて愚童羗羊といふ。故に、大日世尊は秘密主に告げて言く、秘密主、無始生死の愚童凡夫は、我が名と我が有とに執着して、無量の我分を分別す、若し彼れ我の自性を觀せずんば我所生ず。また云く、秘密主、愚童凡夫の類は猶し羗羊の如しと。  
 注すらく、(三) 善無畏三藏釋して云く、此れより已下の十種の住心は、佛(四) 心相續の義を答へたまふ。淨心最初の生起の由へを明さんと欲ふが故に、先づ愚童凡夫の違理の心を説きたまへり。無始生死とは、(五) 智度論に云く、世間の若しは衆生、若しは(六) 法、皆始めあることなし、經の中に佛の言く、無明に覆はれ愛に繋がれて、生死に往來すること始め(七) 不可得なり、乃至菩薩は無始もまた空なりと觀すれども、而も有始の見の中に墮せず。愚童とは具には愚童(八) 薩埵と云ふ、謂く(九) 六道の凡夫なり、實諦の因果を知らず、心に邪道を行じ苦因を修習す、(一〇) 三界に戀著して、堅執して捨てず、故に以て名とす。凡夫とは、正譯には異生と云ふべし、謂く無明に由るが故に、業に隨ひ報を受けて自在なることを得ず、種種の趣の中に墮して、色心の像類各各に差別せ

り、故に異生といふなり。其の(一) 所計の我は、但だ語言のみありて實事なし、故に我が名に執著と云ふ、我有と言つば即ち是れ我所なり、是の如くの我我所の執は、(二) 十六知見等の如く、事に隨ひて差別すること無量に不同なり、故に名づけて分とす。次に虛妄分別の所由を釋するが故に、若し彼れ我の自性を觀せずんば則ち我我所生すと云ふ。若し彼れ(三) 諸蘊は皆悉く衆緣より生ずと觀察せば、是の中に何者か是れ我ならん、我は何れの所にか住せん、蘊に即し蘊に異し相在すとやせん、若し能く是の如く諦かに求むるときは、當さに(四) 正眼を得べし。然るに彼れ自ら觀察せず、但し展轉相承して久遠より已來、此の見を祖とし習ひて、(五) 我は身の中に在りて能く所作あり、及び諸根を長養し成就す、唯此れのみ是れ究竟の道なり、餘は皆妄語なりと謂へり、是れを以ての故に、名づけて愚童となすなり。羗羊は是れ畜生の中に性最も下劣なり、但し(六) 水草及び姪欲の事を念ふて、餘は知るところなし、故に天竺の語法として、以て善惡因果を知らざる愚童凡夫の類に喩ふ。此れは是れ羗羊凡夫なり、所動の身口意業は皆これ惡業なり、身の惡業に三つあり謂く殺盜姪なり、口の惡業に四つあり、謂く妄語(七) 麤惡(八) 離間(九) 無義・是れなり、意の惡業に三つあり、謂く貪瞋癡是れなり。







(九) 有情の業力  
 (一〇) 妙高須彌山の部分と水より出づる部分とを合する故に十六萬となる  
 (一一) 雙高を圍む第二の山なり  
 (一二) 寶樹 第三の山  
 (一三) 善見 第四の山  
 (一四) 馬耳 第五の山  
 (一五) 象鼻 第六の山  
 (一六) 魚山 第七の山  
 (一七) 鐵輪圍山 第八の山  
 (一八) 鹹水 第九の山  
 (一九) 扶葉 蓮華の異名  
 (二〇) 金輪 五輪最上の金輪なり  
 (二一) 大洲等 八洲・中洲・小洲なり  
 (二二) 金 黄色にして北方にあり  
 (二三) 銀 白色にして東方にあり

結て金と成る、厚さ三億二萬踰繕那なり、廣さは水輪に等し、周圍は三倍せり、水輪に依りて住す。

九山八海の頌に曰く、

(一) 妙高は十六萬なり (二) 雙と(三) 軸と其の邊を繞れり

(四) 寶樹と(五) 善見とは 金色にして青天に入れり

(六) 馬耳と(七) 象鼻と (八) 魚山とは(九) 鐵の前きにあり

六海の廣さは八萬なり 第七は一千餘なり

(一〇) 鹹水は三億に剩れり 内の七には(一一) 扶葉出たり

注すらく、九山八海とは、(一二) 金輪の上に於て九の大山あり、山の間に入海あり、妙高山王は中に處して住せり、餘の八は周帀して妙高山を繞れり、八山の中に於て、前の七をば内と名づけ、第七の山の外に(一三) 大洲等あり、此の外に復た鐵輪圍山ありて一世界を圍れり。妙高山王の水に入り水を出ることは、竝に各の八萬踰繕那の量なり、四寶をもつて合成せり、次の如く四面の北東南西は(一四) 金・(一五) 銀・(一六) 吠瑠璃・(一七) 頗胝迦寶なり、寶の威徳に従ひて色は空に顯れたり、故に(一八) 瞻部洲の空は吠瑠璃の色に似たり。

(一八) 吠瑠璃 青色にして南方にあり  
 (一九) 頗胝迦 赤色にして西方にあり  
 (二〇) 瞻部洲 四洲にして南方にあり  
 (二一) 妙高山 中心にして南方にあり  
 (二二) 吾人の生存せる地球は是れに當る、詳しく本文にあり  
 (二三) 須彌山 内海の中間の海水中の第一の蓮華と譯す  
 (二四) 物頭華 蓮華と譯す  
 (二五) 鉢頭華 蓮華と譯す  
 (二六) 優鉢華 蓮華と譯す  
 (二七) 芬茶 蓮華と譯す  
 (二八) 白蓮 蓮華と譯す  
 (二九) 八功德水 俱舍論の第十一に依る、詳細は就て見るべし  
 (三〇) 持軸 俱舍論光記十一には、持軸は山の峰の上へ聳えたること猶能く持するが故なり  
 (三一) 橋木 瑜伽略纂の一に云く、諸

り。是の如くの山海は何に従つてか生ずるや、是れは諸の有情の業、増上力をもて、復た大雲は起て金輪の上に雨ふる、滴り車軸の如し、積れる水は奔濤して即ち山等となる、起世經に云く、此の山及び七金山の上に皆寶樹ありて莊嚴せり。

第一の山といは、梵には毘駄羅山と云ふ、此には持雙と云ふ、山の頂に雙跡を有するが故なり、等しく七金山と名づくることは、皆純金の所成なればなり、水に入る量は

等く並びに皆八萬踰繕那なり、諸の寶樹多し、此の山の水を出で及び山頂の厚さの量は

は皆四萬踰繕那なり、自下の山の體及び水に入る量は準じて知れ。持雙山の(一) 内海の深廣は、並びに皆八萬踰繕

那なり、八功德水は其の中に盈滿せり、(二) 物頭華・(三) 鉢頭華・(四) 優鉢華・(五) 芬茶

利華ありて遍く水上に覆へり。(六) 八功德水とは、一には甘、二には冷、三には爽、四には輕、五には

傷けず、自下の七つの大海の深量も前に同じ、(七) 大海の中の八功德水は四色蓮華も準知すべし。

第二の山とは、梵に伊沙駄羅山と云ふ、此には(八) 持軸と云ふ、峰は車軸の如くなればな

り、水を出づること二萬踰繕那なり、厚の量もまた然り。持軸山の内海の廣さは四萬踰繕

那なり、八功德水、四色の蓮華は前の如し。

第三の山とは梵には竭地洛迦山と云ふ、此れ寶樹の名なり、此の方の(九) 橋木に似たり、











